埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第322集

秩父郡長瀞町

中　野　遺　跡

診療所併設型介護老人保健施設関係埋蔵文化財発掘調査報告

２００６

医療法人　社　団　医　新　会
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

遺跡遠景（対岸から東方向を望む）

縄文時代晩期の住居跡

序

長瀞町は埼玉県の西北部、秩父地方の東の入り口に位置し、国の名勝及び天然記念物に指定されている「長瀞」やロウバイの咲く宝登山など、豊かな自然環境に抱かれた、埼玉県を代表する観光地です。年間200万人以上の人々が訪れ、春の桜、ツツジ、夏のキャンプ、川遊び、秋の紅葉、冬のロウバイなどに興じ、四季折々の自然や歴史と文化に親しむことのできる魅力的な町です。

このたび医療法人社団医新会では、カタクリの里として知られる長瀞町岩田に診療所併設型介護老人保健施設を建設することとなりました。事業地内には縄文時代をはじめとする先人の生活跡が多く残されており、これらの埋蔵文化財の取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課と関係諸機関が慎重に協議を進めてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなりました。発掘調査は、医療法人社団医新会の委託を受けて、当事業団が実施しました。

今回の発掘調査では、縄文時代後・晩期の竪穴住居跡や集石土壙などが発見され、縄文土器、打製石斧、石剣、石棒などの遺物が多数出土しました。とくに、事例の少ない縄文時代の土面や遠隔地との交易によってもたらされたヒスイ玉など、当時の人々の暮らしぶりや精神世界を知ることのできる貴重な遺物も見つかっており、この地の歴史に新たな資料を加えることができました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました医療法人社団医新会、長瀞町教育委員会、並びに地元関係者各位に対しまして、深く感謝申しあげます。

平成17年11月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　　福　田　陽　充

縄文人の心をもって、医療と介護の世界を変えたい

医療法人医新会理事長　横　山　博　美

私ども医療法人医新会は、東京の板橋区大山町と千代田区神田岩本町において、医療施設と介護施設を、26年有余にわたり運営して参りました。このたび理事長である私が長年にわたりあこがれの地であった長瀞町の岩田地区において、介護型老人保健施設　縄文の里　長瀞倶楽部（81床）と有床診療所長瀞医新クリニック（19床）を建設する許可を頂き、また大澤町長はじめ多くの町役場関係者の皆様、そして、岩田地区の地主の皆様方、地区長さんや住民の皆様方に、ご理解とご協力を賜り、心より御礼を申し上げます。

ところで、建設予定地は遺跡包蔵地ということで、試掘調査しましたところ、縄文時代の土器の破片などが発掘され、本格的な調査を長瀞町教育委員会に依頼し、その結果、縄文中期・縄文後期・縄文晩期の土器や住居跡が発掘され、記録保存することとなりました。通常であれば工期の遅延や発掘作業に関わる費用の捻出など、頭を悩ますところですが、私は大変喜ばしい出来事と心の底から思いました。縄文人は狩猟民族であり、住み心地のよい地を選んで生活をしており、いま見直されているスローフーズ・スローライフの実践者のさきがけであったといわれております。また芸術的センスにもあふれ、人の顔に形作られた土面も出土しました。その縄文人が長く生活したこの土地で、私が生涯、聴診器を握って生活できることは、誠に望外の喜びです。時には竹藪に、あるいは荒川に、時には畑に、山にと豊かな自然と交わり、たまにはゴルフ場へ散歩気分で出かけるというのも大きな楽しみの一つです。夏暑くて、冬寒いというめりはりのある気候、春夏秋冬の四季折々の景色のうつろいを、老人保健施設の入所者の皆様や入院中の患者さんたちにも、是非体険して頂き喜んでもらえると確信しております。

2006年10月1日の開設を目指し、現在、岩田地区の皆様のご協力とご理解のもと、ビルを建てておりますが、今後の私どもの活動は、縄文人の大らかな心意気を基盤としながら、長瀞町の町民の皆様のご指導とご支援を心の栄養とし頑張って参りたいと存じます。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

例　言

1．本書は、秩父郡長瀞町に所在する中野遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号と代表番地、および発掘届けに対する指示通知は、以下の通りである。
中野遺跡（ＮＫＮ）
埼玉県秩父郡長瀞町大字岩田582番地他
平成17年６月14日付け教文第3－133号

3．発掘調査は、診療所併設型介護老人保健施設建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が調整し、医療法人社団医新会の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．本事業は、第Ⅰ章の組織により実施した。

5．発掘調査は、中村倉司、村端和樹が担当し、平成17年６月27日～平成17年8月31日まで実施した。

6．整理・報告書作成作業は大谷　徹が担当し、平成17年10月３日～11月30日まで実施した。

7．遺跡の基準点測量は、（株）シン技術コンサルに委託した。

8．発掘調査における写真撮影は中村、村端が、遺物の写真撮影は大屋道則が行った。

9．出土遺物の整理および図版の作成は、金子直行が主に行い、石器については村端と西井幸雄が行った。

10．石材のX線回析分析は、大屋が行った。

11．本書の執筆は金子が行い、Ⅰ－1を埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が、Ⅳ－6－(2) を村端が行った。

12．本書の編集は、大谷が担当した。

13．本書にかかる資料は、平成18年度4月以降、長瀞町教育委員会が管理・保管する。

14．本書の作成にあたり、以下の機関・諸氏から御教示、御協力をいただいた。記して感謝を表します。
長瀞町教育委員会　小澤　守

凡　例

1．本書中におけるＸ・Ｙの数値は、世界測地系（新測地系）による平面直角座標第Ⅸ系（原点：北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値（ｍ）を示し、各挿図における方位は、すべて座標北を示している。

2．遺跡における調査は、前記座標系に基づき10ｍ×10ｍのグリッドを設定して行った。

3．グリッドの名称は、北西杭を基準として東西方向西へＡ～、南北方向南へ1～を付した。

4．挿図の縮尺は、各図版中に指示した。
全体図……1/250
遺構図……1/30・1/60・1/120
土器実測図……1/4
土器拓本図……1/3
土製品……1/2
石器……1/1・1/2・1/3・1/4

5．遺構の表記記号は、以下のとおりである。
ＳＪ　住居跡　ＳＫ 土壙
ＳＣ　集石土壙　ＳＤ 溝跡
Ｐ　　ピット

6．遺構断面図に表記した水準の数値は、海抜標高で、単位はｍである。

7．本書に使用した地図は、国土地理院発行の1/50,000、長瀞町発行の1/2,500を用いた。

目　次

口絵
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織 …… 2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3
Ⅲ　遺跡の概要 …… 6
Ⅳ　発見された遺構と遺物 …… 10
　1．住居跡 …… 10
　2．土壙 …… 21
　3．集石土壙 …… 26
　4．溝跡 …… 26
　5．ピット跡 …… 26
　6．グリッド出土遺物 …… 37
　　（1）縄文土器 …… 37
　　（2）石器 …… 43
Ⅴ　まとめ …… 51
付編　中野遺跡出土の石製小玉の石材分析 …… 60

挿 図 目 次

第１図　埼玉県の地形図 …… 3
第２図　周辺の遺跡 …… 4
第３図　遺跡周辺の地形図 …… 7
第４図　調査区全体図 …… 8・9
第５図　第１号住居跡 …… 11
第６図　第１号住居跡遺物分布図 …… 12
第７図　第１号住居跡出土遺物 …… 13
第８図　第２号住居跡 …… 15
第９図　第２号住居跡遺物分布図 …… 16
第10図　第２号住居跡出土遺物（1） …… 17
第11図　第２号住居跡出土遺物（2） …… 18
第12図　第２号住居跡出土遺物（3） …… 19
第13図　土壙（1） …… 21
第14図　第１号土壙出土遺物 …… 22
第15図　第22号土壙出土遺物 …… 23
第16図　土壙（2） …… 24
第17図　集石土壙 …… 27
第18図　溝跡 …… 28
第19図　ピット跡（1） …… 29
第20図　ピット跡（2） …… 30
第21図　ピット跡（3） …… 31
第22図　ピット跡（4） …… 32
第23図　ピット跡（5） …… 33
第24図　ピット跡出土遺物 …… 34
第25図　グリッド出土土器（1） …… 37
第26図　グリッド出土土器（2） …… 38
第27図　グリッド出土土器（3） …… 39
第28図　グリッド出土土器（4） …… 40
第29図　グリッド出土石器（1） …… 44
第30図　グリッド出土石器（2） …… 45
第31図　グリッド出土石器（3） …… 46
第32図　グリッド出土石器（4） …… 47
第33図　グリッド出土石器（5） …… 48
第34図　中期中葉土器群の文様構造 …… 52
第35図　晩期の住居形態（1） …… 55
第36図　晩期の住居形態（2） …… 56

表 目 次

第１表　第１号住居跡計測表 …… 20
第２表　第２号住居跡計測表 …… 20
第３表　土壙計測表 …… 25
第４表　集石土壙計測表 …… 33
第５表　溝跡計測表 …… 33
第６表　グリッドピット計測表 …… 35・36
第７表　第１号住居跡出土石器観察表 …… 50
第８表　第２号住居跡出土石器観察表 …… 50
第９表　土壙出土石器観察表 …… 50
第10表　ピット跡出土石器観察表 …… 50
第11表　グリッド出土石器観察表 …… 50

写真図版目次

図版１　遺跡遠景　対岸から上流方向を望む
　　遺跡遠景　対岸から下流方向を望む
図版２　調査区全景
　　住居跡遠景
図版３　第１号住居跡
　　第１号住居跡炉跡　石器出土状況
　　遺物出土状況　Ｐ９遺物出土状況
図版４　第２号住居跡
　　第２号住居跡炉跡　注口土器出土状況
　　完形土器出土状況　Ｐ２遺物出土状況
図版５　集石土壙群
　　第１号集石土壙
図版６　第２号集石土壙
　　第３号集石土壙
図版７　第１号土壙遺物出土状況
　　Ｆ－５区Ｐ３遺物出土状況
図版８　第７図11　第10図１　第10図２
　　第10図４　第10図５　第10図３
図版９　第14図２　第14図１　第14図８
　　第25図２　第25図１　第25図３
図版10　第１号住居跡出土土器
　　第１号住居跡出土石器
図版11　第２号住居跡出土土器
　　第２号住居跡出土石器（1）
図版12　第２号住居跡出土石器（2）
　　第２号住居跡出土石器（3）
図版13　第１号土壙出土遺物
　　第22号土壙出土遺物
図版14　グリッド出土土器（1）
　　グリッド出土土器（2）
図版15　グリッド出土土器（3）
　　グリッド出土石器（1）
図版16　グリッド出土石器（2）
　　グリッド出土石器（3）

Ⅰ　発掘調査の概要

１．調査に至る経過

埼玉県教育委員会では、民間開発事業により保存に影響が及ぶ埋蔵文化財を適切に保護するため、市町村教育委員会に対し、専門職員の配置や発掘調査体制の整備などを積極的に指導してきた。

しかしながら、大規模又は突発的な開発事業に係り緊急に埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の実施が必要となり、地元市町村教育委員会がこれに即応することが困難な場合については、当該市町村教育委員会からの要請に基づき、県教育委員会として支援を行ってきたところである。

平成16年７月21日、医療法人社団医新会理事長から長瀞町教育委員会教育長あて、長瀞町大字岩田582番他における診療所併設型介護老人保健施設建設に伴う埋蔵文化財の試掘調査依頼書が提出された。

町教委員会では、照会地が中野遺跡の範囲内に位置するため、平成16年９月７日に試掘確認調査を実施し、縄文時代の遺物（土器片、石器等）を検出したため、平成16年９月17日付け長教社第341号で、埋蔵文化財が所在すること、建設工事に先立って記録保存のための発掘調査の実施が必要であることを医療法人社団医新会理事長あて通知した。

町教育委員会と医療法人社団医新会は当該発掘調査の実施についての協議を開始したが、当該事業スケジュールは緊迫しており、町教育委員会としてこれに応えることは困難な見通しであった。

平成17年２月、町教育委員会から発掘調査への支援に関する打診があったため、県教育委員会は、発掘調査の期間及び経費の積算資料を得るための再度の試掘確認調査の実施を指導した。再度の試掘確認調査は、平成17年３月８日に実施され、縄文時代の石囲炉等の所在が確認された。

平成17年５月16日付け長教社第12号で、町教育委員会教育長から県教育委員会教育長あて「中野遺跡の発掘調査への支援について（依頼）」が提出された。町教育委員会所属の専門職員は一名のみであり、他の事務も兼務しているため、当該発掘調査への即応体制を組むことは困難ということであった。

県教育委員会は要請を受け、医療法人社団医新会及び町教育委員会と協議の結果、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施することになった。また、現場の発掘作業は平成17年６月20日から８月31日に実施し、遺物等整理作業及び発掘調査報告書作成作業は平成18年３月31日までに完了することになった。これにより、平成17年５月31日付けで、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長を加えた４者による「医療法人社団医新会診療所併設型介護老人保健施設建設予定地に係る埋蔵文化財の取扱いに関する協定」が締結された。

文化財保護法第93条第１項の規定による発掘届は、平成17年６月１日付けで医療法人社団医新会理事長から提出され、これに対する指示通知は平成17年６月14日付け教生文第３－133号で行った。

文化財保護法第92条第１項の規定による発掘調査届は、平成17年６月10日付け財埋文第123号で財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、これに対する指示通知は平成17年６月24日付け教生文第２－27号で行った。

（埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課）

2．発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

中野遺跡の発掘調査は、平成17年６月27日から平成17年８月31日まで実施した。面積は1,600㎡である。

調査に先立つ６月下旬から重機による表土除去作業を行うとともに、並行して調査事務所等の設営を行った。

７月上旬から調査を開始し、補助員による遺構確認作業に着手し、順次、遺構の精査を実施した。遺構確認と精査の結果、縄文時代の竪穴住居跡２軒、集石土壙３基、土壙１基のほか、時期不詳の溝やピットが多数検出された。

遺構精査の後、遺物出土状況や遺構の写真撮影及び図面作成を行い、遺跡の記録保存に万全を期した。８月中旬には主な遺構の調査を終え、調査区の全景写真を撮影し、その後、炉跡の断ち割りなどを行い、８月下旬には現地調査を完了した。

その後、安全確保のため重機による調査区の埋め戻しを行い、発掘機材の撤収及び事務所等を撤去して、すべての作業を終了した。

（2）整理・報告書作成作業

中野遺跡の整理事業は、平成17年10月３日から平成17年11月30日まで行った。

10月３日から、出土遺物の水洗・注記、接合・復元作業および写真や図面整理を開始した。遺構図は図面整理を経て第二原図を作成し、スキャナーで取り込み、コンピューターによるデジタルトレースおよび土層の注記を挿入する等、編集作業を進めた。

遺物は、遺構及びグリッド出土土器の接合・復元・採択を行い、遺構図の作成と同様な作業を経て、版組みを行った。石器は10月中旬から実測に着手し、11月上旬に実測をほぼ終え、トレースを行い、さらにスキャニングを行って版組みを行った。

続いて遺物写真の撮影を行い、図面・写真・本文の割付作業を行い、合わせて原稿執筆を進め、編集作業に着手した。

11月下旬に大部分の作業を完了させて、印刷業者を選定し、入稿した後に、三回の校正作業を経て、平成18年２月に報告書を刊行した。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（平成17年度）

理事長　福田陽充
副理事長　飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長　保永清光

（管理部）
副部長　村田健二
主席　高橋義和
主席　宮井英一
主任　福田昭美
主任　菊池久
主事　海老名健
主事　岩上浩子

（調査部）
調査部長　今泉泰之
調査部副部長　坂野和信
主席調査員　劔持和夫
（調査第二担当）
統括調査員　中村倉司
調査員　村端和樹
主席調査員　金子直行
（資料整理第二担当）
統括調査員　大谷徹

Ⅱ　遺跡の立地と環境

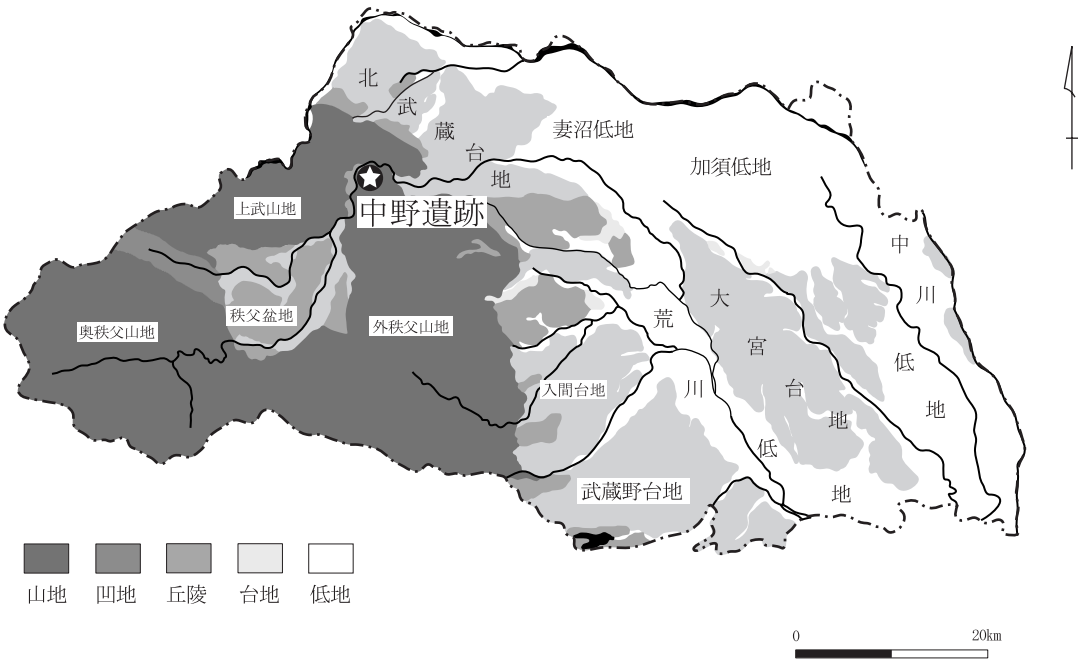
埼玉県秩父郡長瀞町は県の北西部に当たり、北は児玉郡児玉町及び美里町、南は皆野町、東は大里郡寄居町と接し、秩父盆地への北の入り口部に位置している。町のほぼ中央部を荒川が北流し、両岸に形成された河岸段丘上には、多くの遺跡が残されている。

また、河床や河岸に露頭する結晶片岩は、清流や周囲の風景と相まって風光明媚な景勝地を演出している。国の名勝及び天然記念物に指定され、全国に長瀞の名を轟かす「長瀞の石畳」も、結晶片岩が織り成す景勝の一コマである。中野遺跡が存在する長瀞町岩田地区は、遺跡の北を流れる荒川岸に奇岩の露頭が見られ、狭隘なミニゴルジュ帯を形成しており、景勝地の一つを構成している。

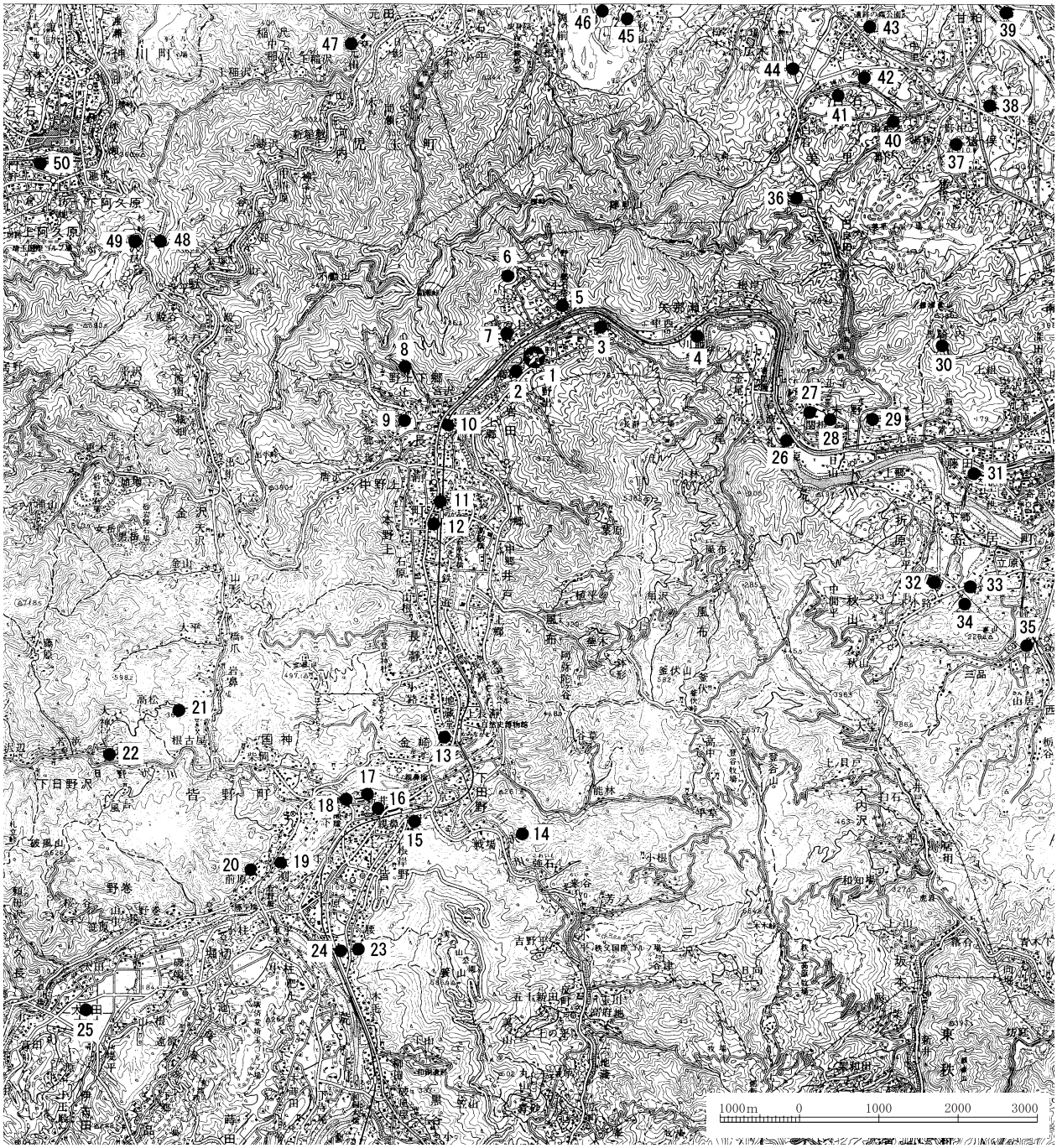
この秩父盆地を刻み込む荒川は、甲武信岳・雲取山に端を発し、急峻な谷地形を形成しながら東流し、秩父盆地で流路を北に採る。その後、秩父盆地の出口付近の皆野地区でクランク状に屈曲し、長瀞地区を北上、野上下郷付近で東へと流路を変更し、「はぐれ」てしまうと言うほどの狭隘な波久礼地区を貫け出で、寄居地区で扇状地を形成しつつ、台地部へと流下して行く。その間、大きく三段の河岸段丘を形成し、そこに流れ込む小河川が段丘上に扇状地を作出する等、盆地地形を中心とした変化に富む複雑な自然地形を形成している。

埼玉県の地形は大きく見れば西側の山地部が高く、東側の台地や低地部が低い傾向にある。河川は旧利根川である旧荒川が山地部外縁を南北に貫流し、それらに向けて外秩父山系から東方向へ流れ出す河川が合流し、さらに南流する傾向にある。これ等の小河川の中で北東方向へと流れ出すものもあるが、現荒川は秩父盆地へ流れ込む小河川を糾合し、県内でも珍しく北流する流程を持っている。

中野遺跡は、丁度この北流する荒川が東へと方向を変え始める部分の右岸で、標高128ｍ前後を測る河岸段丘上に位置し、背後には山が迫っている。



第１図　埼玉県の地形図



長瀞町　1. 中野遺跡　2. 大滝遺跡　3. 尭田遺跡　4. 川面遺跡　5. 野上下郷石塔婆　6. 青石石材採掘遺跡　7. 寛保洪水水位磨崖標　8. 大日陰遺跡　9. 辻遺跡　10. 宮沢遺跡　11. 野上駅前遺跡　12. 六道遺跡　皆野町　13. 金崎古墳群　14. 妙音寺遺跡　15. 上富沢遺跡　16. 小池遺跡　17. 大背戸遺跡　18. 駒形遺跡　19. 一貫目遺跡　20. オリョウガイド遺跡　21. 勝負沢岩陰　22. 三角穴半洞窟　23. 小池氏館跡　24. 大塚古墳　秩父市　25. 太田条里遺跡　寄居町　26. 末野原遺跡　27. 城見上遺跡　28. 末野遺跡　29. 花園城跡　30. 馬騎の内廃寺　31. 寄居廃寺　32. 南大塚遺跡　33. 増善寺遺跡　34. 東国寺東遺跡　35. 平倉遺跡　美里町　36. 栗山遺跡　37. 鍛冶屋峯遺跡　38. 普門寺西山遺跡　39. 甘粕山遺跡群　40. 峰遺跡　41. 白石城遺跡　42羽黒山古墳群　43. 駒衣廃寺　44. 白石古墳群　児玉町　45. 南飯盛遺跡　46. 秋山中山遺跡　47. 塔ノ入遺跡　48. 橋ノ入遺跡　神泉村　49. 杉ノ嶺遺跡　50. 下阿久原平遺跡

第２図　周辺の遺跡

遺跡周辺の荒川左岸には国道140号線と秩父鉄道が、右岸には県道長瀞玉淀自然公園線がそれぞれ河岸に沿って走っている。遺跡周辺の河岸段丘面はやや幅が広く、中央部に県道が走り、遺跡はこの県道より荒川寄りの河岸段丘を少し下った緩斜面上に立地する。

中野遺跡（1）の所在する岩田地区は、長瀞町北東部の荒川右岸にあり、その地名が水田にある大きな岩に由来し、平安時代の勅旨牧である岩田牧が置かれていたと考えられている地区で、他に平安時代に遡る白鳥神社や薬師堂、道光寺、満光寺などの歴史的な神社仏閣が存在する地域である。また、対岸の陣見山と不動山の谷間に形成された諸沢の扇状地上の野上下郷地区には、日本一の大きさを誇る国指定の青石塔婆（5）が存在するなど、この周辺は埋蔵されている遺跡を含め、歴史的遺産が多く残されている地域でもある。

遺跡の周辺の河岸段丘上には、段丘面に沿って縄文時代や平安時代の遺物包蔵地や遺跡が、点々と所在する。中野遺跡の南端の一角には古墳時代後期の墳丘と思われる低い高まりが存在し、本遺跡を含め周辺部では縄文時代中期から後期の遺跡が集中している。その一つである大滝遺跡（2）は本遺跡の南西側に隣接し、平成12年に発掘調査が行われており、縄文時代後期の弧状列石遺構や晩期の土壙が検出され、中期から晩期にかけての遺物が出土している。特に、多数の結晶片岩製石棒・石剣の未製品の出土は、本遺跡ともからみ、製作址としての性格を想起させるものである。

やや視界を広げて、秩父北東部地域における縄文時代の遺跡を概観すると、周囲を取り囲む山々の峠道沿いには皆野町三角穴半洞窟（22）、勝負沢岩陰（21）、妙音寺遺跡（14）、長瀞町大日陰遺跡（8）などが所在し、洞穴遺跡を中心とする草創期から早期にかけての遺跡が点在する。これ等の遺跡はその後も使用されることが多く、この地方の沢伝いの峠道が秩父地方を抜け荒川伝いに台地部へと繋がる交通の要衝であったことを物語っている。

前期では早期末から前期初頭の良好な土器群を出土し、花積下層式期の住居跡を検出した荒川村（旧）下段遺跡が著名であるが、長瀞町宮沢遺跡（10）でも類例の少なかった花積下層式土器が出土している。さらに、皆野町大背戸遺跡（17）や駒形遺跡（18）では黒浜式土器が出土しており、寄居町南大塚遺跡（32）では関山Ⅱ式から黒浜式にかけての大集落が調査され、有尾式の良好な土器群が出土している。前期後半では児玉・美里地方に遺跡が増え、羽黒山古墳群（42）、白石城遺跡（41）、普門寺西山遺跡（38）等で諸磯ａ・ｂ式土器が出土している。前期終末は遺跡の少ない時期であるが、吉田町のわらび沢洞窟が著名で、十三菩提式期の良好な土器が出土している。早期の洞穴遺跡群が、特にこの時期に再利用されている点が特徴的であり、人々の動きに共通性が見出せよう。

中期は河岸段丘でバックグランドが狭いという地形的な制約があるためであろうか、大きな集落遺跡は少ない。荒川の屈曲部分に形成された比較的面積の広い河岸段丘上では、中期の環状集落が形成されていたようであり、長瀞町宮沢遺跡（10）もその一つである。中期中葉から後葉にかけての遺跡で、住居跡や集石土壙が検出されるなど、中野遺跡と共通する部分が多い。中期の後半期では、徐々に小さな遺跡が増え、長瀞町野上駅前遺跡（11）や六道遺跡（12）、川面遺跡（4）、寄居町増善寺遺跡（33）等が存在する。

後・晩期では、また遺跡数が減少するが、皆野町大背戸遺跡（17）、駒形遺跡（18）で中期後葉からから後期中葉の中敷石住居跡や配石土壙などが検出され、県内に類例の少ない資料を提供している。晩期では、さらに遺跡が減少するが、小鹿野町合角ダム関連遺跡群の調査で、中野遺跡と同様な晩期の住居跡が検出され、注目されている。中野遺跡例も貴重な追加資料を提供しており、秩父地方における該期研究のさらなる進展が望まれるところである。

Ⅲ　遺跡の概要

中野遺跡は、秩父郡長瀞町大字岩田582番地他に所在する。遺跡は秩父鉄道樋口駅の南約400ｍにあたり、標高182ｍ前後を測る駅から対岸の荒川右岸の河岸段丘上に位置する。

遺跡周辺は荒川が北東方向へ流れ、荒川によって形成された幅300ｍ前後を測る河岸段丘が、右岸にそって存在する。この河岸段丘面のやや山側寄りに長瀞玉淀自然公園線が走り、遺跡は県道より北側で、段丘面のほぼ中央部に位置している。この段丘面は荒川方向に緩く傾斜しており、遺跡内で3ｍ前後、調査区内でも1ｍ前後の傾斜を持ち、荒川の河床からは約25ｍの比高差を測る。発掘調査は建物の敷地部分について行われたが、建物が段丘面に並行して建設されることから、調査区内での比高差は比較的少なかった。

調査は7月から8月にかけて行われたが、礫層面を伝う湧水が多く、調査区の一番低い場所では常に水が溜まっている状態であった。

遺跡内の基本層序は、Ⅰ層が耕作土、Ⅱ層が床土、Ⅲ層が黒褐色土、Ⅳ層が黒色土、Ⅴ層が黄褐色土で、Ⅴ層は下層に向かって砂質となり、礫層へと移行する。Ⅳ層が縄文時代中期以降の、Ⅴ層が縄文時代早期末から前期初頭の遺物を混入する。遺跡内は段状に畑が整地されており、調査区より南側の高い部分では後期を中心とした遺物包含層が薄く残存していたが、調査区内は遺物包含層一部が殆ど削平されていた。

検出された遺構は、縄文時代晩期の住居跡2軒、中期の集石土壙3基、縄文時代の土壙2基、時期不詳の土壙20基、溝2本、ピット多数であった。

住居跡は調査区南側の際で2軒が検出されたが、辛うじて遺構確認時にそのプランが確認された。しかし、実際にはほぼ床面に近い状態で検出されており、明確なプランは確認されなかった。さらに、ピットの覆土と地山との区別が難しく、柱穴等も不揃いであった。住居跡にはそれぞれ壁際に同時期の土壙状のピットが存在し、当初住居内土壙として調査が進められたが、柱穴の可能性があるため、いわゆる住居跡のピットとして処理した。これ等が土壙である可能性も十分あり、その可能性を否定するものでもない。

住居跡の付属施設として、石組炉が存在する。2軒とも同様な形態の炉で、拳大の縦長の礫を炉の縁に円形に並べるものである。2軒の住居跡は楕円形のプランで、中央部に円形の石組炉を持ち、4ｍ程離れていることから、ほぼ同時存在していた可能性が高い。また、Ｅ－4区では多数のピットが検出され、一定のまとまりを把握できなかったが、後期の加曽利Ｂ式土器が出土していることから、この時期の住居跡が存在していた可能性がある。また、調査区東側部分でピットの集中する地区があるが、その配列に規則性は無く、遺物も出土していない点で住居跡の存在を推定することは難しいと思われる。

土壙で時期が明確なものは、縄文時代早期の条痕文期が1基と、中期の勝坂式期が1基である。早期の土壙は、早期終末と思われる条痕文土器と石器が出土している。遺跡全体からは前期初頭の花積下層式土器も出土しているが、土壙内からは縄文を施文する破片が1点も存在せず、早期終末と把握された。中期の土壙はほぼ完形土器が正位の状態で出土し、住居の炉体土器かと思われたが、さらに周囲から完形土器を含む遺物が出土したため、土壙と判断された。土壙からは土面の破片も出土しているが、鼻、目などの形状の類例が中期に無く、後・晩期のものに近いことから、後・晩期のものが中期の土壙とともに調査されたものと判断された。

他の遺物として、緑泥片岩製の石棒・石剣の未製品が多く出土しており、隣接する大滝遺跡と関連した石棒・石剣の製作址の可能性があるものと考えられる。

第３図　遺跡周辺の地形図

A
B
C
D
1
2
3
4
5
6
X=-63850.00
X=-63840.00
X=-63830.00
Y=+14620.00
Y=+14610.00
Y=+14600.00
Y=+14590.00
Y=+14580.00
SK20
SK21
SK19
SC1
SJ1
SJ2
0
10m
1:250

第 4 図　調査区全体図

E
F
G
H
1
2
3
4
5
6
X=63810.00
X=63800.00
X=63790.00
SD1
SD2
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
SK22
SC2
SC3

Ⅳ　発見された遺構と遺物

1　住居跡

検出された住居跡は2軒であったが、ピットの配置から住居跡と推定されるものがあり、実際の住居跡軒数はさらに増えるものと思われる。しかし、ここでは確実な住居跡のみを取り扱った。

第1号住居跡（第５図～第７図）

Ｃ～Ｄ－4～5区に位置するが、大半がＤ－4～5区に位置する。住居跡の床面直上程で検出された住居跡で、調査区南西部の南側壁に接して検出された。試掘段階で、住居跡の石組炉が検出されていたものである。

住居跡はほぼ円形に近い南北にやや細長い楕円形を呈し、長径3.85ｍ、短径3.54ｍ、深さ0.11ｍを測る。主軸は北より若干北西方向に傾く。住居跡の覆土は地山よりやや黒味を帯びた黒褐色土であり、粘土質で、砂粒も多く含むものである。調査開始前は時期的に方形のプランを想定していいたが、覆土の範囲から楕円形と認定された。

炉は石組炉で、長軸上のほぼ中央部に設置され、長軸方向に細長い楕円形を呈し、長径0.64ｍ、短径0.55ｍを測る。炉は拳大の細長い自然礫を、立てながら密に並べて楕円形に縁取っているものである。使用されていた礫は、21個であり、石器等の転用は見られなかった。炉を中心として、約1.5ｍの範囲の床面に、やや硬化面が確認された。

壁溝は検出されなかった。柱穴は住居跡のプランに沿って壁柱穴が廻るものと思われるが、東壁周辺では確認できなかった。住居跡の南壁付近には、規模の大きなピットが3基検出され、当初住居跡と重複する土壙として調査を進めたが、柱穴の可能性も残るため、住居内ピットとして処理した。従って、住居に主柱穴を確定するには至らなかった。

Ｐ1～Ｐ6は比較的小さなピットで、深さがＰ1＝0.3ｍ、Ｐ2＝0.13ｍ、Ｐ3＝0.12ｍ、Ｐ4＝0.07ｍ、Ｐ5＝0.15ｍ、Ｐ6＝0.21ｍを測る。Ｐ7はＰ8と重複し、さらに別のピットと重複する可能性もあるが、長径1.04ｍ、短径0.75ｍ、深さ0.64ｍを測り、土壙状を呈する。Ｐ8は長径0.53ｍ、短径0.46ｍ、深さ0.16ｍを測る。

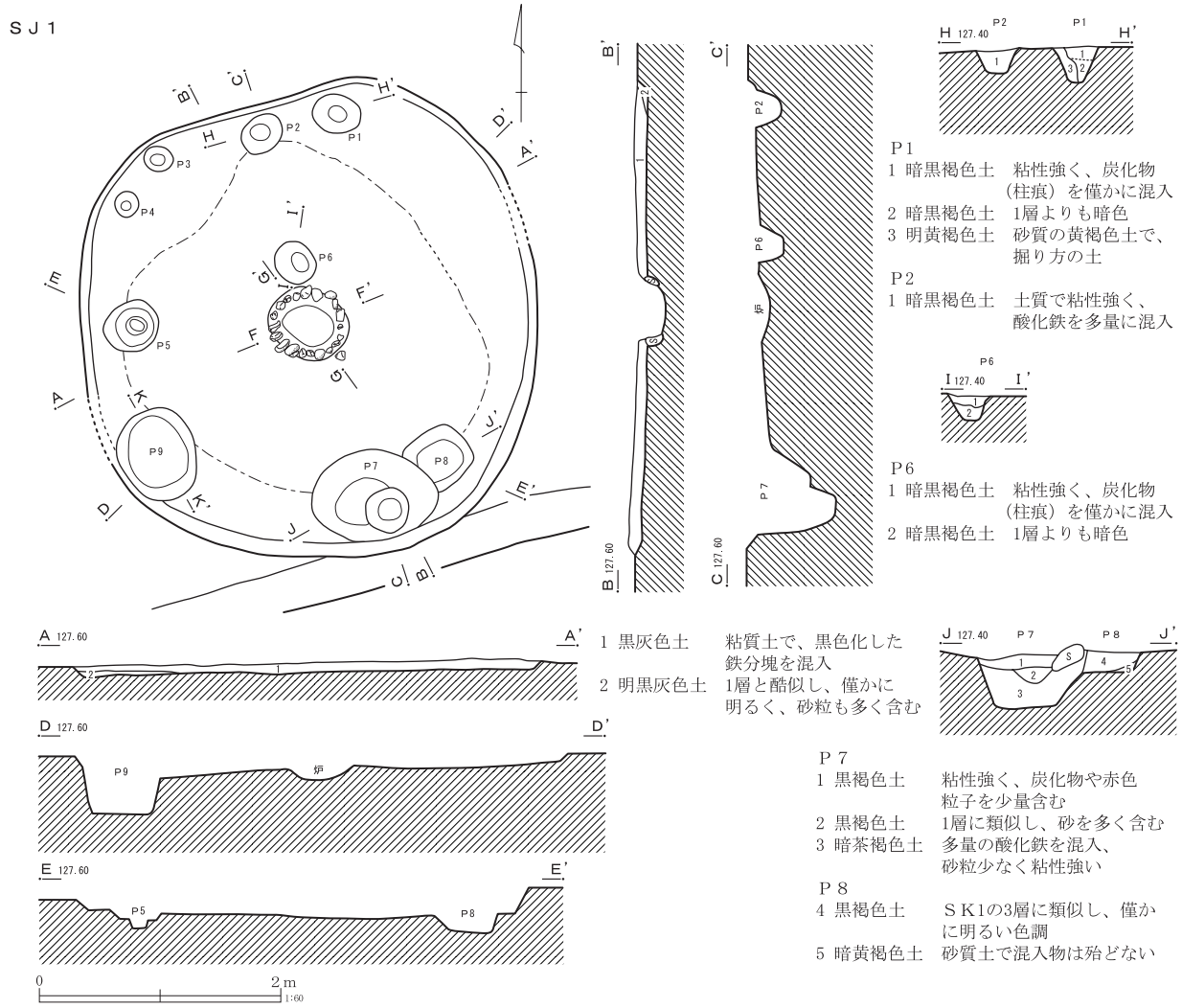
Ｐ9は0.76ｍ、短径0.63ｍ、深さ0.36ｍを測る。覆土の下層から底部付近にかけて、緑泥片岩の板石に覆われるように漆製木製品と石器が出土している。漆製木製品は３点確認されたが、漆膜のみ現存していたため、取り上げることが不可能であった。本ピットは住居跡の柱穴であるのか、付属ピット、または重複する土壙であるのか確定できなかった

さらに、Ｐ1及びＰ5の開口部からも、緑泥片岩の板石が蓋状に検出されている。これ等のピットが住居の柱穴ではなく別の遺構である可能性もあるが、住居の柱穴であるとした場合、住居廃棄後の祭祀的な行為の結果と認識することも可能であり、興味深い現象である。

第７図1～11は覆土の床面近くから出土した土器群で、５のみＰ7から出土している。

1～5 は後期前葉から中葉の堀之内Ⅱ式～加曽利Ｂ式に比定される土器群で、住居跡の覆土に流れ込んだものと思われる。1 は口縁の開く深鉢形土器の口縁部破片で、口縁内面に1条の沈線を廻らせ、口縁部に刻みを施す隆帯を１条めぐらす。胴部は磨消縄文でモチーフを描くもので、単純な構成を採るものと思われる。2 は器面の風化が著しく不明瞭であるが、押圧を施す低隆帯と横位の沈線を施文している。3 は表に３本、内面に１本の沈線を施文する深鉢である。4、5 は横位の細い隆起線と横位沈線を施文する深鉢である。1、4、5は堀之内Ⅱ式、2、3は加曽利Ｂ式に比定されよう。

6 は若干する丸頭状に肥厚する口縁部が立つ器形の深鉢で、口縁部に三叉文を施文する。地文には細かな単節ＬＲ縄文を施文する。7は角頭状の口縁部



Ｐ1
1 暗黒褐色土　粘性強く、炭化物（柱痕）を僅かに混入
2 暗黒褐色土　1層よりも暗色
3 明黄褐色土　砂質の黄褐色土で、掘り方の土

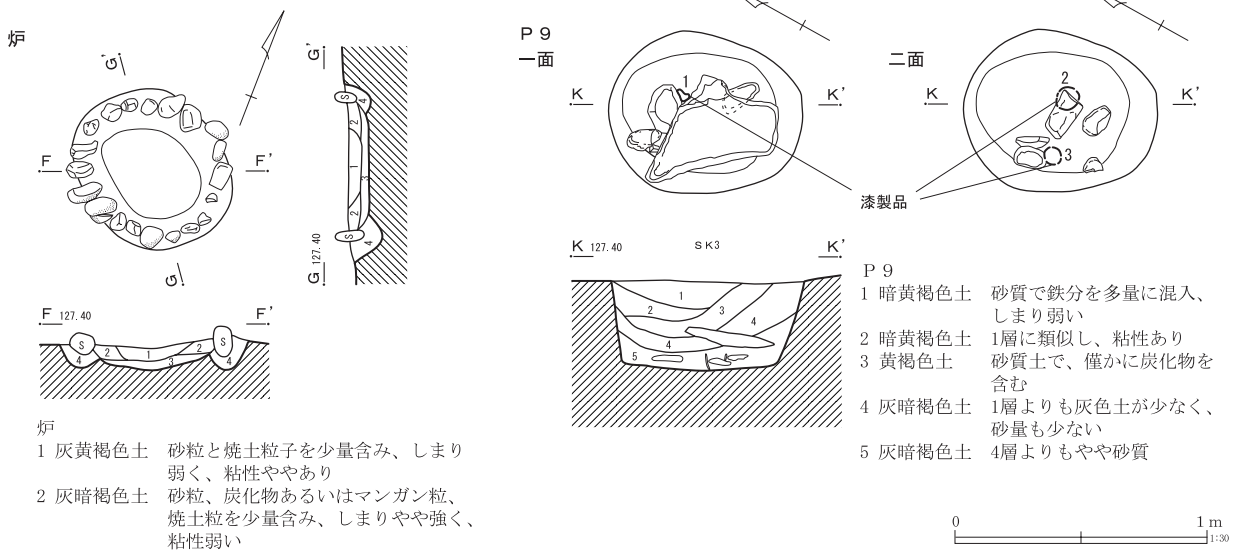
Ｐ2
1 暗黒褐色土　土質で粘性強く、酸化鉄を多量に混入

Ｐ6
1 暗黒褐色土　粘性強く、炭化物（柱痕）を僅かに混入
2 暗黒褐色土　1層よりも暗色

1 黒灰色土　粘質土で、黒色化した鉄分塊を混入
2 明黒灰色土　1層と酷似し、僅かに明るく、砂粒も多く含む

Ｐ７
1 黒褐色土　粘性強く、炭化物や赤色粒子を少量含む
2 黒褐色土　1層に類似し、砂を多く含む
3 暗茶褐色土　多量の酸化鉄を混入、砂粒少なく粘性強い

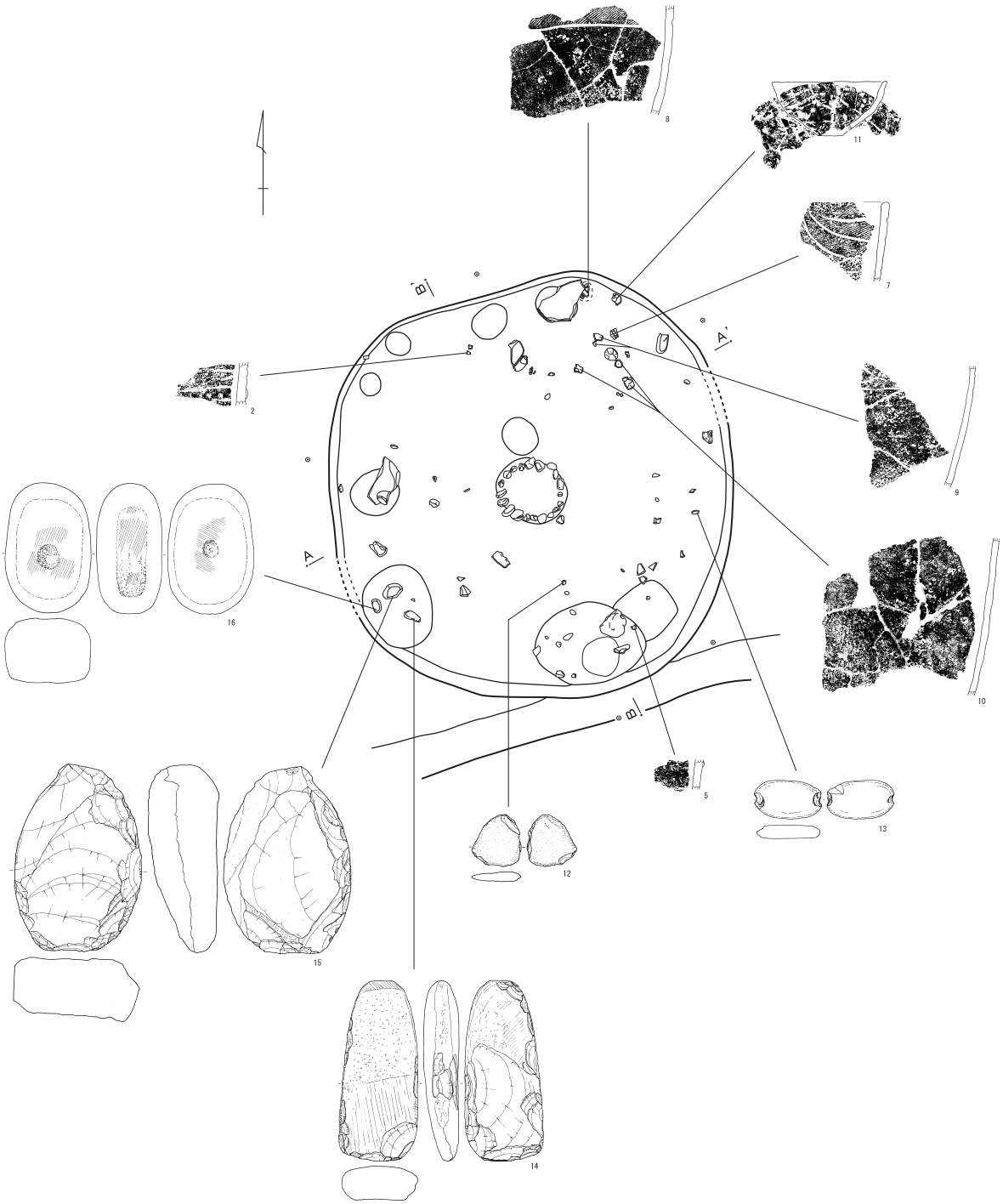
Ｐ８
4 黒褐色土　ＳＫ1の3層に類似し、僅かに明るい色調
5 暗黄褐色土　砂質土で混入物は殆どない



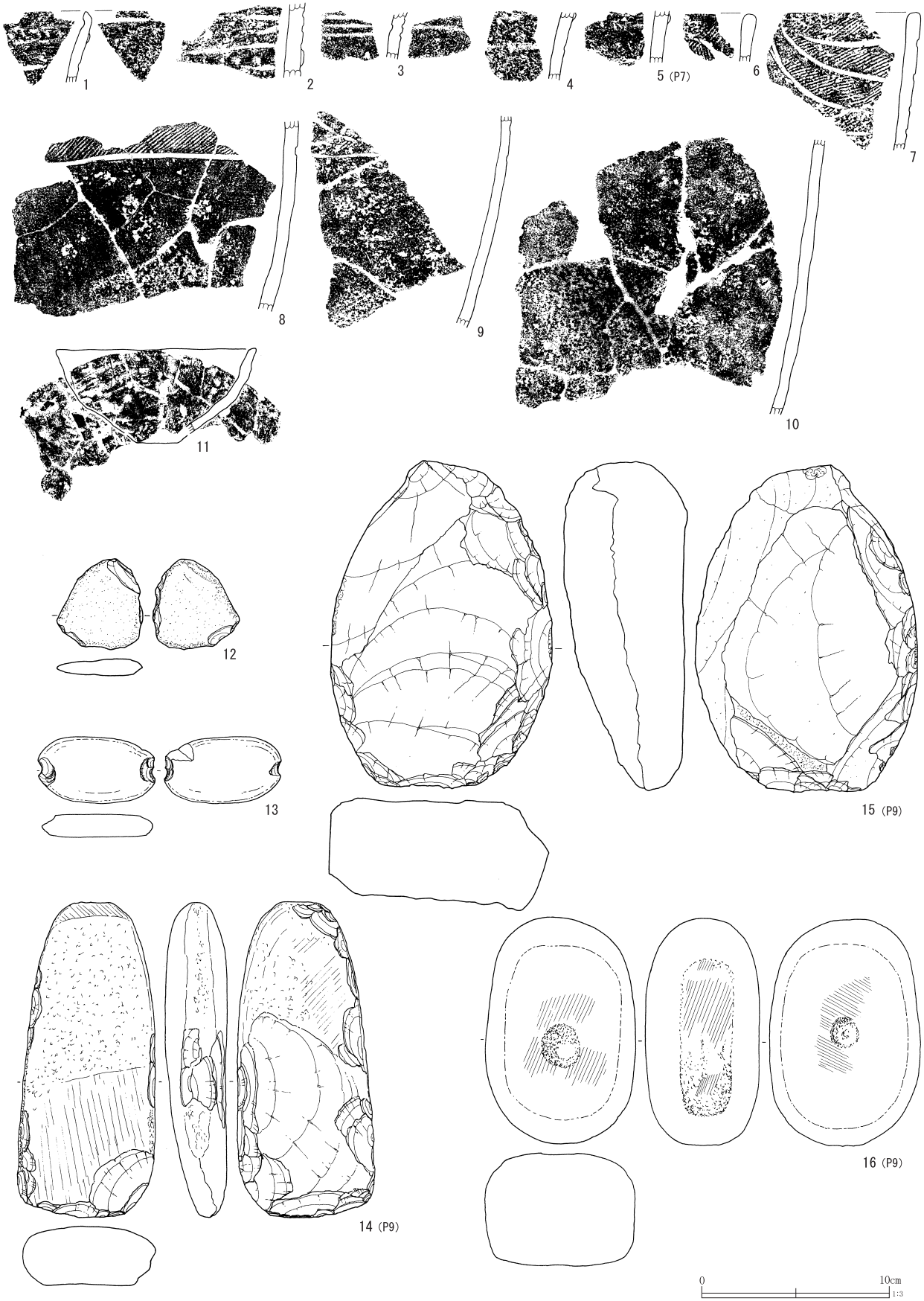
炉
1 灰黄褐色土　砂粒と焼土粒子を少量含み、しまり弱く、粘性ややあり
2 灰暗褐色土　砂粒、炭化物あるいはマンガン粒、焼土粒を少量含み、しまりやや強く、粘性弱い
3 暗赤褐色土　焼土主体、しまり強く、粘性なし
4 暗褐色土　やや粘質で、マンガン、酸化鉄を少量含む

Ｐ９
1 暗黄褐色土　砂質で鉄分を多量に混入、しまり弱い
2 暗黄褐色土　1層に類似し、粘性あり
3 黄褐色土　砂質土で、僅かに炭化物を含む
4 灰暗褐色土　1層よりも灰色土が少なく、砂量も少ない
5 灰暗褐色土　4層よりもやや砂質

第５図　第1号住居跡



第６図　第1号住居跡遺物分布図



第７図　第1号住居跡出土遺物

が若干内湾しながら開く器形で、地文に細かな単節ＬＲ縄文を施文し、弧状沈線を施文する。弧状沈線は三叉文を構成するものと思われる。8～10は胴部破片で、文様帯下端を沈線区画し、細縄文単節ＬＲを施文するものである。11は小型の無文浅鉢で、口縁が不規則に波打ち、器面整形が粗い等、粗製の浅鉢である。口径11.8㎝、現存高4.6㎝を測る。

以上は住居跡に伴う土器群で、晩期の安行Ⅲａ～Ⅲｂ式にかけての時期に比定される。

石器は12、13が住居跡覆土から、14～16がＰ9から出土している。12は掻器で、刃部に片側からの調整剥離を施す。長さ4.8㎝、幅4.55㎝、厚さ0.9㎝、重さ30.4ｇを測る。13は石錘で、横長扁平な自然礫を使用し、長軸上に剥離によるスリットを施す。長さ6.15㎝、幅3.55㎝、厚さ1.1㎝、重さ39ｇを測る。

14～16はいずれも緑泥片岩の板石の下部から出土している。14は磨製石斧で刃部を再生しているものか、未製品である。長さ16.7㎝、幅7.35㎝、厚さ3.3㎝、重さ694.8ｇを測る。15は磨製石斧の未製品と思われ、まだ粗割り段階のもので、礫表を剥ぎ取りながら成形を行っているものである。長さ17.5㎝、幅11.8㎝、厚さ6.55㎝、重さ1186.9ｇを測る。16は両面に窪み穴を持つ完形の磨石で、長さ12㎝、幅8㎝、厚さ6.05㎝、重さ955.5ｇを測る。

第2号住居跡（第８図～第12図）

Ｄ－4区に位置する。床面直上程で検出された住居跡で、住居跡西側半分の壁が削平されている。第1号住居跡の北東約4ｍに位置し、形状、規模、主軸方向も類似している。

住居跡は円形に近い南北にやや細長い楕円形を呈するものと思われ、長径4.33ｍ、推定短径4.2ｍ、深さ0.13ｍを測る。主軸は北より若干北西方向に傾く。住居跡の覆土は第1号住居跡よりやや黄色を帯びた暗茶褐色土であり、粘土質で、炭化物を少量含むものである。

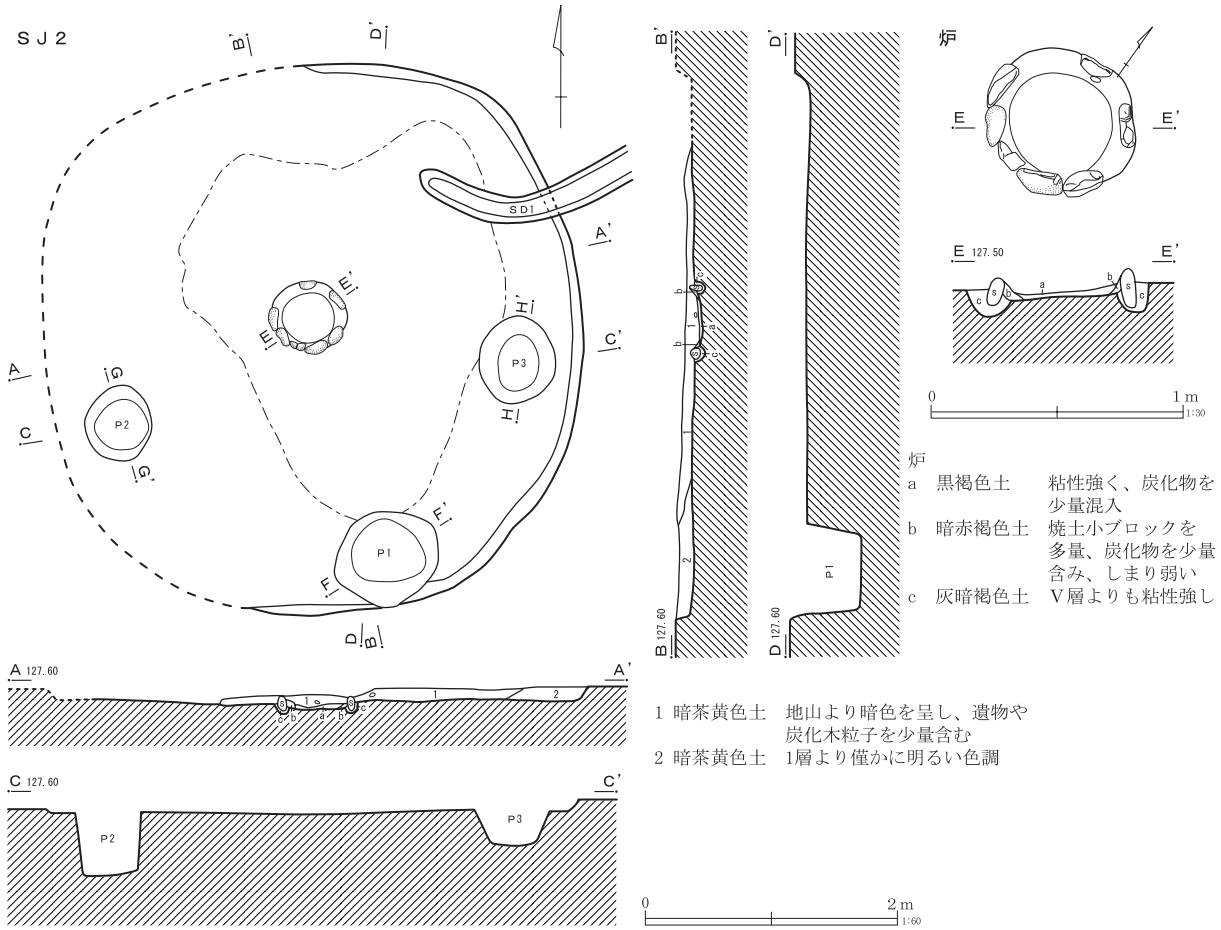
炉は石組炉で、長軸上のほぼ中央部に設置され、ほぼ円形を呈し、長径0.6ｍ、短径0.55ｍを測る。炉は拳大より大きな長楕円礫を、立てながら円形に並べるものであるが、部分的に欠落している。現存する礫は7個であり、石器等の転用は認められなかった。炉を中心として、約2ｍの範囲で硬化面が確認された。

壁溝は、第1号住居跡同様に検出されなかった。ピットが3基、住居跡のプラン南側半分に沿って存在するが、北側半分では確認できなかった。これ等3基のピットは規模が大きく、当初土壙と思われたが、Ｐ1に柱痕が確認されたことから、住居跡の柱穴と認定された。しかし、精査をしたが北壁際に存在するはずの4番目のピットを検出することができなかった。

Ｐ1は長径0.87ｍ、短径0.75ｍ、深さ0.45ｍを測る。下層部に比較的遺物が多く出土し、柱痕が観察された。Ｐ2は長径0.58ｍ、短径0.53ｍ、深さ0.49ｍを測り、Ｐ1同様下層から遺物が出土している。Ｐ3は長径0.69ｍ、短径0.6ｍ、深さ0.26ｍを測る。

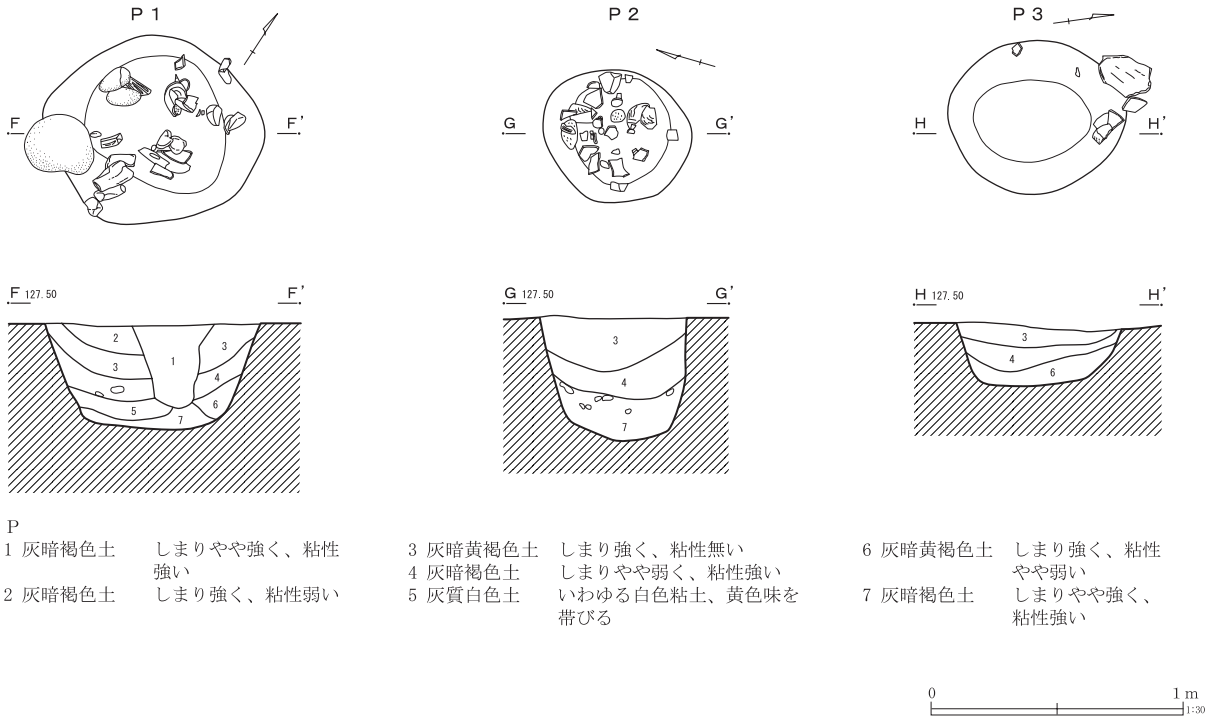
遺物の出土状況を第9図に示したが、大きく住居跡の床面出土と、ピット出土に分かれる。Ｐ1からは3、8、12、14、17、19、20、26～28、35、38、41～44、46が、Ｐ2からは1、7、10、15、18、21～23、25、29、33、36、37、が出土しており、他は床面付近の出土である。

１は口縁部の四分の一程が残る、頸部の括れる鉢状の深鉢である。口縁部と胴部に文様帯を持ち、頸部は1本の沈線で区画する。口縁部文様帯は四単位の双頭小波状突起を中心に、左右対称の沈線三叉文を施文するものと思われる。小突起下は沈線の二重対弧文で玉抱きの円形モチーフ部分を描き、連結する左右対称形の入組状三叉文の足で玉を抱く構成を採る。胴部文様帯は口縁部と同様な玉抱き三叉文と連結する入組状三叉文を、対称的ではなく、連続手系に繰り返すモチーフ構成を採るものと思われる。その際、モチーフの一部には変形を来たしているも



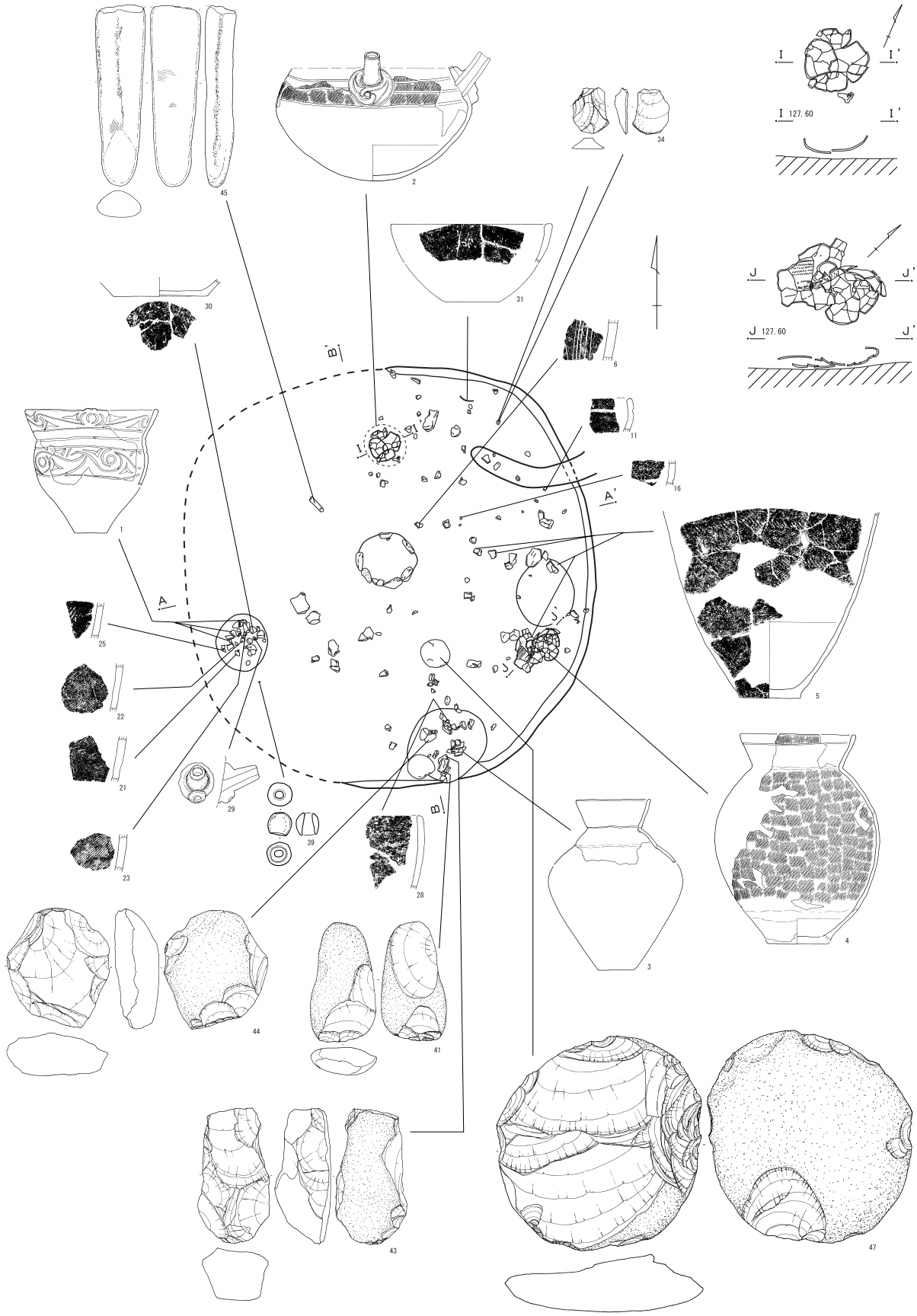
炉
a 黒褐色土 粘性強く、炭化物を少量混入
b 暗赤褐色土 焼土小ブロックを多量、炭化物を少量含み、しまり弱い
c 灰暗褐色土 Ⅴ層よりも粘性強し

1 暗茶黄色土 地山より暗色を呈し、遺物や炭化木粒子を少量含む
2 暗茶黄色土 1層より僅かに明るい色調

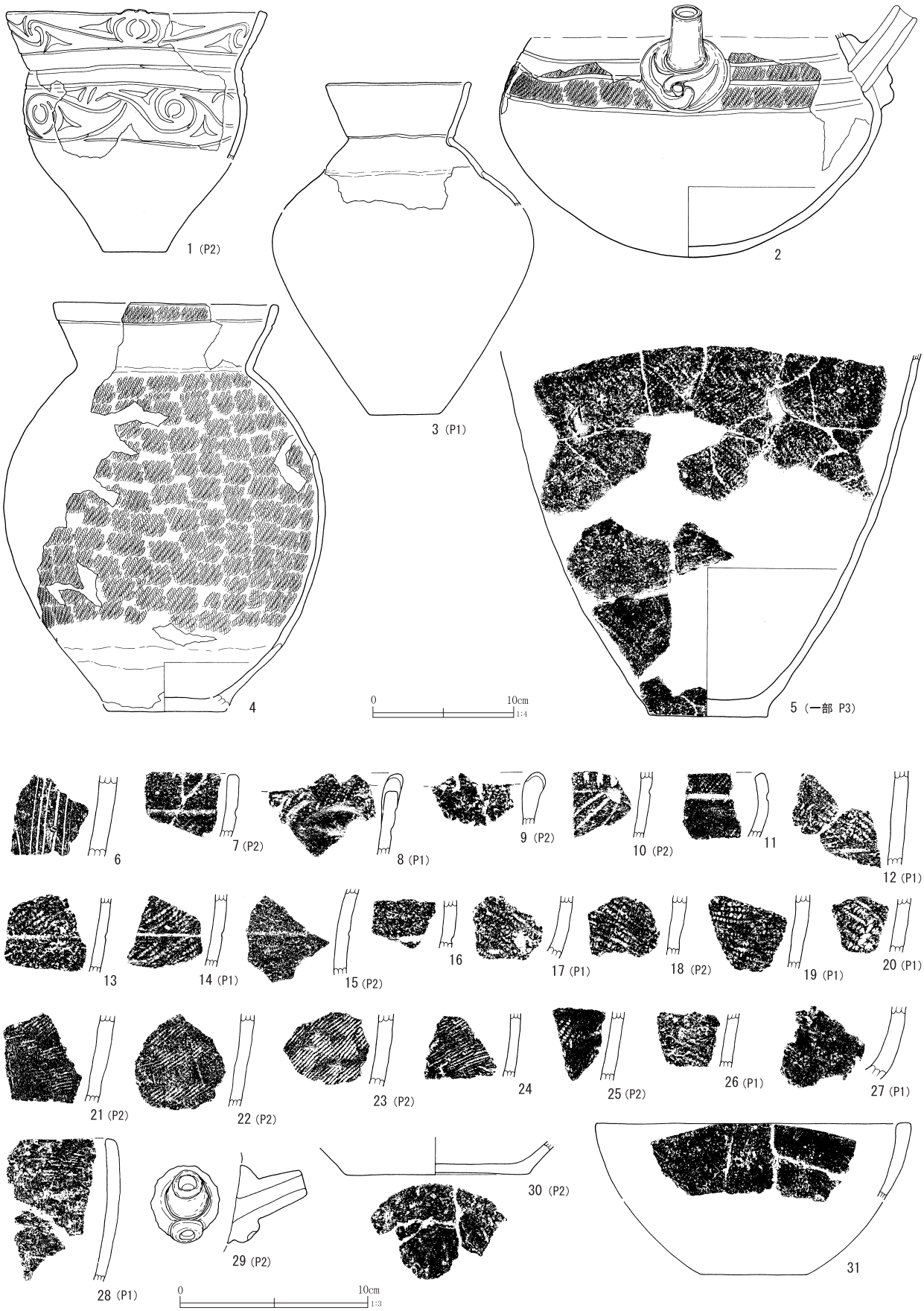


P
1 灰暗褐色土 しまりやや強く、粘性強い
2 灰暗褐色土 しまり強く、粘性弱い
3 灰暗黄褐色土 しまり強く、粘性無い
4 灰暗褐色土 しまりやや弱く、粘性強い
5 灰質白色土 いわゆる白色粘土、黄色味を帯びる
6 灰暗黄褐色土 しまり強く、粘性やや弱い
7 灰暗褐色土 しまりやや強く、粘性強い

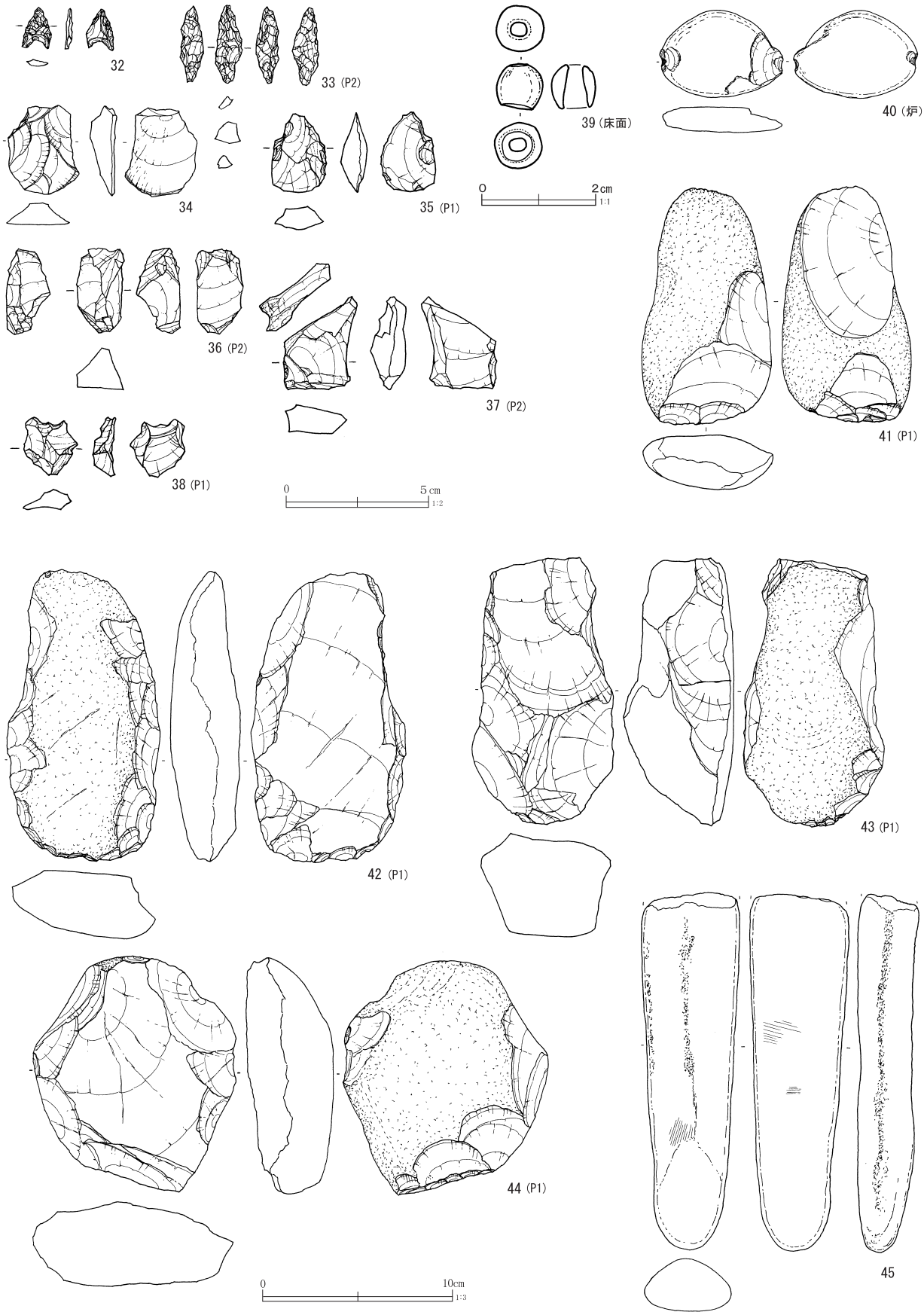
第8図 第2号住居跡



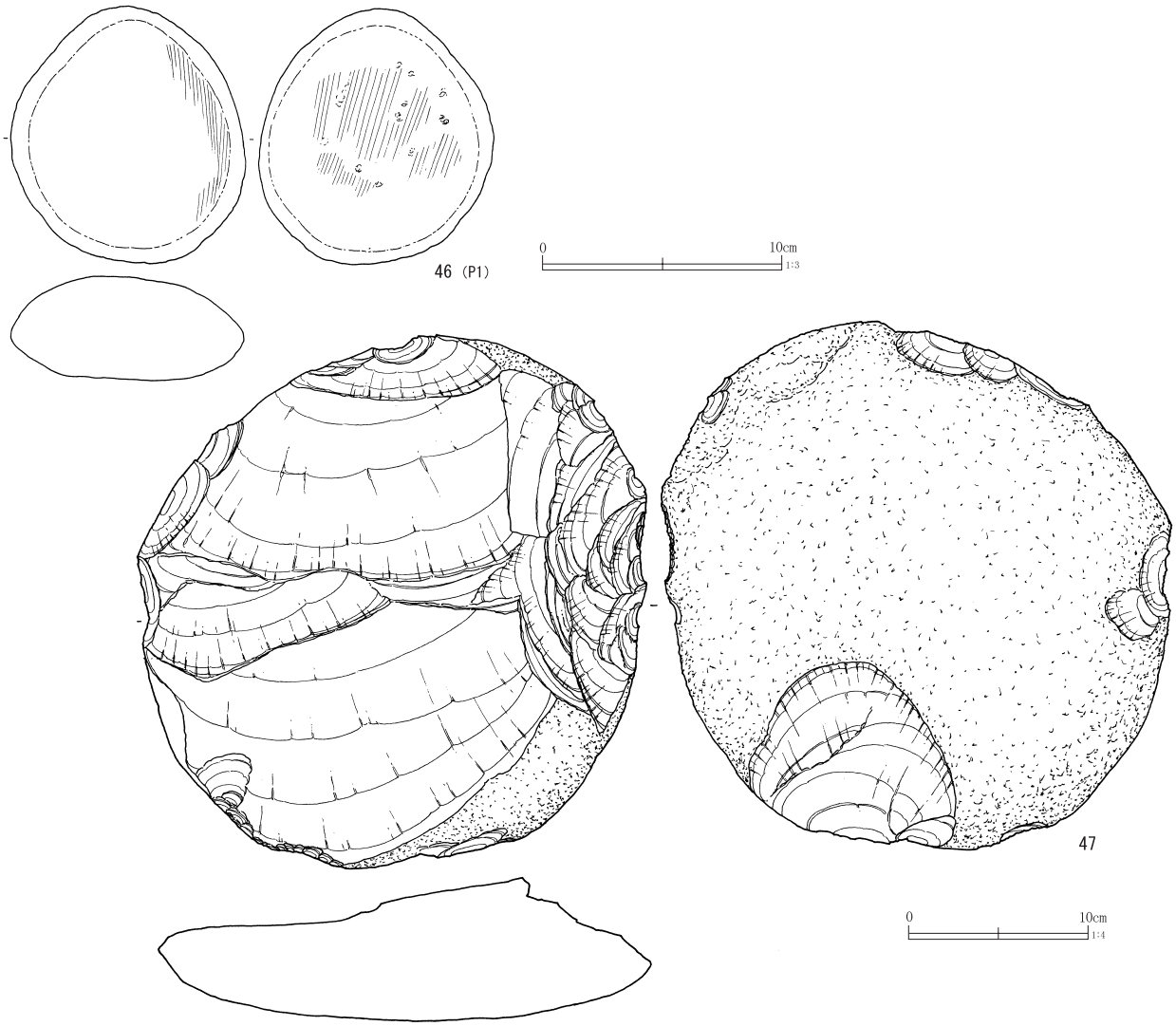
第９図　第2号住居跡遺物分布図



第10図　第2号住居跡出土遺物（1）



第11図　第2号住居跡出土遺物（2）



第12図　第2号住居跡出土遺物（3）

のと思われる。推定口径18.4㎝、現存高10.4㎝を測る。

2は大型の丸底を呈する注口土器で、口縁部を欠損するがほぼ完形である。胴部強く内湾し、最大径より上位に注口部が付く。器面の荒れが著しく、文様等不明瞭な部分があるが、胴部は3本の沈線を横位に施文し、地文に単節ＬＲ縄文を施文する。注口の付け根部は一段高くなり、注口の真下には玉を抱きながら小さく入り組む三叉文を施文している。最大径27.2㎝、現存高16㎝を測る。

3は頸部が括れ、胴部が2段に括れながら張る無文の瓢形を呈する注口土器と思われるが、推定の域を出ない。頸部に沈線状の削り込みが見られるが、体部に文様を描かないものと思われる。器壁が薄く、器面には磨きを施しているものと思われるが、荒れが著しく、内面には至当の整形痕が残される。口径9.2㎝、現存高8.8㎝を測る。

4は頸部が強く括れ、胴部が大きく膨らむ壷形で、口縁部が一部現存、底部を欠損、胴部の約半分が現存する。若干内湾気味に開く口縁部に沈線を廻らして区画し、細かな単節ＬＲ縄文を施文する。胴部との境に明瞭な区画はなく、胴部下端も区画がない。地文は、口縁部と同じ細かな単節ＬＲの横位施文である。推定口径16㎝、最大径22.8㎝、現存高29㎝を

測る。

5は4と折り重なって床面から出土したもので、上半部を欠損するが、下半部はほぼ現存する。器面が荒れていて不明瞭であるが、単節ＲＬとＬＲの結束羽状縄文を施しているものと思われる。底径8.5㎝、現存高26㎝、最大径約30㎝を測る。

6は縦位の多条の沈線が垂下し、後期前葉の堀之内Ⅱ式に比定されるものと思われる破片である。

7は角頭状を呈する口縁部が緩く内湾しながら立つ器形で、口縁部に横位沈線を施文して区画し、胴部にＲＬ縄文を施文する。8は双頭の小波状突起を持ち、突起下に沈線の横楕円形のモチーフを描く。楕円文は二重の沈線で施文する。楕円文の外側には、三叉文を施文しており、地文に単節ＬＲを施す。9は肥厚する口縁部がやや外反する器形を呈し、口縁部上に突起を貼付する。突起上には、口縁部と直交方向に口唇部を巻き込んだ刻み状の沈線を施文する。11は口縁部が内湾気味に立ち、横位沈線で口縁部を区画し、細かな単節ＬＲ縄文を施文する。4の口縁部手法と類似する。

29は注口土器の注口部破片であり、注口下に盲孔を持つ円形貼付文を施文している。

10は縦位の角頭状短沈線列で胴部を区画し、印刻状の刺突文を基点として、三本沈線文の木の葉文を施文する。滋賀里式の木の葉文に類似する。

12～16は沈線の横位区画に、12はＲＬ、他はＬＲ縄文を施文するものである。18～26は縄文のみ施文するもので、18～20、26がＲＬ、21～25はＬＲ縄文である。27、30は無文土器の底部付近の破片、28、31は内湾して開く無文土器の口縁部破片である。

以上、土器群は晩期の安行Ⅲａ式終末からⅢｂ式にかけての時期に比定される。

石器は、大半がピットからの出土である。

32は小型の凹基石鏃で、完形であり、長さ1.5㎝、幅1.05㎝、厚さ0.2㎝、重さ0.3ｇを測る。

33は完形の瑪瑙製石錐で、長さ2.2㎝、幅0.95㎝、厚さ0.85㎝、重さ1.8ｇを測る。

39は床面から出土した翡翠製の玉で、一方向から開けられたロート状の穿孔がある。長さ0.8㎝、幅0.8㎝、厚さ0.75㎝、重さ0.6ｇを測る。

34～38は薄片で、35はチャート製の石鏃未製品と思われ、34は頁岩、36はチャート、37は赤色チャート、38は黒曜石である。

40は炉出土の砂岩製の石錘であり、長さ4.6㎝、幅6.5㎝、厚さ1.5㎝、重さ45.1ｇを測る。41、42は打製石斧で、41は長さ12.4㎝、幅6.85㎝、厚さ2.95㎝、重さ258.4ｇを測る。42は磨製石斧の未製品の可能性もある。長さ15.3㎝、幅8.1㎝、厚さ3.7㎝、重さ518.4ｇを測る。43、44は礫器状であるが、石核と思われる。43は42と同様に、磨製石斧の未製品の可能性もある。43は長さ14.05㎝、幅7.45㎝、厚さ5.8㎝、重さ843.5ｇを測る。44は長さ12.3㎝、幅10.7㎝、厚さ4.65㎝、重さ733ｇを測る。

45は石棒の基部と思われ、長さ18.65㎝、幅5.15㎝、厚さ3.2㎝、重さ495.6ｇを測る。46は磨石で、長さ10.75㎝、幅9.75㎝、厚さ4.5㎝、重さ658.2ｇを測る。47は扁平な円礫で、大型剥片を採る石核である。長さ29㎝、幅27.2㎝、厚さ6.2㎝、重さ7953ｇを測る。

第１表　第１号住居跡計測表

遺構名	位置	長径	短径	深さ
ＳＪ１	C-4·5 D-4·5	3.85	3.54	0.21
炉	D-4	0.64	0.55	0.11
Ｐ１	D-4	0.38	0.31	0.30
Ｐ２	D-4	0.36	0.25	0.13
Ｐ３	C·D-4	0.24	0.20	0.12
Ｐ４	C-4	0.23	0.20	0.07
Ｐ５	C-4	0.45	0.43	0.15
Ｐ６	D-4	0.36	0.31	0.21
Ｐ７	D-5	1.04	0.75	0.64
Ｐ８	D-5	0.53	0.46	0.16
Ｐ９	C·D-5	0.76	0.63	0.36

第２表　第２号住居跡計測表

遺構名	位置	長径	短径	深さ
ＳＪ２	D-4	4.33		0.13
炉	D-4	0.60	0.55	0.06
Ｐ１	D-4	0.87	0.75	0.45
Ｐ２	D-4	0.58	0.53	0.49
Ｐ３	D-4	0.69	0.60	0.26

2　土壙

土壙は調査区全体で22基検出されたが、時期の判明するものは２基だけで、残りの大半は時期不詳である。ピットと認定した中にも、比較的大きなものは土壙になる可能性もある。ここでは、構築時期の見明瞭な２基について、遺物とともに説明を加え、他については計測表で説明に代えたい。

第1号土壙（第13図、第14図）

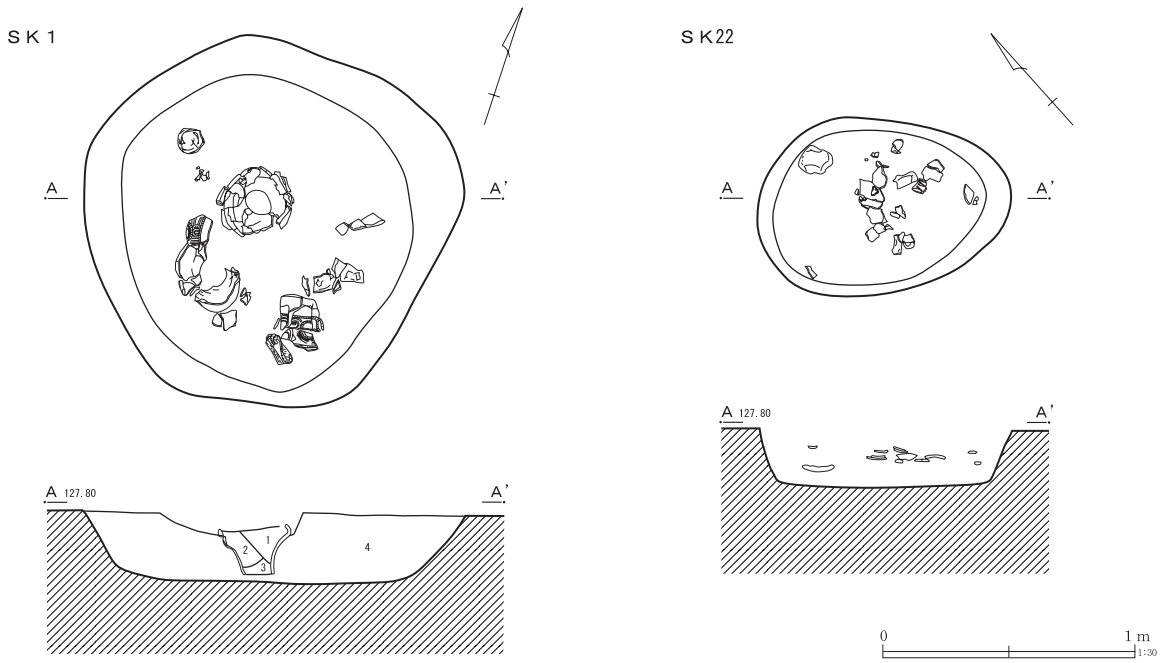
Ｇ－5区に位置する。プランはほぼ円形を呈し、長径1.56ｍ、短径1.37ｍ、深さ0.27ｍを測る。

第１号土壙はＬ字状を呈する調査区の、最も南側の調査区に位置している。覆土が地山と極めて類似する灰暗黄褐色土で、プランの境目が明瞭に把握できなかった。また、第14図１が正位の状態で検出されたことから、当初は住居跡の可能性も考えられた。しかし、周辺のさらに下部からも大形破片が出土したことから、土壙と認識された。土器群は器形の復元できるものが2個体出土しており、その出土状態が通常ではないことから、墓壙もしくは祭祀的な状況が推測される。

さらに、第14図２の土面が出土して注目されたが、埋設されていた土器と、土面の時期が一致しないことから、周辺の他の時期の遺物を共に調査した可能性が高い。

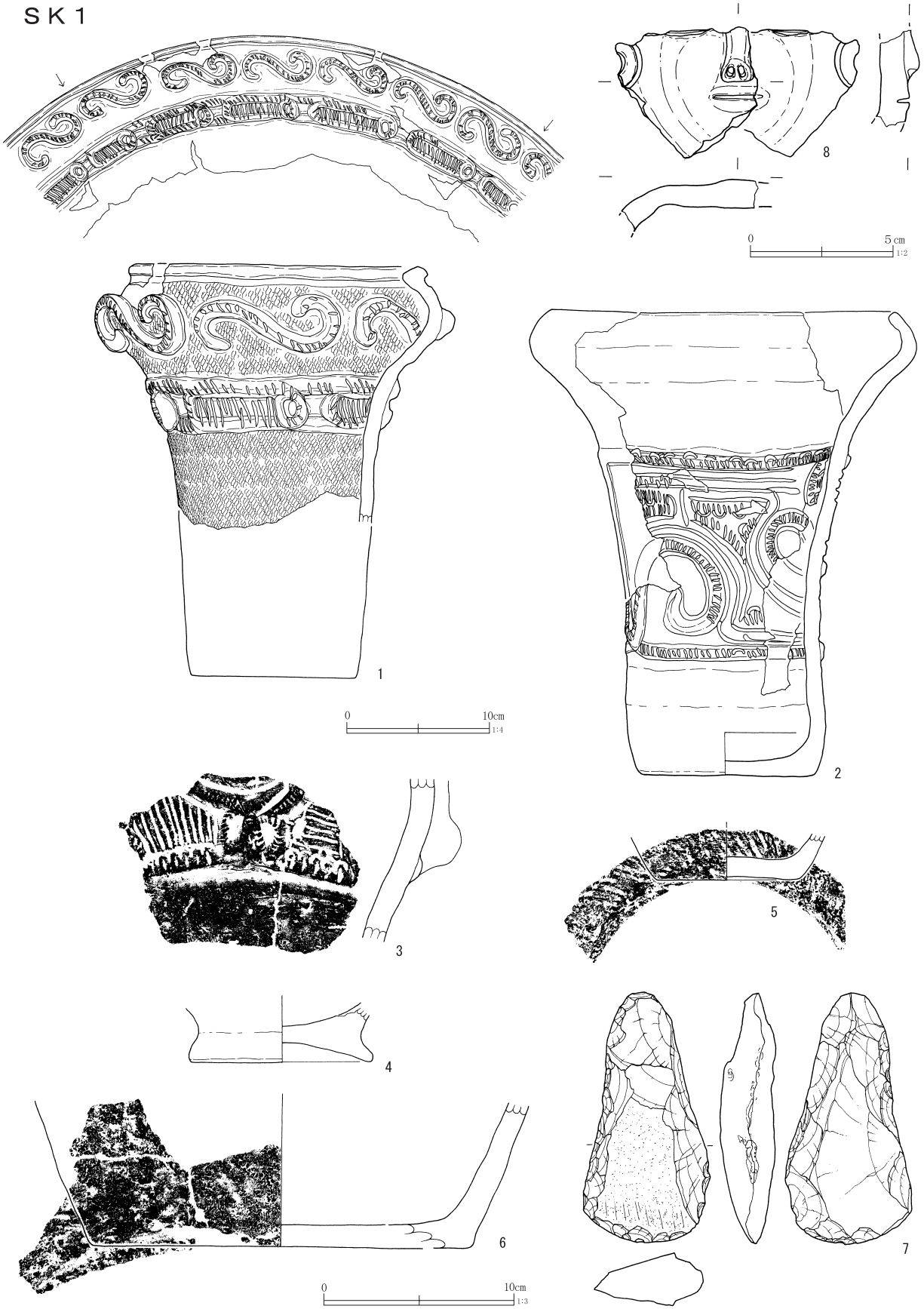
遺物は器形の復元できる土器が2個体、他に大形破片、打製石斧が１点出土した。

第14図１は土壙中央部に正位に埋設されていた土器で、底部を欠損するがほぼ完形土器である。1は口縁部が短い球形状を呈し、筒型状の円筒形の胴部が付く。口唇部は肥厚して、短く外反し、球形状の中央部付近に、刻みを施した横「Ｓ」字状の独立した隆帯文を、６単位に施文する。胴部との境の頚部は2本隆帯で区画し、隆帯間に短隆帯や渦巻き状隆帯を貼付して楕円区画文を区画する。これ等の隆帯上には刻みを施し、楕円区画内には縦位の集合沈線を施文する。この楕円区画文は５単位に展開された



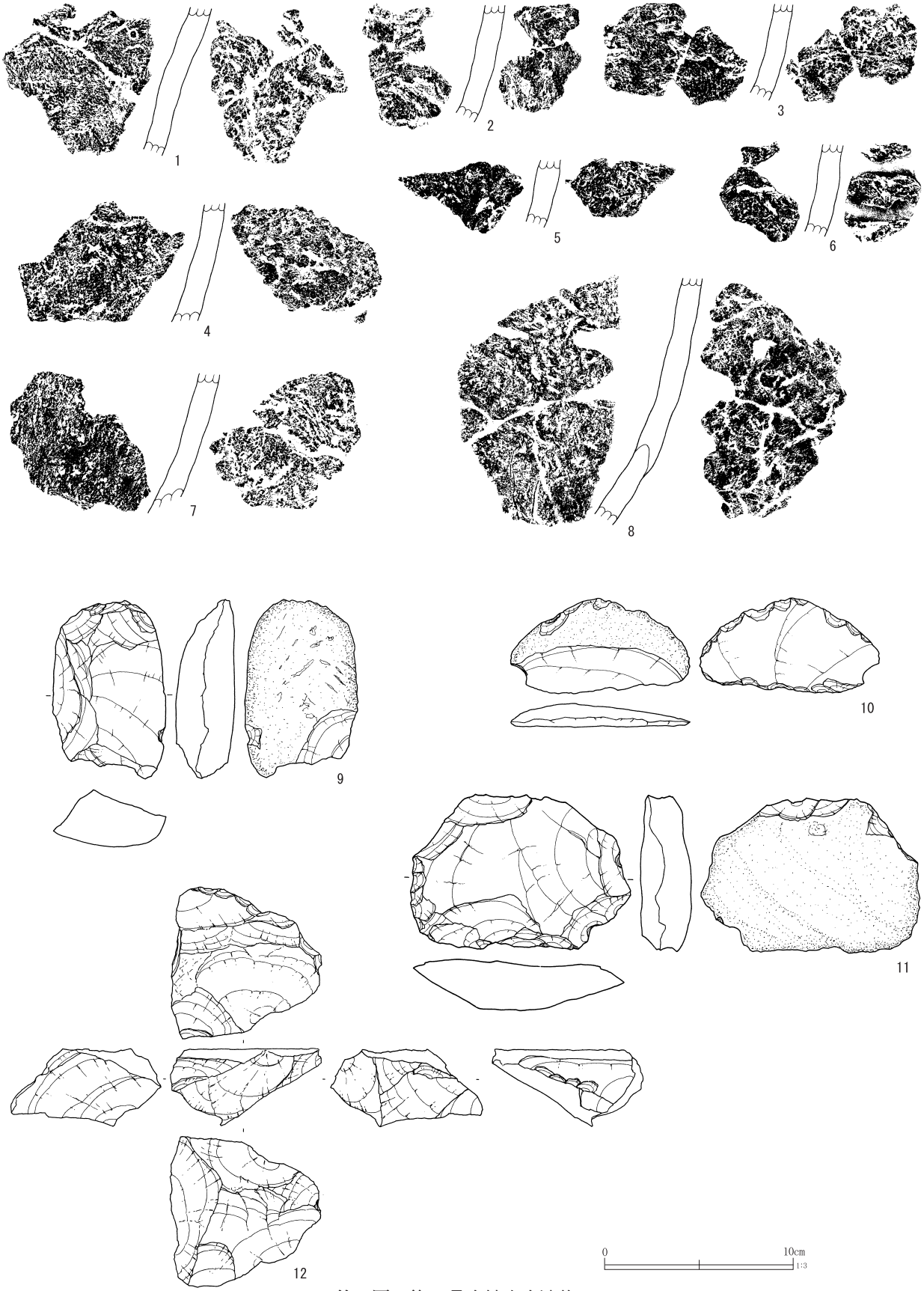
ＳＫ1
1　灰黄褐色土　　砂粒を多量に含み、しまり強い
2　灰暗黄褐色土　砂粒を少量含み、しまり弱い
3　灰暗褐色土　　砂粒を少量含み、しまり強く、粘性弱い
4　灰暗黄褐色土　砂粒を少量含み、しまりやや強い

第13図　土壙（1）

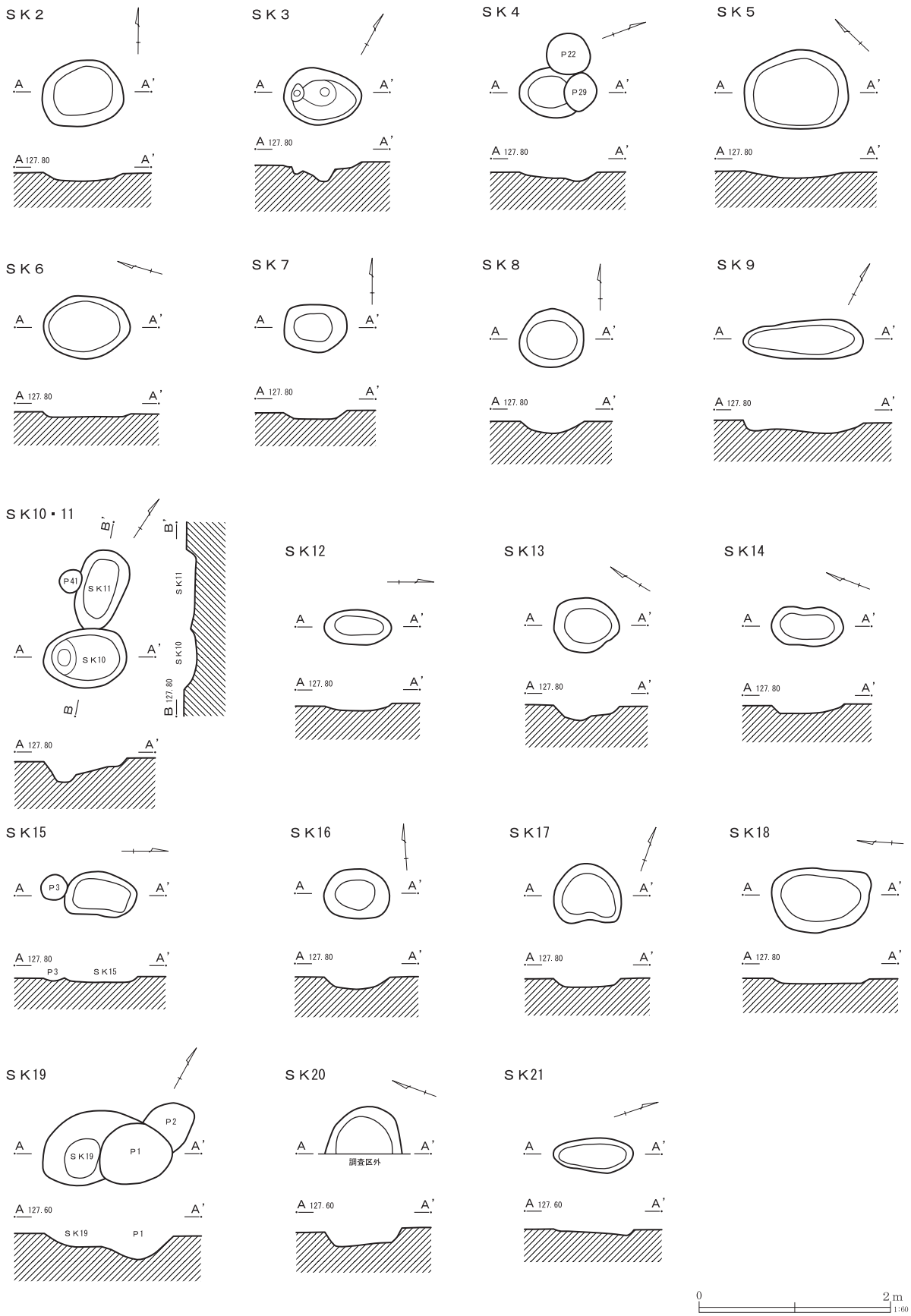


第14図　第1号土壙出土遺物

ＳＫ22



第15図　第22号土壙出土遺物


SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10・11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20
SK21
P22
P29
P41
SK11
SK10
P3
P2
P1
調査区外
A
A'
B
B'
127.80
127.60
0
2m
1:60

第16図　土壙（2）

おり、口縁部の６単位のＳ字状文とは一致させていない。口径20.5㎝、現存高18㎝を測る。口縁部と胴部には単節ＲＬ縄文を施文している。口縁部のＳ字状文と器形は東北南部の大木８ａ式的な要素が窺えるが、頚部の楕円区画は勝坂式的であり、楕円区画の一端を渦巻き状に加工するのは中峠式の特徴である。従って、この土器は、中期中葉最終末の段階で、大木８ａ式を母体として、勝坂式と折衷した様相を持つ土器と評価される。

２は内湾する無文の口縁部が開く器形を呈し、胴部に隆帯の渦巻文を主体とした区画文を施文するものである。隆帯上には刻みを施し、隆帯脇は2本沈線を沿わせ、部分的には蓮華状文を施文する。胴部破片の残りが少なく、モチーフ構成は不明である。胴部が細く、口縁部が開く器形は、１にも共通する。推定口径24㎝、器高32.5㎝、底径12.5㎝を測る。勝坂式終末期に位置付けられる。

３は口縁部から頚部にかけての破片で、刻みを施す頚部区画隆帯に眼鏡状突起が付き、渦巻状文を描く隆帯と連結する。区画内には集合沈線を施文する。

５は単節ＲＬを施す底部破片で、底径7.8㎝を測る。４は上げ底の底部で、台付きになる可能性がある。６は無文土器の底部で、底径20㎝を測る大きな土器である。

８は土面の顔半分が残存しており、目、口に沈線状の切り込みが施され、鼻は筋が通っている。耳は耳飾りを表現しているものと思われる。中期の土面にこの様な顔表現が見られないことから、後・晩期の所産と思われる。

7は完形の打製石斧で、長さ13.1㎝、幅6.65㎝、厚さ2.9㎝、重さ233.1ｇを測る。

第22号土壙（第13図、第15図）

Ｇ－5区に位置する。第1号土壙に隣接して存在する。プランは楕円形を呈し、長径1.02ｍ、短径0.7ｍ、深さ0.24ｍを測る。

遺物は早期末の条痕文系土器と、石器が出土している。

第15図１～８は器壁に繊維を多く含み、脆弱な土器で、内外面に浅く条痕文を施文し、条痕文系土器群終末期の様相を持つものである。本遺跡のグリッドからは縦位鋸歯状の羽状縄文を施文する花積下層式土器が出土しており、それに伴う条痕施文土器の可能性もあるが、土壙内からは縄文施文土器が1点も検出されていない。従って、花積下層式以前の早期の条痕文土器と理解した。

第15図9、11は礫器で、礫表側からの片面剥離を中心とし、刃角の大きな調整を施す。9は長さ9.4㎝、幅６㎝、厚さ3.15㎝、重さ195.4ｇを測る。11は長さ8.25㎝、幅11.6㎝、厚さ2.7㎝、重さ282.1ｇを測る。

10は掻器で、長さ5.01㎝、幅9.45㎝、厚さ1.25㎝、重さ53.9ｇを測る。

12は石核で、長さ4.1㎝、幅7.95㎝、厚さ8㎝、重さ208.8ｇを測る。

第３表　土壙計測表

遺構名	位置	長径	短径	深さ
ＳＫ1	G-5	1.56	1.37	0.27
ＳＫ2	G-5	0.85	0.68	0.07
ＳＫ3	F-3	0.80	0.59	0.19
ＳＫ4	F-3	0.52	(0.48)	0.06
ＳＫ5	F-3	1.09	0.80	0.07
ＳＫ6	F-3	0.90	0.65	0.08
ＳＫ7	G-5	0.65	0.50	0.10
ＳＫ8	E-4	0.68	0.62	0.13
ＳＫ9	E-4	1.25	0.40	0.14
ＳＫ10	E-4	0.86	0.61	0.25
ＳＫ11	E-4	0.83	0.51	0.13

遺構名	位置	長径	短径	深さ
ＳＫ12	G-4	0.70	0.37	0.08
ＳＫ13	F·G-4	0.68	0.58	0.16
ＳＫ14	F-4	0.75	0.40	0.10
ＳＫ15	G-4	0.73	0.47	0.05
ＳＫ16	F-4	0.68	0.52	0.14
ＳＫ17	G-3	0.71	0.60	0.09
ＳＫ18	F-3	1.05	0.66	0.55
ＳＫ19	B-5	0.78	(0.60)	0.15
ＳＫ20	B-5	0.81	0.52	0.16
ＳＫ21	B-5	0.84	0.37	0.04
ＳＫ22	G-5	1.02	0.70	0.24

3　集石土壙

集石土壙は調査区のほぼ中央部の南壁寄りにまとまって存在し、他の遺構と重複するが、確実に伴う土器が出土していないことから、時期を確定できなかった。

第1号集石土壙（第17図）

Ｄ－4 区に位置する。第2号住居跡の北柄に隣接するが、住居跡との関係は把握されない。プランは楕円形を呈し、長径0.91ｍ、短径0.84ｍ、深さ0.27ｍを測る。土壙の覆土上半部に焼礫が集中しており、開口部では南側に焼礫が広がりを見せる。礫は大半がチャートで、激しく焼けており、破砕している。礫は総数502個検出され、総重量は82.2kgであった。遺物は出土していない。

第2号集石土壙（第17図）

Ｅ－4 区に位置する。第 1 号溝と重複するが、溝より古いものと思われる。プランはほぼ円形を呈し、長径0.9ｍ、短径0.8ｍ、深さ0.28ｍを測る。土壙の底面に大きな扁平の閃緑岩2個が敷かれ、その上に焼礫が詰まっている状態であった。開口部ではやや北側に焼礫が広がりを見せる。礫は大半がチャートで、激しく焼けており、破砕している。礫は総数197個検出され、総重量は48kgであった。遺物は出土していない。

第3号集石土壙（第17図）

Ｄ－4 区に位置する。いくつかのピットと重複するが、新旧関係は不明である。プランはほぼ円形を呈し、長径1.3ｍ、短径1.15ｍ、深さ0.31ｍを測る。検出された 3 基の中で、最も規模の大きな集石土壙である。礫は比較的大きなものが多く、プラン内にきっしりと詰まっていたが、第1号集石土壙と同様に、土壙の覆土上半部に集中していた。礫は大半がチャートで、激しく焼けており、破砕している。礫は総数534個検出され、総重量は169.6kgであった。遺物は出土していない。

以上の集石土壙は、遺物が出土していないため時期を決定できないが、近隣の遺跡に見られる集石土壙と類似する傾向があろ。土壙底部に扁平礫を敷く様に据える手法は、中期の勝坂式終末から加曽利Ｅ式の前半段階に見られることが多い。本遺跡では、やや離れているが中期の勝坂式終末期の土壙が検出されており、グリッドにおいても加曽利Ｅ式の古い土器群が検出されていないことから、勝坂式終末期に比定されるものと思われる。

4　溝跡

第1号溝跡（第18図）

Ｄ－4～Ｆ－2 区にかけて位置する。Ｄ－4 区で第 2 号住居跡と重複し、Ｅ－3 区で第2号集石遺構と重複する。本溝は途切れながら存在し、両端で鋭状に曲がり、斜面の勾配とほぼ並行することから、区画溝と思われる。遺物は出土していない。

第2号溝跡（第18図）

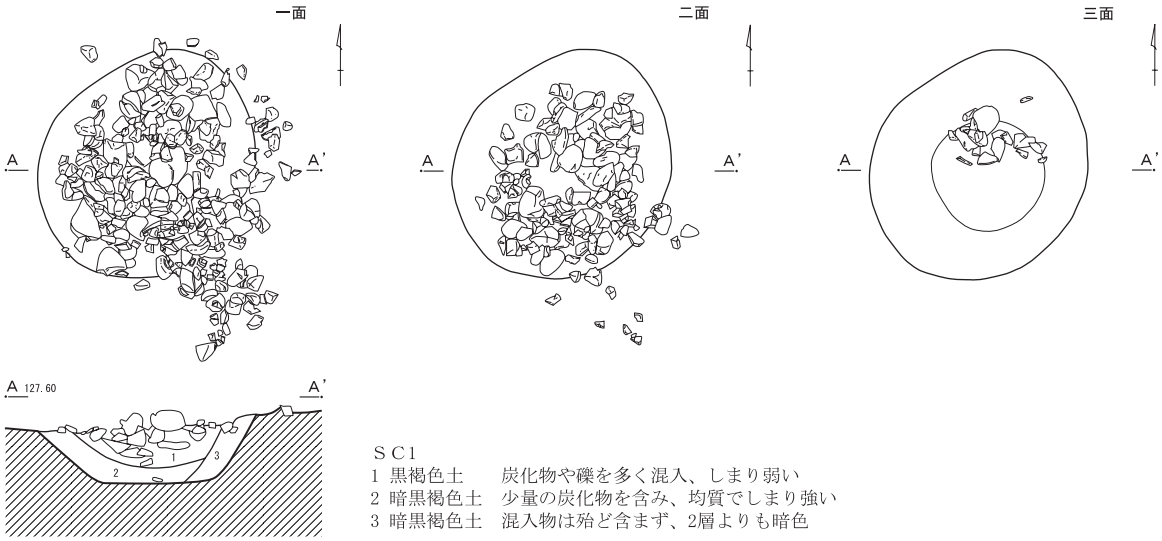
Ｆ－3～Ｇ－3 区に位置する。やや幅が広いが、第 1 号溝とほぼ平行すると思われ、同様に区画溝と思われる。遺物は出土していない。

5　ピット跡

ピット跡は多数検出され、特にＥ－4 区に集中し、住居跡の柱穴を構成するものも存在する可能性がある。また、Ｆ－3 区からＧ－4 区にかけてもピットが集中する傾向にあるが、この地域で遺物の出土が少なく、柱穴状のまとまりが見られないことから、住居跡の可能性は低いものと思われる。

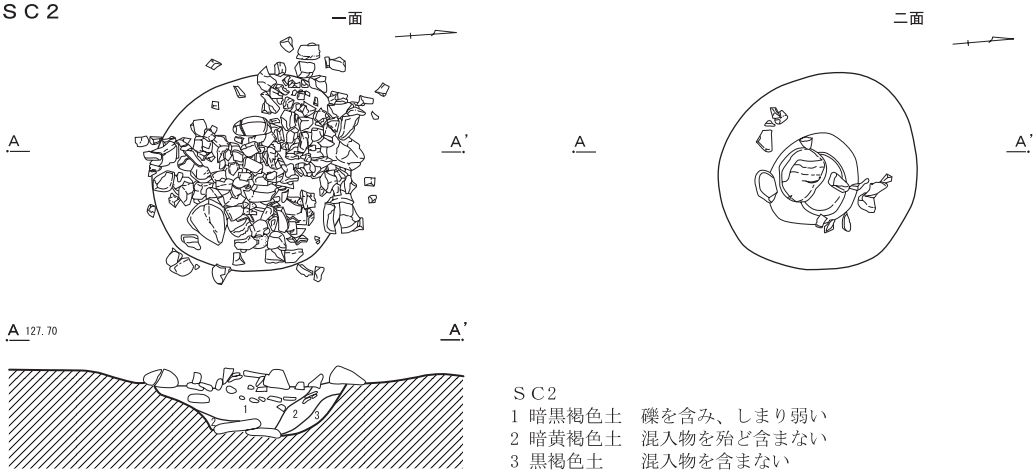
他の地区もピットが散在するが、まとまりはみられない傾向にある。

ＳＣ１



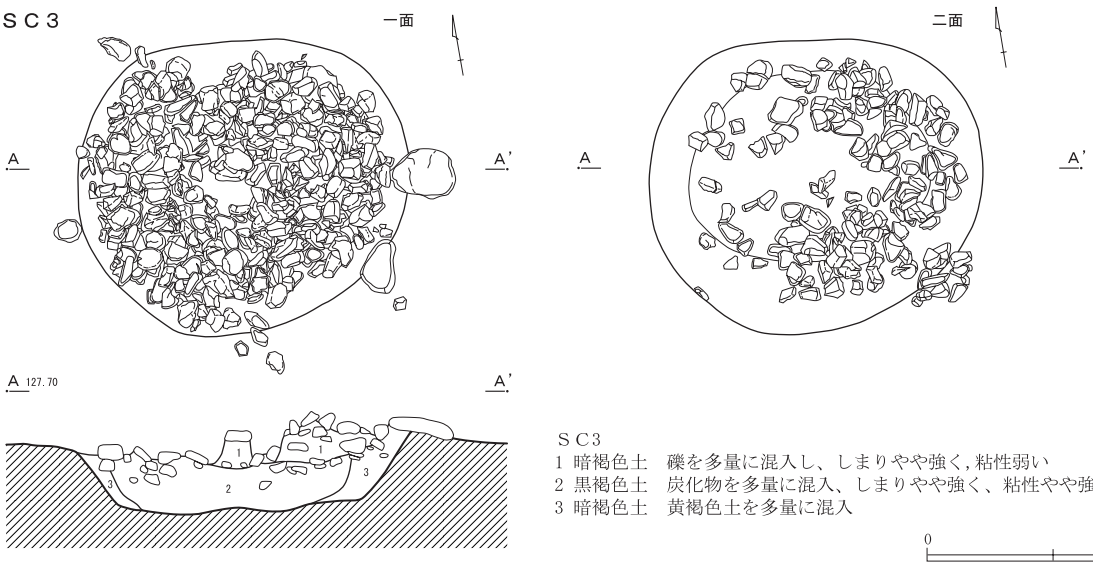
ＳＣ1
1 黒褐色土　　炭化物や礫を多く混入、しまり弱い
2 暗黒褐色土　少量の炭化物を含み、均質でしまり強い
3 暗黒褐色土　混入物は殆ど含まず、2層よりも暗色

ＳＣ２



ＳＣ2
1 暗黒褐色土　礫を含み、しまり弱い
2 暗黄褐色土　混入物を殆ど含まない
3 黒褐色土　　混入物を含まない

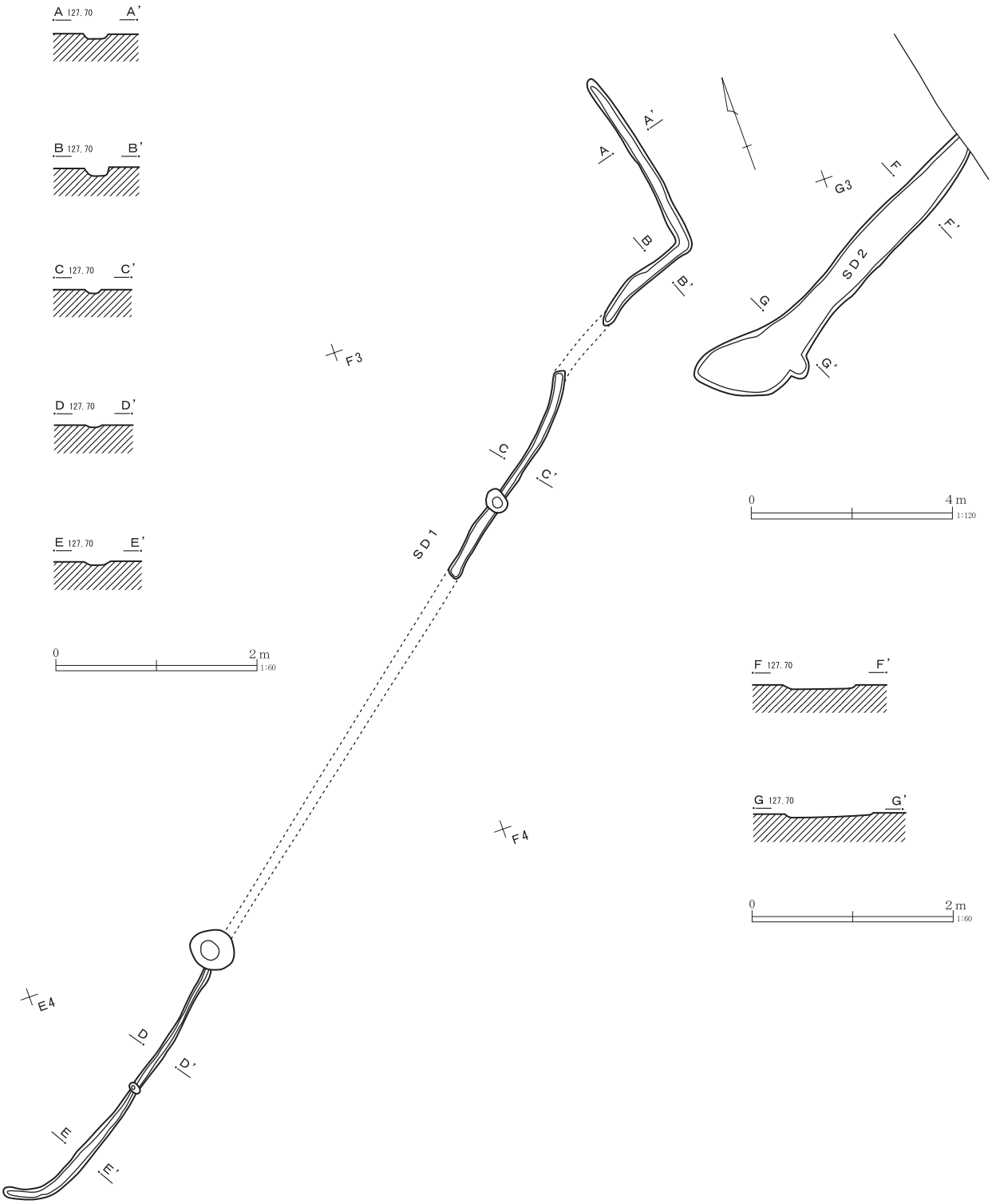
ＳＣ３



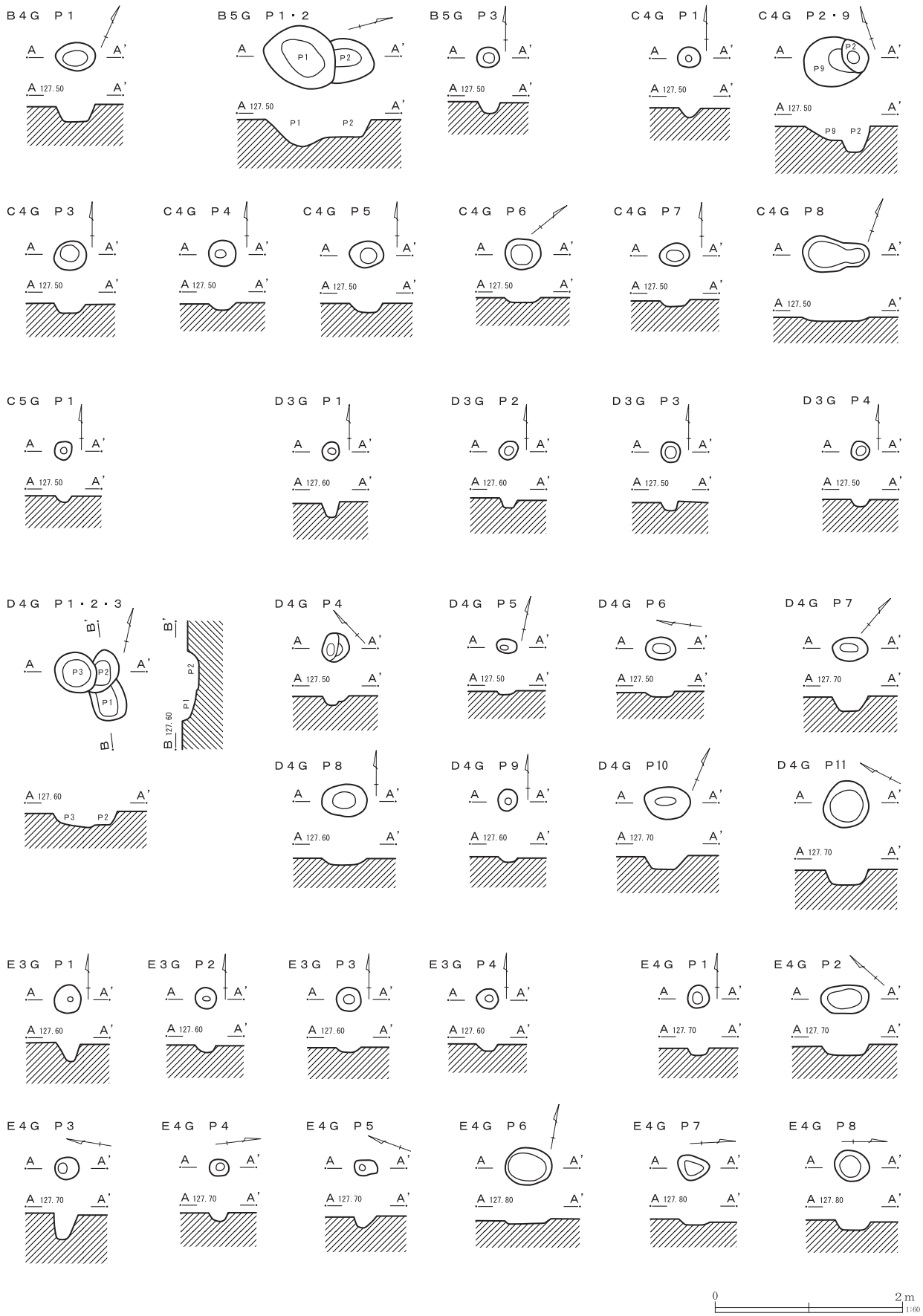
ＳＣ3
1 暗褐色土　礫を多量に混入し、しまりやや強く,粘性弱い
2 黒褐色土　炭化物を多量に混入、しまりやや強く、粘性やや強い
3 暗褐色土　黄褐色土を多量に混入

0　1m
1:30

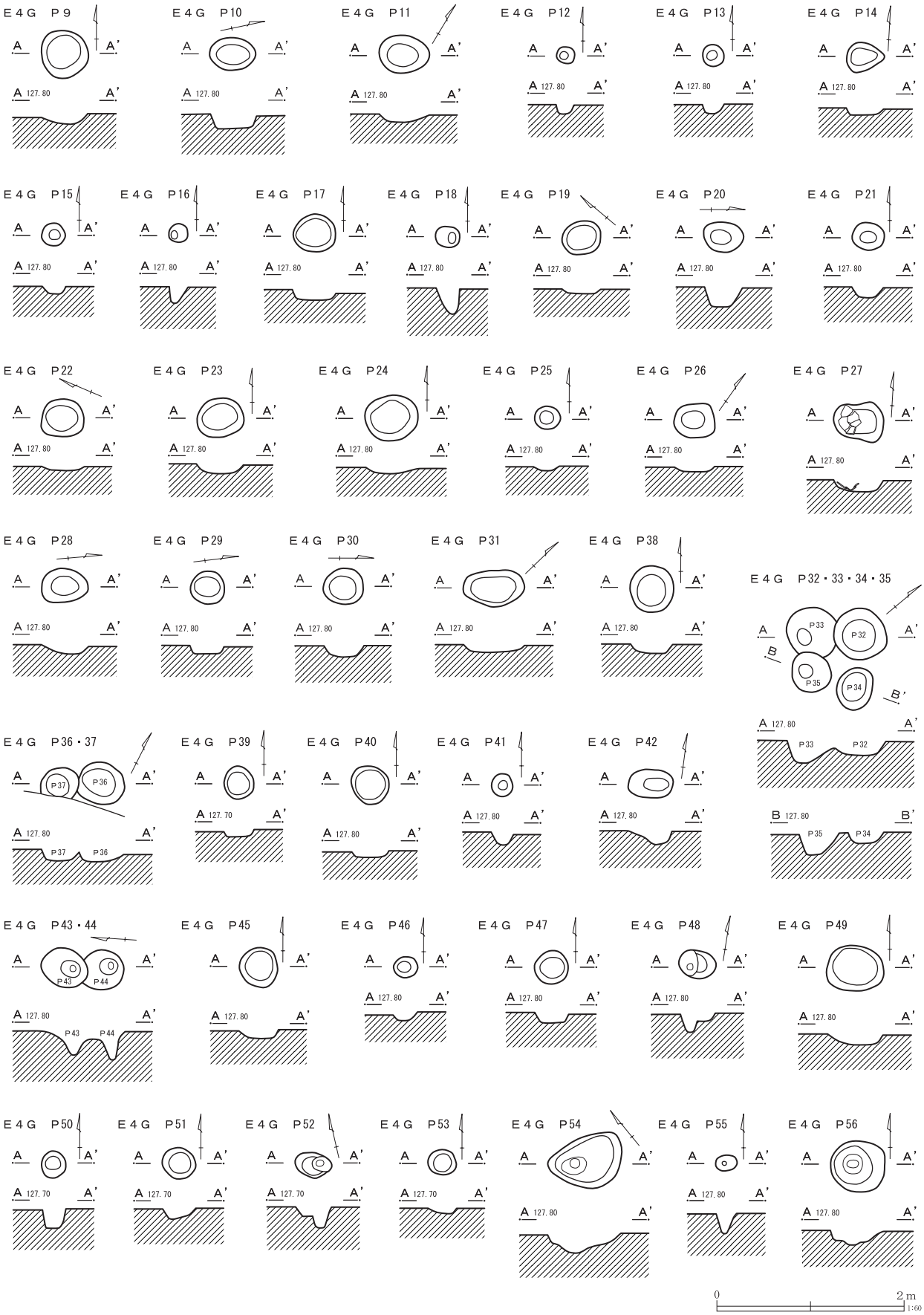
第17図　集石土壙


A 127.70 A'
B 127.70 B'
C 127.70 C'
D 127.70 D'
E 127.70 E'
0 2m 1:60
F 127.70 F'
G 127.70 G'
0 2m 1:60
0 4m 1:120
SD1
SD2
F3
F4
E4
G3

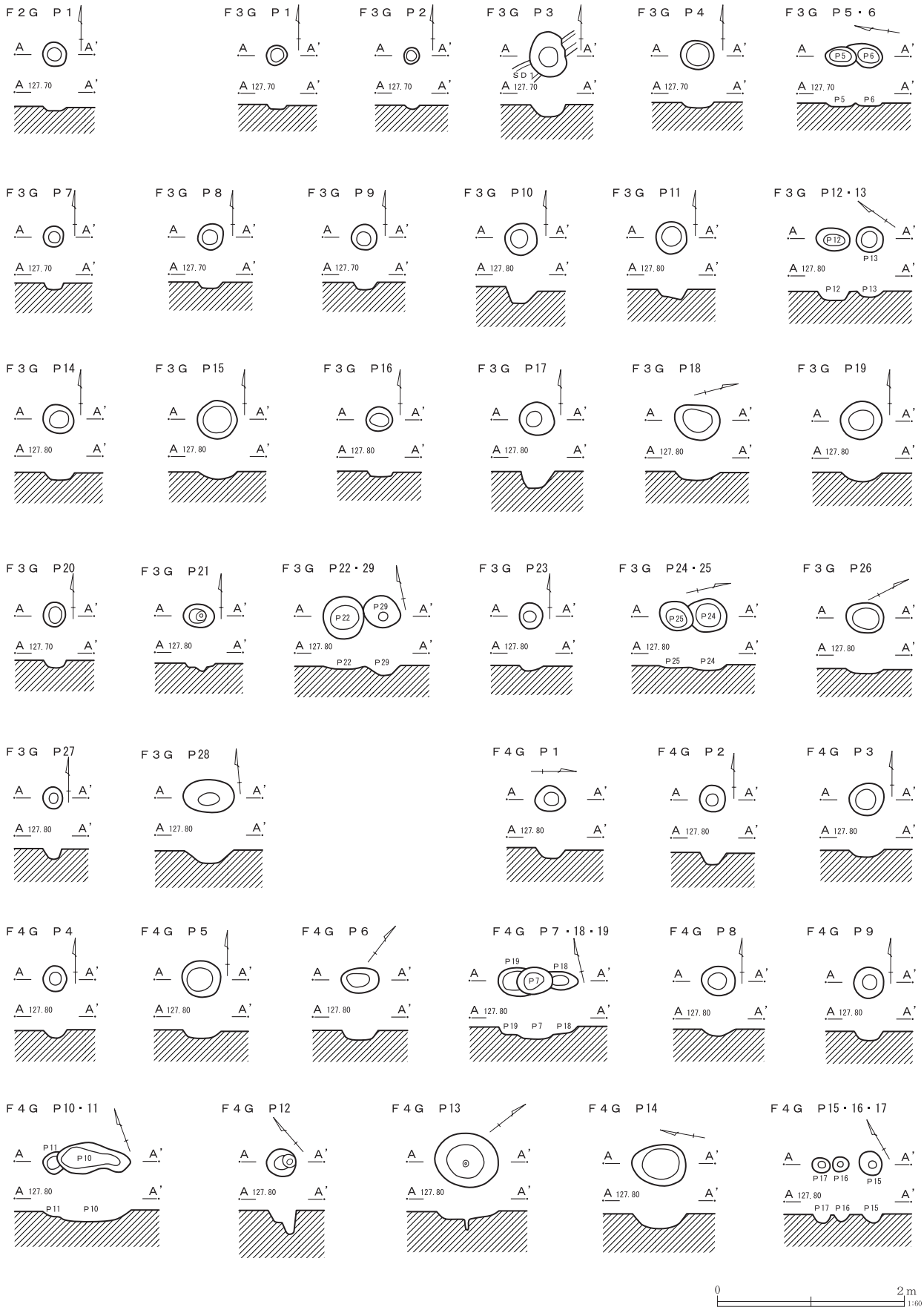
第18図　溝跡


B4G P1
B5G P1・2
B5G P3
C4G P1
C4G P2・9
C4G P3
C4G P4
C4G P5
C4G P6
C4G P7
C4G P8
C5G P1
D3G P1
D3G P2
D3G P3
D3G P4
D4G P1・2・3
D4G P4
D4G P5
D4G P6
D4G P7
D4G P8
D4G P9
D4G P10
D4G P11
E3G P1
E3G P2
E3G P3
E3G P4
E4G P1
E4G P2
E4G P3
E4G P4
E4G P5
E4G P6
E4G P7
E4G P8
0
2 m
1:60

第19図　ピット跡（1）


E4G P9
E4G P10
E4G P11
E4G P12
E4G P13
E4G P14
E4G P15
E4G P16
E4G P17
E4G P18
E4G P19
E4G P20
E4G P21
E4G P22
E4G P23
E4G P24
E4G P25
E4G P26
E4G P27
E4G P28
E4G P29
E4G P30
E4G P31
E4G P38
E4G P32・33・34・35
E4G P36・37
E4G P39
E4G P40
E4G P41
E4G P42
E4G P43・44
E4G P45
E4G P46
E4G P47
E4G P48
E4G P49
E4G P50
E4G P51
E4G P52
E4G P53
E4G P54
E4G P55
E4G P56
A 127.80
A 127.70
B 127.80
0
2m
1:60

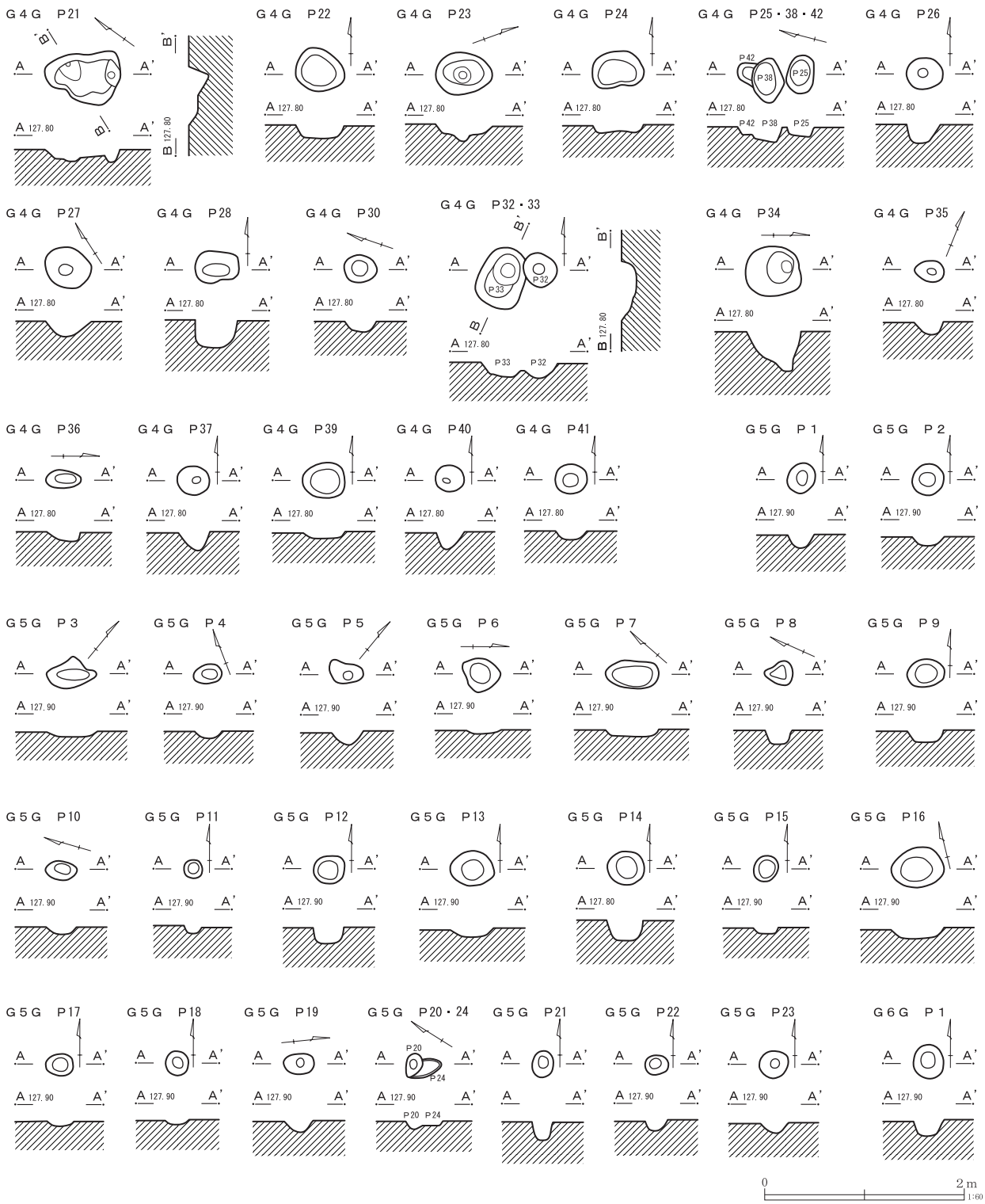
第20図　ピット跡（2）


F2G P1
F3G P1
F3G P2
F3G P3
F3G P4
F3G P5・6
F3G P7
F3G P8
F3G P9
F3G P10
F3G P11
F3G P12・13
F3G P14
F3G P15
F3G P16
F3G P17
F3G P18
F3G P19
F3G P20
F3G P21
F3G P22・29
F3G P23
F3G P24・25
F3G P26
F3G P27
F3G P28
F4G P1
F4G P2
F4G P3
F4G P4
F4G P5
F4G P6
F4G P7・18・19
F4G P8
F4G P9
F4G P10・11
F4G P12
F4G P13
F4G P14
F4G P15・16・17
A
A'
A 127.70
A 127.80
SD1
P5
P6
P12
P13
P22
P29
P25
P24
P7
P18
P19
P11
P10
P17
P16
P15
0
2m
1:60

第21図　ピット跡（3）

F5G P1
F5G P2
F5G P3
F5G P4
F5G P5
F5G P6
F5G P7
F6G P1
排水口
F6G P2
F6G P3
G3G P1
G3G P2・3
G3G P4
G3G P5
G3G P6
G3G P7
G3G P8
G3G P9
G3G P10
G3G P11
G3G P12
G3G P13
G3G P14
G3G P15
G3G P16
G4G P1・2
G4G P3
G4G P4
G4G P5
G4G P9
G4G P6・7・8・29・31
G4G P10
G4G P11
G4G P12
G4G P13
G4G P14
G4G P15
G4G P16
G4G P17
G4G P18
G4G P19
G4G P20
A 127.80
0
2m
1:60

第22図　ピット跡（4）



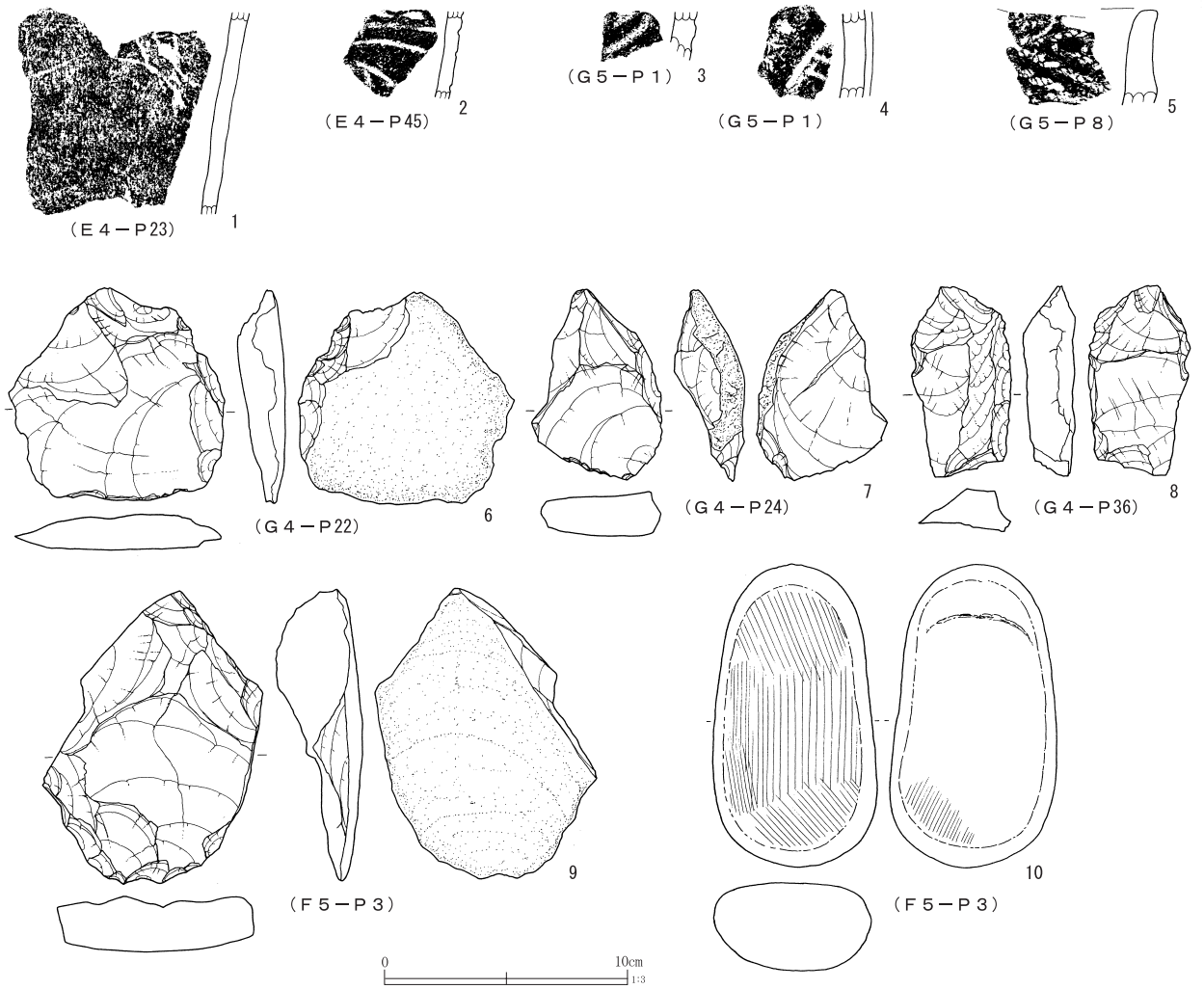
第23図　ピット跡（5）

第４表　集石土壙計測表

遺構名	位置	長径	短径	深さ
ＳＣ1	D-4	0.91	0.84	0.27
ＳＣ2	E-4	0.90	0.80	0.28
ＳＣ3	E-4	1.30	1.15	0.31

第５表　溝跡計測表

遺構名	位置	長さ	幅	深さ
ＳＤ1	D-4～F-2	(16.8) 27.1	0.24	0.08
ＳＤ2	F-3～G-3	0.70	0.88	0.05



第24図　ピット跡出土遺物

ピット出土遺物（第24図）

1 はＥ－4 区Ｐ23出土であり、晩期の深鉢形土器の無文の胴部破片である。

2 はＥ－4 区Ｐ45出土であり、横位の連続刺突文と、沈線の曲線モチーフを描く。晩期の所産と思われる。

3、4 はＧ－5区Ｐ1 出土であり、赤褐色を呈し、隆帯と太い沈線を施文する。中期の勝坂式に比定される。

5 はＧ－5区Ｐ8出土であり、繊維を含み、口縁部に 2 段の縄の側面圧痕文を施文する花積下層式土器の口縁部破片である。

6 はＧ－4 区Ｐ22出土の砂岩製の掻器であり、剥離の際のエッジに細かな調整剥離を施す。長さ8.7㎝、幅8.9㎝、厚さ2㎝、重さ130.3ｇを測る。

7 はＧ－4 区Ｐ24出土の硅岩製の掻器であり、剥離の際のエッジに調整剥離を施す。長さ7.85㎝、幅5.3㎝、厚さ2.85㎝、重さ195.4ｇを測る。

8 はＧ－4 区Ｐ36出土のチャート製の剥片であり、長さ7.8㎝、幅4.1㎝、厚さ2.15㎝、重さ64.6ｇを測る。

9 はＦ－5区Ｐ3出土の砂岩製の礫器であり、長さ12㎝、幅9.05㎝、厚さ3.55㎝、重さ304.4ｇを測る。

10はＦ－5区Ｐ3出土の閃緑岩製の磨石であり、長さ12.4㎝、幅6.8㎝、厚さ3.7㎝、重さ462.3ｇを測る。

第６表　グリッドピット計測表

位置	遺構名	長径	短径	深さ
B-4	P１	0.42	0.31	0.17
B-5	P１	0.75	0.63	0.25
B-5	P２	0.47	(0.39)	0.19
B-5	P３	0.24	0.21	0.13
C-4	P１	0.24	0.22	0.11
C-4	P２	0.39	0.28	0.28
C-4	P３	0.34	0.30	0.10
C-4	P４	0.29	0.28	0.07
C-4	P５	0.36	0.28	0.10
C-4	P６	0.38	0.32	0.05
C-4	P７	0.32	0.25	0.06
C-4	P８	0.70	0.34	0.04
C-4	P９	0.52	(0.40)	0.15
C-5	P１	0.20	0.18	0.07
D-3	P１	0.20	0.17	0.17
D-3	P２	0.21	0.18	0.12
D-3	P３	0.22	0.20	0.09
D-3	P４	0.20	0.19	0.07
D-4	P１	0.35	(0.33)	0.13
D-4	P２	0.47	(0.24)	0.15
D-4	P３	0.45	0.44	0.17
D-4	P４	0.31	0.29	0.10
D-4	P５	0.23	0.15	0.04
D-4	P６	0.32	0.24	0.06
D-4	P７	0.39	0.26	0.17
D-4	P８	0.48	0.35	0.07
D-4	P９	0.23	0.20	0.06
D-4	P10	0.50	0.35	0.15
D-4	P11	0.51	0.46	0.17
E-3	P１	0.30	0.28	0.20
E-3	P２	0.23	0.23	0.08
E-3	P３	0.25	0.25	0.06
E-3	P４	0.23	0.23	0.07
E-4	P１	0.24	0.23	0.08
E-4	P２	0.51	0.29	0.12
E-4	P３	0.26	0.23	0.2
E-4	P４	0.20	0.17	0.10
E-4	P５	0.24	0.16	0.12
E-4	P６	0.49	0.39	0.05
E-4	P７	0.33	0.26	0.07
E-4	P８	0.37	0.33	0.10
E-4	P９	0.50	0.50	0.12
E-4	P10	0.49	0.35	0.16
E-4	P11	0.54	0.40	0.08
E-4	P12	0.19	0.17	0.10
E-4	P13	0.23	0.23	0.10
E-4	P14	0.40	0.30	0.07
E-4	P15	0.25	0.25	0.08
E-4	P16	0.20	0.20	0.17
E-4	P17	0.45	0.40	0.11
E-4	P18	0.25	0.22	0.28
E-4	P19	0.41	0.36	0.05
E-4	P20	0.42	0.32	0.21
E-4	P21	0.34	0.29	0.11
E-4	P22	0.44	0.40	0.04
E-4	P23	0.50	0.41	0.10
E-4	P24	0.56	0.48	0.07
E-4	P25	0.27	0.25	0.05
E-4	P26	0.43	0.37	0.07
E-4	P27	0.43	0.33	0.11
E-4	P28	0.49	0.35	0.10

位置	遺構名	長径	短径	深さ
E-4	P29	0.36	0.35	0.09
E-4	P30	0.42	0.37	0.12
E-4	P31	0.65	0.38	0.07
E-4	P32	0.56	0.55	0.16
E-4	P33	0.57	0.53	0.26
E-4	P34	0.46	0.38	0.14
E-4	P35	0.43	0.41	0.23
E-4	P36	0.50	0.43	0.13
E-4	P37	0.40	(0.31)	0.11
E-4	P38	0.48	0.46	0.11
E-4	P39	0.35	0.32	0.08
E-4	P40	0.43	0.38	0.07
E-4	P41	0.25	0.23	0.13
E-4	P42	0.47	0.30	0.13
E-4	P43	0.49	0.41	0.22
E-4	P44	0.48	0.44	0.26
E-4	P45	0.43	0.40	0.09
E-4	P46	0.26	0.20	0.09
E-4	P47	0.36	0.35	0.11
E-4	P48	0.39	0.29	0.19
E-4	P49	0.60	0.48	0.11
E-4	P50	0.29	0.25	0.20
E-4	P51	0.36	0.33	0.12
E-4	P52	0.40	0.27	0.24
E-4	P53	0.30	0.27	0.06
E-4	P54	0.80	0.56	0.21
E-4	P55	0.23	0.17	0.22
E-4	P56	0.60	0.55	0.14
F-2	P１	0.26	0.25	0.05
F-3	P１	0.22	0.20	0.05
F-3	P２	0.18	0.16	0.05
F-3	P３	0.48	0.40	0.13
F-3	P４	0.35	0.30	0.06
F-3	P５	0.33	0.20	0.04
F-3	P６	0.38	0.24	0.04
F-3	P７	0.23	0.22	0.08
F-3	P８	0.28	0.27	0.08
F-3	P９	0.28	0.27	0.08
F-3	P10	0.34	0.33	0.17
F-3	P11	0.34	0.32	0.11
F-3	P12	0.35	0.25	0.09
F-3	P13	0.34	0.28	0.07
F-3	P14	0.33	0.28	0.09
F-3	P15	0.42	0.40	0.08
F-3	P16	0.29	0.23	0.06
F-3	P17	0.36	0.34	0.18
F-3	P18	0.48	0.38	0.09
F-3	P19	0.43	0.40	0.09
F-3	P20	0.25	0.23	0.08
F-3	P21	0.34	0.25	0.09
F-3	P22	0.46	0.43	0.04
F-3	P23	0.28	0.24	0.07
F-3	P24	0.45	0.38	0.05
F-3	P25	0.35	0.31	0.04
F-3	P26	0.40	0.33	0.05
F-3	P27	0.24	0.20	0.11
F-3	P28	0.55	0.35	0.15
F-3	P29	0.41	0.34	0.09
F-4	P１	0.32	0.28	0.11
F-4	P２	0.28	0.26	0.15
F-4	P３	0.36	0.34	0.09

位置	遺構名	長径	短径	深さ
F-4	P 4	0.28	0.25	0.09
F-4	P 5	0.40	0.39	0.09
F-4	P 6	0.40	0.26	0.10
F-4	P 7	0.37	0.29	0.12
F-4	P 8	0.35	0.30	0.08
F-4	P 9	0.33	0.30	0.10
F-4	P 10	0.80	0.33	0.13
F-4	P 11	0.22	(0.16)	0.05
F-4	P 12	0.32	0.31	0.27
F-4	P 13	0.66	0.56	0.20
F-4	P 14	0.57	0.45	0.17
F-4	P 15	0.27	0.24	0.10
F-4	P 16	0.18	0.16	0.08
F-4	P 17	0.20	0.16	0.09
F-4	P 18	(0.26)	0.20	0.06
F-4	P 19	0.30	(0.21)	0.07
F-5	P 1	0.25	0.19	0.08
F-5	P 2	0.35	0.26	0.12
F-5	P 3	0.43	0.40	0.13
F-5	P 4	0.55	0.30	0.15
F-5	P 5	0.32	0.26	0.13
F-5	P 6	0.41	0.29	0.08
F-5	P 7	0.33	0.25	0.20
F-6	P 1	0.44	(0.23)	0.10
F-6	P 2	0.41	0.35	0.10
F-6	P 3	0.33	0.28	0.15
G-3	P 1	0.23	0.22	0.08
G-3	P 2	0.43	0.39	0.19
G-3	P 3	0.48	0.41	0.07
G-3	P 4	0.38	0.38	0.10
G-3	P 5	0.49	0.33	0.13
G-3	P 6	0.30	0.24	0.07
G-3	P 7	0.33	0.24	0.13
G-3	P 8	0.38	0.36	0.09
G-3	P 9	0.55	0.42	0.15
G-3	P 10	0.42	0.38	0.08
G-3	P 11	0.30	0.19	0.05
G-3	P 12	0.31	0.33	0.23
G-3	P 13	0.21	0.19	0.15
G-3	P 14	0.20	0.20	0.16
G-3	P 15	0.38	0.25	0.12
G-3	P 16	0.38	0.33	0.08
G-4	P 1	0.48	0.25	0.08
G-4	P 2	0.30	0.26	0.07
G-4	P 3	0.28	0.27	0.09
G-4	P 4	0.50	0.36	0.07
G-4	P 5	0.45	0.35	0.15
G-4	P 6	0.32	0.28	0.15
G-4	P 7	(0.40)	0.34	0.12
G-4	P 8	0.32	(0.22)	0.07
G-4	P 9	0.49	0.38	0.15
G-4	P 10	0.43	0.31	0.10
G-4	P 11	0.38	0.30	0.09
G-4	P 12	0.51	0.50	0.10
G-4	P 13	0.43	0.39	0.12

位置	遺構名	長径	短径	深さ
G-4	P 14	0.30	0.24	0.13
G-4	P 15	0.46	0.35	0.11
G-4	P 16	0.38	0.36	0.11
G-4	P 17	0.36	0.31	0.20
G-4	P 18	0.31	0.29	0.12
G-4	P 19	0.63	0.25	0.15
G-4	P 20	0.48	0.41	0.18
G-4	P 21	0.75	0.45	0.14
G-4	P 22	0.49	0.41	0.13
G-4	P 23	0.56	0.42	0.16
G-4	P 24	0.52	0.34	0.08
G-4	P 25	0.38	0.27	0.09
G-4	P 26	0.36	0.31	0.19
G-4	P 27	0.48	0.39	0.16
G-4	P 28	0.43	0.30	0.28
G-4	P 29	0.30	0.30	0.13
G-4	P 30	0.32	0.27	0.11
G-4	P 31	0.35	0.25	0.08
G-4	P 32	0.35	0.31	0.16
G-4	P 33	0.59	0.45	0.16
G-4	P 34	0.54	0.50	0.40
G-4	P 35	0.28	0.21	0.12
G-4	P 36	0.35	0.18	0.10
G-4	P 37	0.32	0.29	0.19
G-4	P 38	0.44	0.33	0.15
G-4	P 39	0.43	0.35	0.07
G-4	P 40	0.28	0.26	0.17
G-4	P 41	0.31	0.27	0.09
G-4	P 42	0.20	(0.14)	0.07
G-5	P 1	0.30	0.28	0.13
G-5	P 2	0.21	0.21	0.10
G-5	P 3	0.50	0.30	0.06
G-5	P 4	0.28	0.19	0.07
G-5	P 5	0.32	0.19	0.14
G-5	P 6	0.36	0.33	0.06
G-5	P 7	0.54	0.28	0.08
G-5	P 8	0.28	0.23	0.15
G-5	P 9	0.36	0.26	0.13
G-5	P 10	0.31	0.19	0.07
G-5	P 11	0.18	0.17	0.07
G-5	P 12	0.31	0.26	0.16
G-5	P 13	0.44	0.35	0.09
G-5	P 14	0.38	0.33	0.21
G-5	P 15	0.26	0.24	0.07
G-5	P 16	0.52	0.39	0.11
G-5	P 17	0.28	0.20	0.05
G-5	P 18	0.23	0.23	0.05
G-5	P 19	0.30	0.19	0.12
G-5	P 20	0.27	0.16	0.08
G-5	P 21	0.26	0.21	0.18
G-5	P 22	0.25	0.20	0.11
G-5	P 23	0.29	0.27	0.11
G-5	P 24	0.33	0.18	0.04
G-6	P 1	0.34	0.30	0.14

６　グリッド出土遺物

（１）縄文土器

本遺跡からは、量は少ないものの縄文時代の早期から晩期までの各時期の土器群が出土しており、ここでは代表的なものを第26図～第28図に示し、大別して説明を加えることとする。

第Ⅰ群土器（1）

縄文時代早期の土器群を一括する。１は早期終末の条痕文系土器群である茅山下層式土器である。胴部に括れを持ち、不鮮明であるが上半部に縦位の沈線を施文する。胎土に繊維を含み、内外面に擦痕状の整形を施す。

他に、グリッドからは細片のみで、良好な土器群は出土していないが、第22号土壙からはさらに新しいと思われる条痕文系土器群終末期の土器が出土している。

第Ⅱ群土器（２～26）

前期の土器群を一括する。

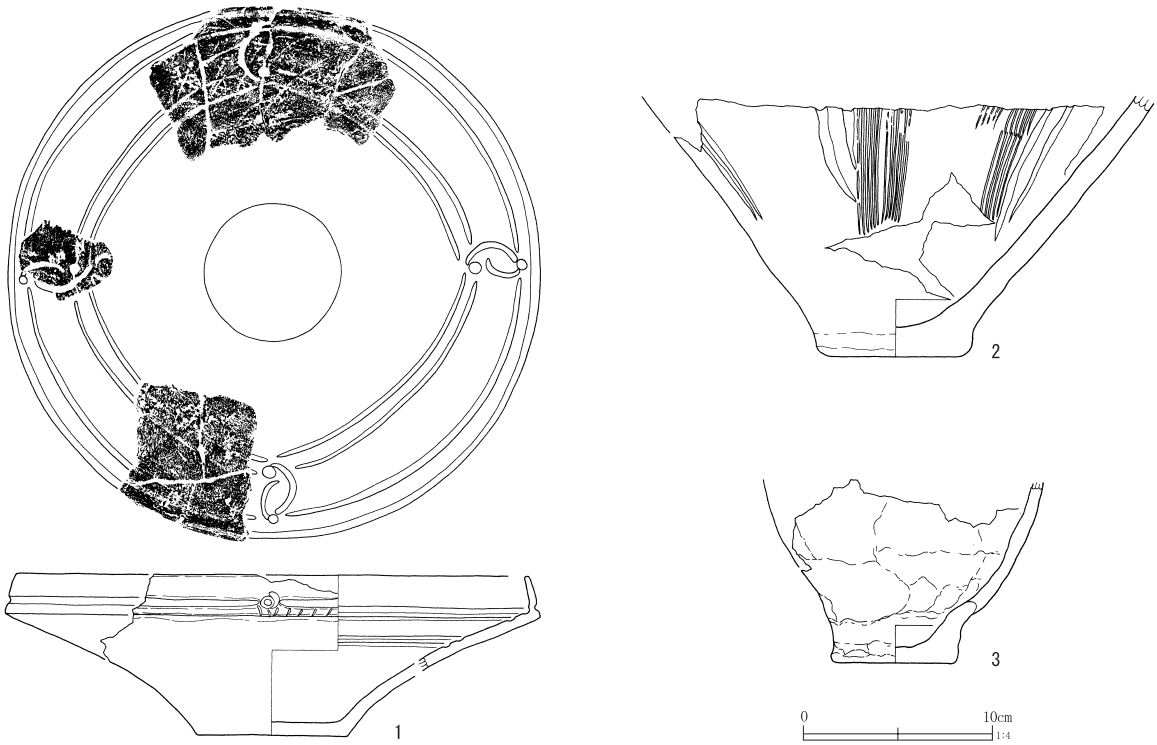
第１類（２～21）

前期初頭の尖底の羽状縄文土器である花積下層式土器を一括する。胎土の多量の繊維を含み、条痕状整形は施さず、擦痕状整形を施す土器群である。2は口縁部破片で、緩やかな波状を呈し、口縁に沿って多条の2段ＲＬの縄の側面圧痕を横位に施文する。口縁裏面には、粗い条痕整形を施す。

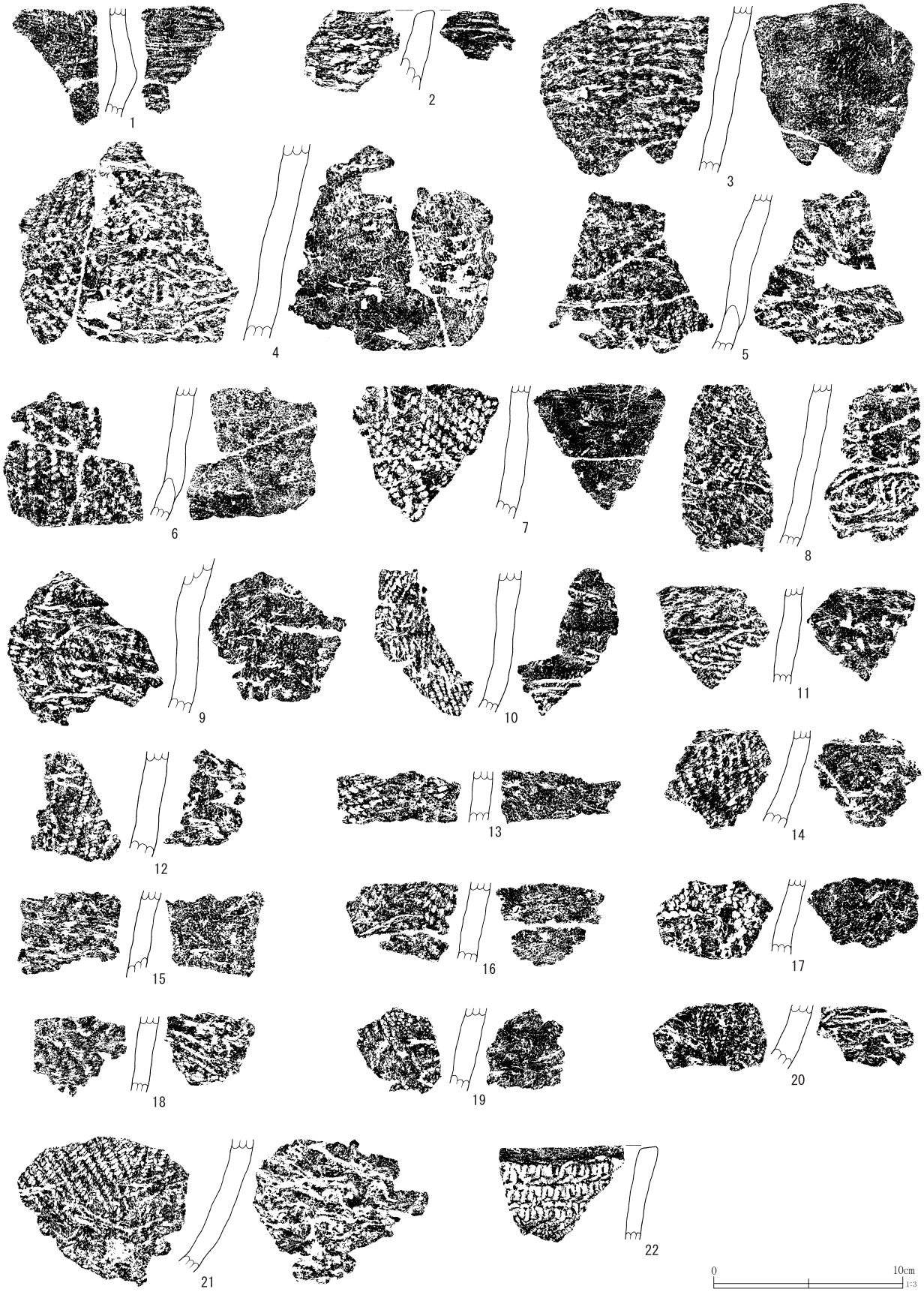
３～20は胴部破片で、側面圧痕と同様の多条２段ＲＬ縄文を横位や斜位に施文方向を変えて、縦位の菱形構成の鋭角羽状縄文を施文する土器群である。いずれも繊維を多く含み、裏面は擦痕状整形を施す。21は底部付近の破片である。

第２類（22）

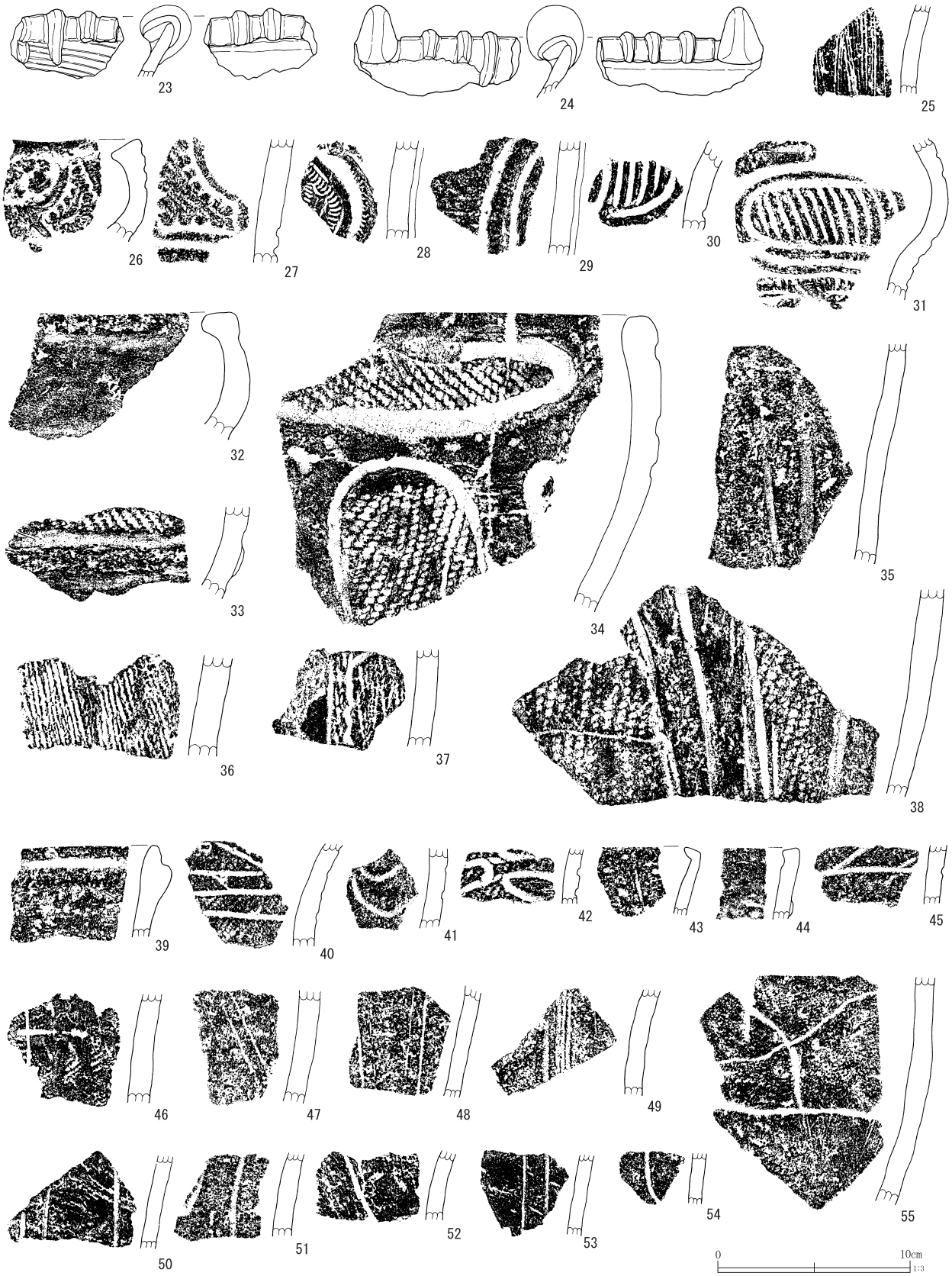
前期前半の繊維土器である関山式土器でを一括する。22は口縁部破片で、角頭状の口縁部が立つ器形を呈し、多条ＬＲのループ文を３段口縁部に施文するものである。ループ文帯下はＬＲの斜縄文帯となるが、ループ文帯と斜縄文帯が交互に施文されるも



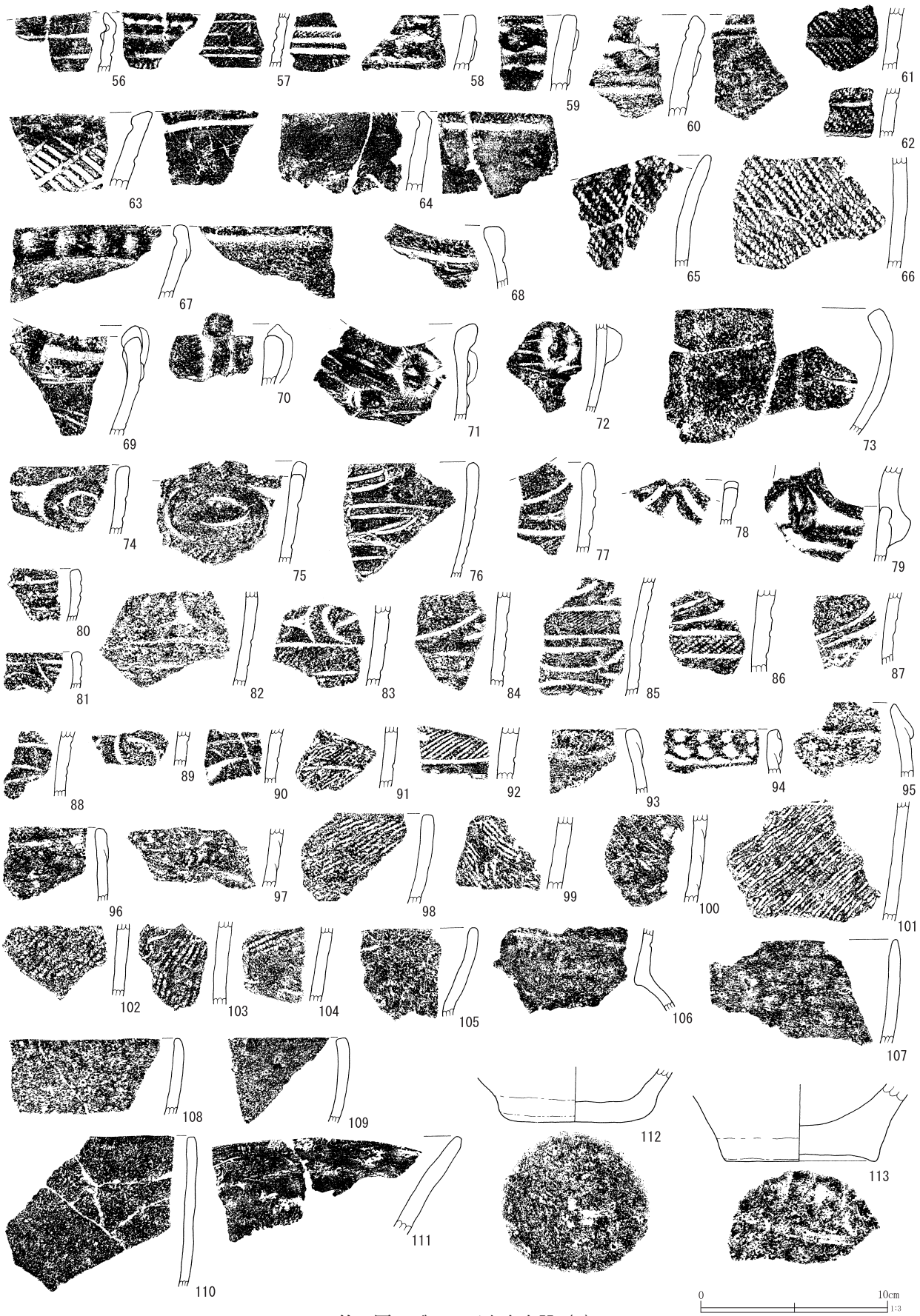
第25図　グリッド出土土器（1）



第26図　グリッド出土土器（2）



第27図　グリッド出土土器（3）



第28図　グリッド出土土器（4）

のと思われる。関山Ⅱに比定される。

第３類（23～25）

前期末葉の無繊維土器である、諸磯ｃ式土器を一括する。23、24は同一個体と思われ、口縁部が折り返し状を呈し、耳状貼付文を施文するものである。口唇部は折り返した上に、さらに粘土を巻きつけて複合口縁化しており、耳状貼付文の間には低平な貼付文を施文する。口縁部の地文には、横位の沈線を施文する。

25は条線文を縦位施文する胴部破片で、すでに地文化している状況が窺える。

以上、諸磯ｃ式のやや新しい様相が窺える土器群である。

第Ⅲ群土器（26～36）

中期の土器群を一括する。

第１類（26～32）

中期中葉の勝坂式土器を一括するが、その中でも終末段階の土器群が多い。26、27は隆帯脇の区画沈線に沿って、半截竹管の刺突文を蓮華文風に施文するものである。26は内湾の強い口縁部破片で、口唇部内端が突出し、口唇部が幅広の内削状を呈する。27は胴部破片で、器面が荒れているが、単節ＲＬ縄文を地文に施文する。

28は刻みを施す隆帯で区画し、隆帯脇に２本沈線を沿わせ、蓮華状文を施文する。29も刻みを施す隆帯で区画し、隆帯脇に沈線を沿わせ、地文に沈線文を施文するが、不明瞭である。

30、31は沈線区画内に集合沈線を充填施文するもので、31は口縁部付近の破片、30は頚部付近の破片である。

32は無文の内湾する口縁が立つ器形を呈し、口縁内端が突出する。モチーフを持つ円筒形の胴部が付くものと思われる。

第2類（33～36）

中期末葉の加曽利ＥⅢ式土器を一括する。33、34は口縁部文様帯を持つキャリパー系土器で、口縁部文様帯は低平な隆帯で区画される。34は口縁部に横長の楕円区画文を施し、胴部に逆Ｕ字状懸垂文と蕨手状沈線懸垂文を垂下する。楕円区画文と逆Ｕ字状懸垂文内には単節ＲＬ縄文を充填施文する。33の口縁部区画内にもＲＬを横位施文する。

35、38は磨消懸垂文を垂下する胴部破片で、38は３本沈線の磨消懸垂文である。いずれも地文に単節ＲＬ縄文を、粗く縦位施文する。36は撚糸Ｌを地文とし、37は撚糸地文上に蛇行沈線懸垂文を垂下する。36は他の破片より若干時期が古くなる可能性がある。

第Ⅳ群土器（39～73）

後期の土器群を一括する。

第１類（2、39～55）

後期前葉の堀之内式土器を一括する。39は無文の口縁部が肥厚して開き、口縁に沈線を廻らす。２は２沈線文が垂下し、地文に条線文を施文する深鉢形土器の底部破片で、底径8㎝、現存高13.2㎝を測る。40は単節ＬＲ地文上に3本沈線で文様を描くもので、41～43は単沈線で曲線的なモチーフを描く土器群である。堀之内Ⅰ式の新しい段階に比定される土器群である。

43、44口縁裏に沈線を廻らし、口縁部に横位隆帯の区画を施す深鉢形土器である。45は横位沈線区画に斜行する沈線を施し、46は地文縄文上に縦位沈線を垂下する。器面はナデられているが、地文にＬＲ縄文が微かに観察される。47～54は無地文上に、縦位方向の沈線や条線文を施文するもので、55は無文土器である。以上は堀之内Ⅱ式に比定される土器群である。

第２類（１、56～67）

後期中葉の加曽利Ｂ式土器を一括する。１は内文を持つ浅鉢で、二重の二本沈線を対弧線文で4単位に区切り、沈線間に単節ＲＬ縄文を施文する。対弧線は盲孔を基点にして施文する。

56～60は口縁部の開く深鉢形土器で、56は口縁部が外削状に内折し、外面に２本の横位沈線を施文する。内面には隆帯を廻らせて口縁部を区画し、口唇

直下に連続刺突文を廻らせている。さらに隆帯下に、何条かの沈線を施文するものと思われるが、1本のみ確認される。57は多条沈線の磨消縄文帯に、クランク沈線の区切り文を施文する。内面には3本の平行沈線を施文し、斜位の細沈線を密に施文する。

58～60は口縁部に押圧を施した低隆帯をめぐらすもので、60の内面には平行沈線が廻る。

61、62は横位の平行沈線と地文に単節ＲＬを施文する胴部破片である。

63は口縁部が大きく開く器形で、粗い斜格子目文を描き、口縁部内面に沈線を廻らす。64も無文の口縁部が開く器形と思われ、内面に沈線を廻らす。

67は口縁部がやや内折する低隆帯の段帯状を呈し、粗い押圧を施すものである。口縁部裏面には凹線状の沈線が廻る。

65、66は縄文のみ施文する土器群で、65は波状縁を呈し、波頂部に刻みを施す。65、66は地文に単節ＲＬを横位施文する。

以上、56～62、64～66は加曽利ＢⅠ式、67がＢⅡ式、63がＢⅢ式に比定されよう。

第3類（68～70）

後期終末の安行式土器を一括する。68は口縁部が内湾する瓢形の帯縄文系土器で、口縁部に単節ＲＬ縄文を施文する。69は緩い波状の深鉢形土器で、口縁部がやや屈曲し、縦長の貼付文を施す。口縁部の隆帯脇と胴部に斜行する平行沈線を施文する。70は口唇上から縦長の貼付文を施文し、器面が荒れているため不鮮明であるが、口縁部にはＲＬ縄文の痕跡が見られる。以上、安行Ⅱ式に比定されよう。

第Ⅴ群土器

晩期の土器群を一括する。

第１類（71～113）

晩期初頭の安行Ⅲａ式土器を一括する。71は波状口縁の帯縄文系土器で、波底部に縦位の、文様の交点に横長の瘤状の、それぞれ刻みを施す貼付文を施文する。また、区画の低隆帯には細かな刻みを施しているが、器面が荒れているため不鮮明である。72はやや瘤が背高であり、器形も内湾が強く、浅い沈線で弧線を合わせるモチーフを描いている。時期が不明瞭であるが、器壁が薄く、描出沈線文も浅くて弱いことから晩期に含めた。

74～92は玉抱き三叉文や入り組み三叉文を施文する土器群である。74～81は口縁部破片で、77～79は波状縁を呈する。74、75は平縁で、75は双頭の突起が付く。両者とも沈線の楕円文を挟む三叉文を施文するもので、75は突起下に二重の沈線による楕円文を小さな三叉文で囲む構成を採る。76は横位の沈線から弧状沈線文が派生しており、器面は良く磨かれる。類似の構成を持つものとして、72、81、85があげられる。

77～79の波状口縁では、波頂部下に三叉文や玉抱き三叉文を施文する。

83、88、89は三叉文や対弧状の弧線文を施文するもので、83、86、91、92のように胴部破片は横位の平行沈線と組み合うものが多い。平行沈線間は単節ＬＲ縄文を施文する。

以上の土器群は、細砂粒を多く含み、赤褐色から暗赤褐色を呈するものが多く、器面の荒れが著しい。

93～95は紐線文系の土器群で、93、96はやや肥厚する口縁部を呈し、94は二連の押圧状刺突文を施す。95は折り返し状の口縁部を持ち、いずれも無文である。97は輪積みの痕跡から、この種の胴部破片であると思われる。いずれも砂粒を多く含み、器面が荒れている。

99～104は縄文が施文される破片で、原体はいずれも細かな単節ＬＲである。

106は壷の頚部と思われるが、沈線が廻り、九曲が強い器形を呈する。

73、107～111は無文土器の口縁部で、73は内湾が強く、107～110はやや口縁部が内湾する器形で、111は浅鉢状に大きく開く器形である。

3、112、113は底部破片で、所属時期は不明であるが、3は指頭整形痕が残り、113は粗製の紐線文土器の底部と思われる。

（2）石器

今回の調査では、剥片なども合わせると多数の石器が出土している。ここではグリッド出土の代表的な石器を一括し、それぞれ器種ごとに分類した。計測値や石質については計測表にまとめてある。

棒状石器

1は乳白色を呈する均質な滑石を素材とする。長さ1.6 cm、幅0.5 cm、厚さ0.4 cmと非常に小形のものである。上半部は欠損する。多面体状で細長く、長軸方向に多数の面取り跡が残されており、それぞれが平坦である。下端も先を尖らせるような円錐状の面取りが施されている。本例のような石器は出土例が少なく、どのような性格を有する石器か今後注目されよう。

石錘

2、4はやや平たく、丸い礫の両端に抉り調整を入れている。3、5はやや細長く扁平な礫の両端に抉り調整をいれている。抉れた縁辺部にはわずかではあるが磨耗した痕跡がみられる。いずれも砂岩製。

磨製石斧

6、7、20は磨製石斧あるいはその未成品と考えられるものである。6は横断面が方形状を呈するもので、いわゆる定角式の石斧である。基部と刃部に剥離痕が残こるがこれは、使用時の欠損の可能性が高い。表面と側縁部が接する部分にわずかに敲打痕が残る他は全体的に丁寧に磨きあげられている。砂岩製。7は磨製石斧の未成品と考えられるが、その他の可能性としては小形の石剣の未成品も考えられよう。両側縁、下端部には形状を整える調整剥離が顕著に行われている。表面、裏面ともに研磨されており平坦である。基部側にも基部を丸く平坦にする面取りがされる。器面には、研磨痕の間に、敲打痕を残す部分がある。緑泥片岩製。20は表面上半部にやや大きな剥離が施される。側縁部はわずかな調整剥離が施される。表面はわずかな敲打痕であるが、裏面には顕著な敲打痕が残されており、あばた状である。形状は整わず製作途上のものであろう。

打製石斧

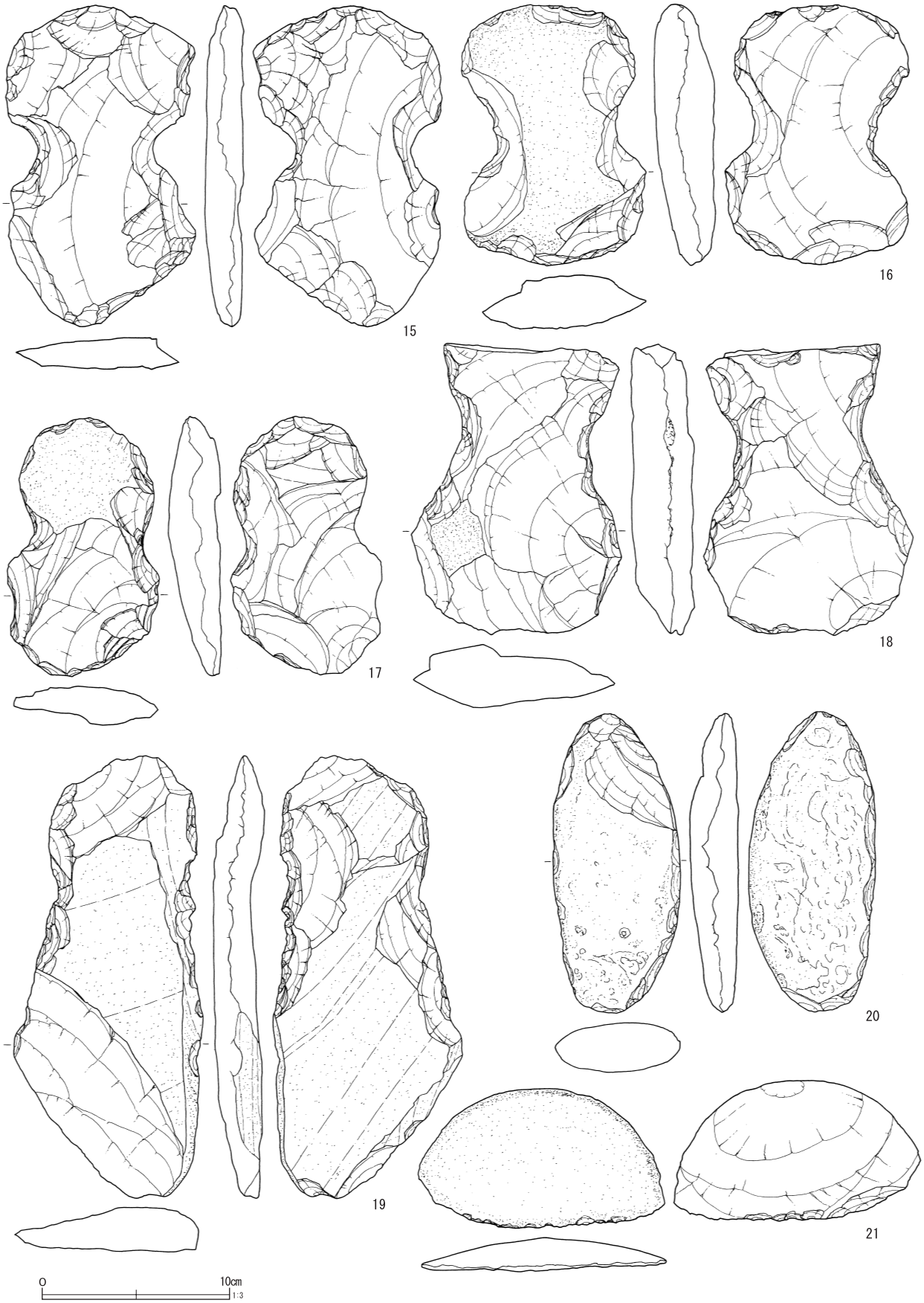
8、9は刃部に最大幅があるものでいわゆる撥形を呈するものである。8は扁平な礫を横割りにした剥片を素材とし、剥片の形状を生かしながら、両側縁にわずかな調整を行い形状を整えている。ホルンフェルス製。9も横長の剥片を素材としている。裏面から表面側にやや大きな剥離がなされ、その後、左側縁表面側から裏面側に向かって細かい調整剥離が施され、形状が整えられる。砂岩製。8、9共に未加工の自然面を刃部として生かしている。刃部表面側は顕著に磨耗している。

10、11、13は側縁がほぼ平行するタイプである。10は縦長の剥片を素材としており、側縁部、刃部の形状を整えるためのやや細かい調整が施される。砂岩製。11はおそらく横長剥片を素材とする。まず、両面から大振りな剥離が施され大まかな形状が整えられた後、片面側を中心に細かい剥離により形状が整えられる。刃部には大きな剥離面が残され鋭いエッジとなっている。折損部の可能性もあるが細かい刃こぼれ状の剥離痕が残り、刃部として利用していた可能性もある。砂岩製。13は板状の緑泥片岩を素材とし、両側縁に形状を整える細かい調整加工がなされる。下端は欠損している。

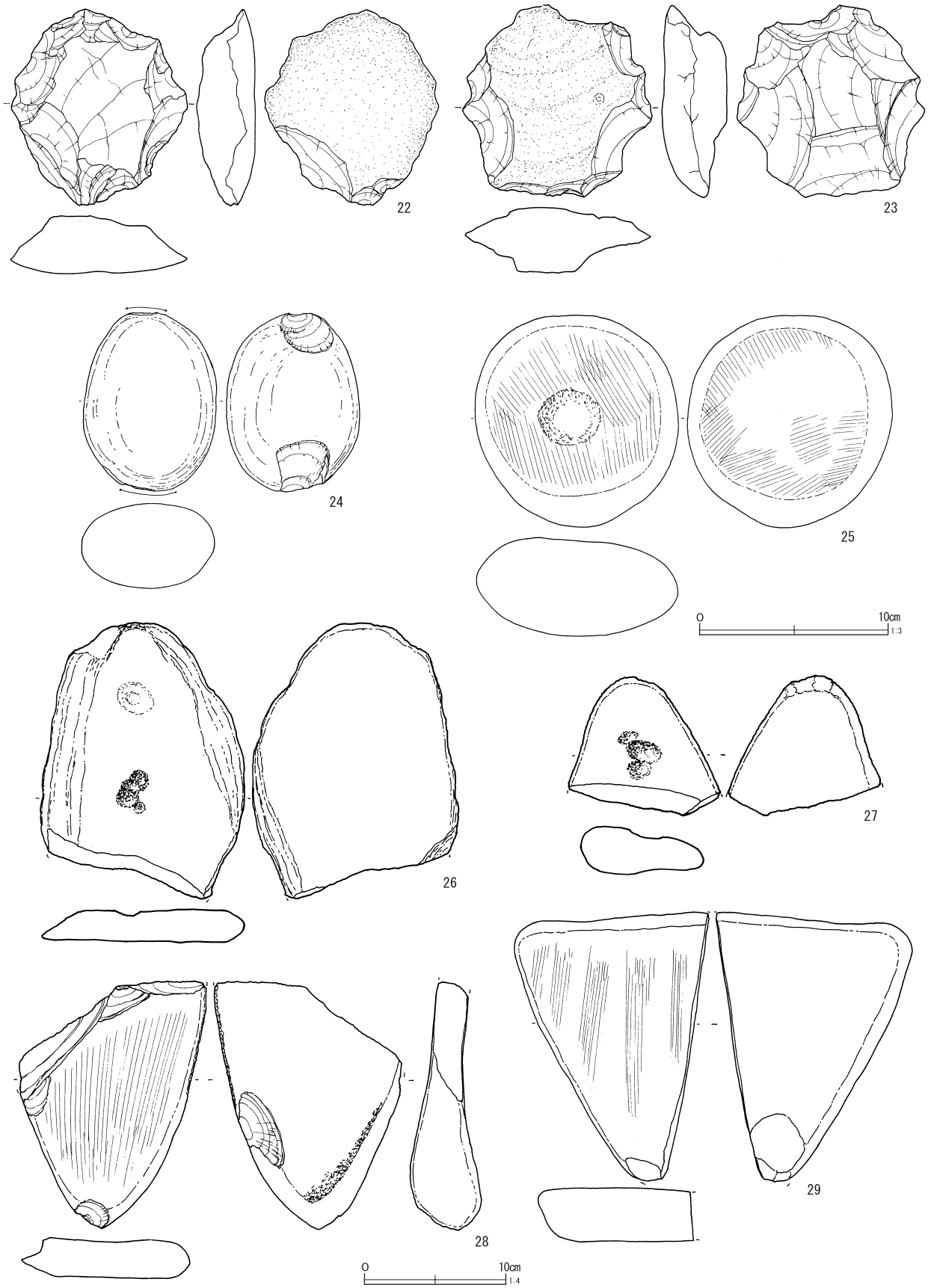
14は自然礫の一端に大振りな調整加工を施し刃部とする礫器である可能性があるが、その形状から打製石斧の未成品の可能性が高い。風化の激しい白色のホルンフェルスを素材としているため剥離面が不明瞭である。

12、15、16、17、18、19は両側縁部に抉りが入るものでいわゆる分銅形を呈するものである。12は板状の剥片を素材とし抉り部分に大きな調整が入る。側縁部、下端部には細かい調整が施される。上端部には細かい調整は施されず、鋭いエッジが形成されている。ホルンフェルス製。15は横長の板状の剥片を素材としていると思われる。抉りは概して深い。上端は弧刃、下端は三角を呈し尖がる刃部となって

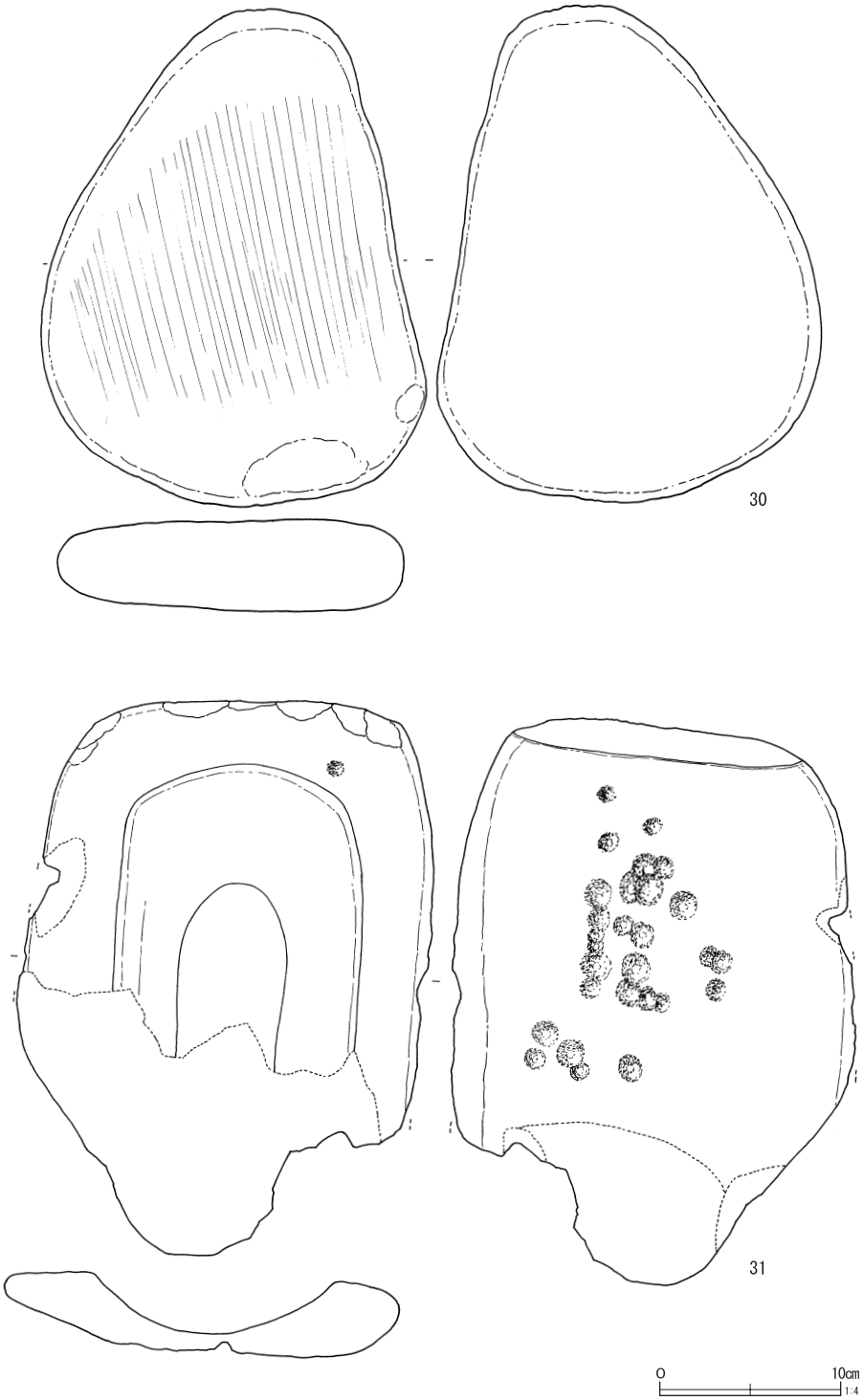
第29図　グリッド出土石器（1）



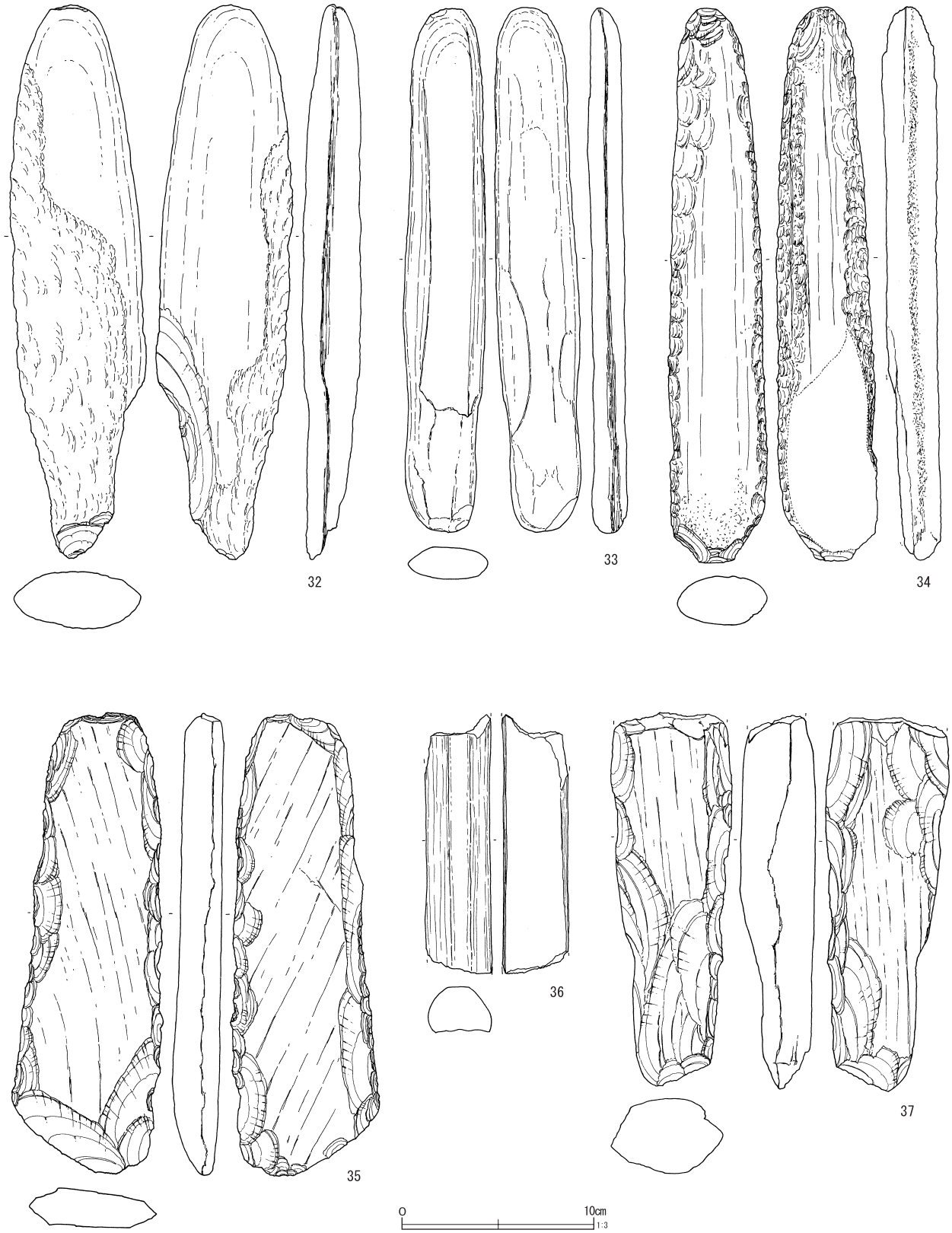
第30図　グリッド出土石器（2）



第31図　グリッド出土石器（3）



第32図　グリッド出土石器（4）



第33図　グリッド出土石器（5）

いる。砂岩製。16は表面に礫面を多く残す。横長の剥片を素材としている。上端、下端共にきれいな弧刃をなす。抉りは概して深い。砂岩製。17は表面上半部に礫面を残している。この礫面の有するゆるやかなカーブを利用して上端の刃部は形成されている。この礫面は使用により顕著に磨耗している。砂岩製。18は上端部が折損している。表面の一部に礫面を残す。抉り部分には顕著な磨耗が見られる。砂岩製。19は板状を呈する緑泥片岩を素材とする。自然面を多く残している。加工は板状礫の縁辺部を中心として行われ、素材形状を大きく変えていない。

掻器

21は扁平な自然礫を半割した素材で片側に礫面を残す。打製石斧あるいは磨製石斧の調整剥片である可能性がある。下端部には表裏共に刃こぼれ状の細かい剥離痕が連続する。意図的な二次加工であるかは不明である。使用による刃こぼれである可能性もある。ホルンフェルス製。

礫器

22、23は片面側に礫面を残し、主に礫面側から全周するように調整剥離を行い、最終的に亀甲状を呈するものである。これは石核である可能性も考えられよう。これと同様な石器は住居等の遺構でも出土している。22は砂岩、23はホルンフェルス製である。

敲石

24はやや扁平だが厚みのある円礫を素材とする。長軸の両端に敲打によると思われる剥離痕が残る。この剥離痕縁辺部に顕著な潰れ痕が残り、多数の使用が認められる。白っぽいカコウ岩質の閃緑岩。

磨石

25はやや扁平な、円形を呈する礫を素材とする。礫の表裏に使用面があり、面取りされたかのように平坦である。表面側中央部には極めて浅い窪みが見られるが、凹石的使用の結果残された可能性は低い。表面の剥落と考えた方がよいと思われる。安山岩製。

凹石

26、27は凹石である。26は緑泥片岩製の板状扁平礫を素材とする。上端部の一部と下半部を欠損する。表面上半部には極めて浅い凹みが一箇所、中央部にはやや深い凹みが4箇所連結する。27も下半部を欠損する。凹みはやや深く中央部に3箇所連続する。安山岩製。

石皿

28～31は石皿である。28は下端が尖る扁平な礫を素材としている。上半部を欠損している。表面側は使用により平坦である。外縁部から中央部に向かってなだらかに窪んでいる。右側面部裏面側、左側縁部裏面側の礫の稜線部分には細かい敲打の痕跡が残っており、石皿の形状を整えるためのものと考えられる。緑泥片岩製。29は残存形態が、平面的に三角形を呈する。右半分を欠いている。使用面は極めて平坦であり、皿状の窪みは存在しない。自然礫の形状を生かしている。砂岩製。30も29と同様で自然礫の形状を生かし整形は行われていない。磨り跡は器体縁辺部よりも中央側に残る。使用面は平坦であり、それほど継続した使用は行われていないと考えられる。安山岩製。31はいわゆる有縁石皿である。下半部は欠損している。平面形は長方形を呈す。厚さは極めて薄く使いこまれている。凹石に転用されているようであり、表面に1箇所、裏面に27箇所の凹みがのこる。緑泥片岩製。

石剣

石剣はすべて緑泥片岩製である。32は下半部に抉りを入れて柄を作出している。左側縁部を中心として敲打痕が器体を覆うように残っている。製作途中の未成品であろう。33は節理のよく発達した緑泥片岩を素材としていて、器面には凹凸がある。研磨されているが、素材形状をそれほど変えていないと思われる。34は両側縁、先端部、基部に両面加工を施して全体の形状を整えている。表面基部周辺、両側縁部には敲打痕が残っている。最終的な研磨をする以前の段階であろう。35は直接打撃により大まかな形状を整える段階のものであろう。敲打痕、研磨痕等は見当たらない。37は他の石剣が扁平なのに対し

第７表　第１号住居跡出土石器観察表

番号	器種	(cm)			(g)	材質
		長さ	幅	厚さ	重さ	
７－12	掻器	4.8	4.6	0.9	30.4	緑色岩
13	石錘	6.2	3.6	1.1	39.0	砂岩
14	磨製石斧	16.7	7.4	3.3	694.8	緑色岩
15	磨製石斧未製品	17.5	11.8	6.6	1886.9	緑色岩
16	磨石	12.0	8.0	6.1	955.5	安山岩

第８表　第２号住居跡出土石器観察表

番号	器種	(cm)			(g)	材質
		長さ	幅	厚さ	重さ	
11－32	石鏃	1.5	1.1	0.2	0.2	チャート
33	石錐	2.2	1.0	0.9	1.7	瑪瑙
34	剥片	4.7	3.8	1.4	20.4	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ
35	剥片	2.7	1.9	0.8	3.7	チャート
36	剥片	3.0	1.7	1.6	7.3	チャート
37	剥片	3.3	2.3	1.2	8.5	赤玉石
38	剥片	2.2	1.9	0.7	1.6	黒曜石
39	小玉	0.8	0.8	0.3	0.6	翡翠
40	石錘	4.6	6.5	1.5	54.1	砂岩
41	打製石斧	12.4	6.9	3.0	258.4	砂岩
42	打製石斧	15.3	8.1	3.7	518.4	砂岩
43	磨製石斧	14.1	7.5	5.8	843.5	緑色岩
44	礫器	12.3	10.7	4.7	733.0	砂岩
45	石剣	18.7	5.2	3.2	495.6	緑泥片岩
46	磨石	10.8	9.8	4.5	658.2	安山岩
47	石核	29.0	27.2	6.2	7593.0	砂岩

第９表　土壙出土石器観察表

番号	器種	(cm)			(g)	材質
		長さ	幅	厚さ	重さ	
14－7	石斧	13.1	6.7	2.9	233.1	砂岩
15－9	礫器	9.4	6.0	3.2	195.4	安山岩
10	掻器	5.0	9.5	1.3	53.9	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ
11	掻器	8.3	11.6	2.7	282.1	黒色頁岩
12	石核	4.1	8.0	8.0	208.8	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ

第10表　ピット跡出土石器観察表

番号	器種	(cm)			(g)	材質
		長さ	幅	厚さ	重さ	
24－6	掻器	8.7	8.9	2.0	130.3	黒色頁岩
7	掻器	7.9	5.3	2.9	80.2	頁岩
8	剥片	7.8	4.1	2.2	64.6	チャート
9	礫器	12.0	9.1	3.6	304.4	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ
10	磨石	12.4	6.8	3.7	462.3	閃緑岩

やや断面が丸く棒状である。上半部を欠損している。大きな剥離により形状を整えている。断面形態からは石剣というよりは石棒の未成品の可能性もあろう。

石棒

第11表　グリッド出土石器観察表

番号	器種	(cm)			(g)	材質
		長さ	幅	厚さ	重さ	
29－1	棒状石器	1.6	0.5	0.4	0.5	滑石
2	石錘	3.9	4.9	1.6	41.4	砂岩
3	石錘	3.6	7.5	1.9	68.7	砂岩
4	石錘	4.6	4.8	2.4	69.2	砂岩
5	石錘	4.3	6.4	1.7	65.0	砂岩
6	磨製石斧	15.3	4.9	3.2	349.6	砂岩
7	磨製石斧	15.3	3.3	1.8	149.0	緑泥片岩
8	打製石斧	10.2	5.6	1.4	67.3	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ
9	打製石斧	11.1	4.8	1.8	72.1	砂岩
10	打製石斧	13.7	5.5	1.8	153.9	砂岩
11	打製石斧	11.5	6.1	2.1	180.7	砂岩
12	打製石斧	7.4	3.9	0.9	31.8	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ
13	打製石斧	16.0	5.7	1.8	196.7	緑泥片岩
14	打製石斧	18.1	9.0	3.9	760.5	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ
30－15	打製石斧	17.0	10.1	2.1	419.5	砂岩
16	打製石斧	13.8	9.8	3.2	498.4	砂岩
17	打製石斧	13.8	8.1	2.8	292.9	砂岩
18	打製石斧	15.5	11.2	3.4	615.4	砂岩
19	打製石斧	23.5	10.1	2.7	771.2	砂岩
20	磨製石斧	16.0	6.8	2.6	405.0	緑色岩
21	掻器	7.4	13.1	1.8	172.2	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ
31－22	礫器	10.4	9.3	3.1	280.4	砂岩
23	礫器	10.1	10.0	3.5	340.8	ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ
24	敲石	9.4	7.1	4.7	409.3	カコウ岩
25	磨石	11.2	10.8	5.3	880.7	安山岩
26	凹石	19.7	14.5	2.6	1110.0	緑泥片岩
27	凹石	9.8	10.8	3.8	317.3	安山岩
28	石皿	17.5	13.2	5.0	1158.0	緑泥片岩
29	石皿	19.0	13.8	4.1	1200.0	砂岩
32－30	石皿	27.5	21.3	4.9	4120.0	安山岩
31	石皿	30.8	22.2	1.2	3850.0	緑泥片岩
33－32	石剣	28.8	7.1	3.2	842.0	緑泥片岩
33	石剣	27.3	4.3	1.9	376.8	緑泥片岩
34	石剣	28.7	5.1	3.0	612.6	緑泥片岩
35	石剣	24.1	7.8	2.5	677.2	緑泥片岩
36	石棒	13.5	3.5	2.6	194.4	緑泥片岩
37	石剣	19.4	6.4	3.9	620.0	緑泥片岩

36は石棒である。上下両端、そして長軸方向で欠損している。断面形は円形と推定され、研磨により形状が整えられている。緑泥片岩製。

Ⅴ　調査の成果と提起する諸問題

1　中期中葉の土器群について

中野遺跡からは、中期中葉の土壙１基が検出されている。この第１号土壙から、ほぼ完形の土器が２個体出土しており、他遺跡の類似例との比較検討の上、それぞれの土器の由来や位置付けを行って置きたいと思う。

第１号土壙（第14図）出土土器１、２は、内湾する口縁部が大きく外反し、円筒形の胴部が付く器形を呈し、文様帯の構成は異なるが、ほぼ類似の器形と看做すことができる。１は口縁部文様帯と頚部文様帯、２は無文の口縁部と胴部文様帯を持つという構成である。２は胴部に勝坂式終末期の文様構成を配置することから型式的帰属が明瞭であるが、１については多くの要素を持ち、それぞれの要素の解題を行わなければならない。

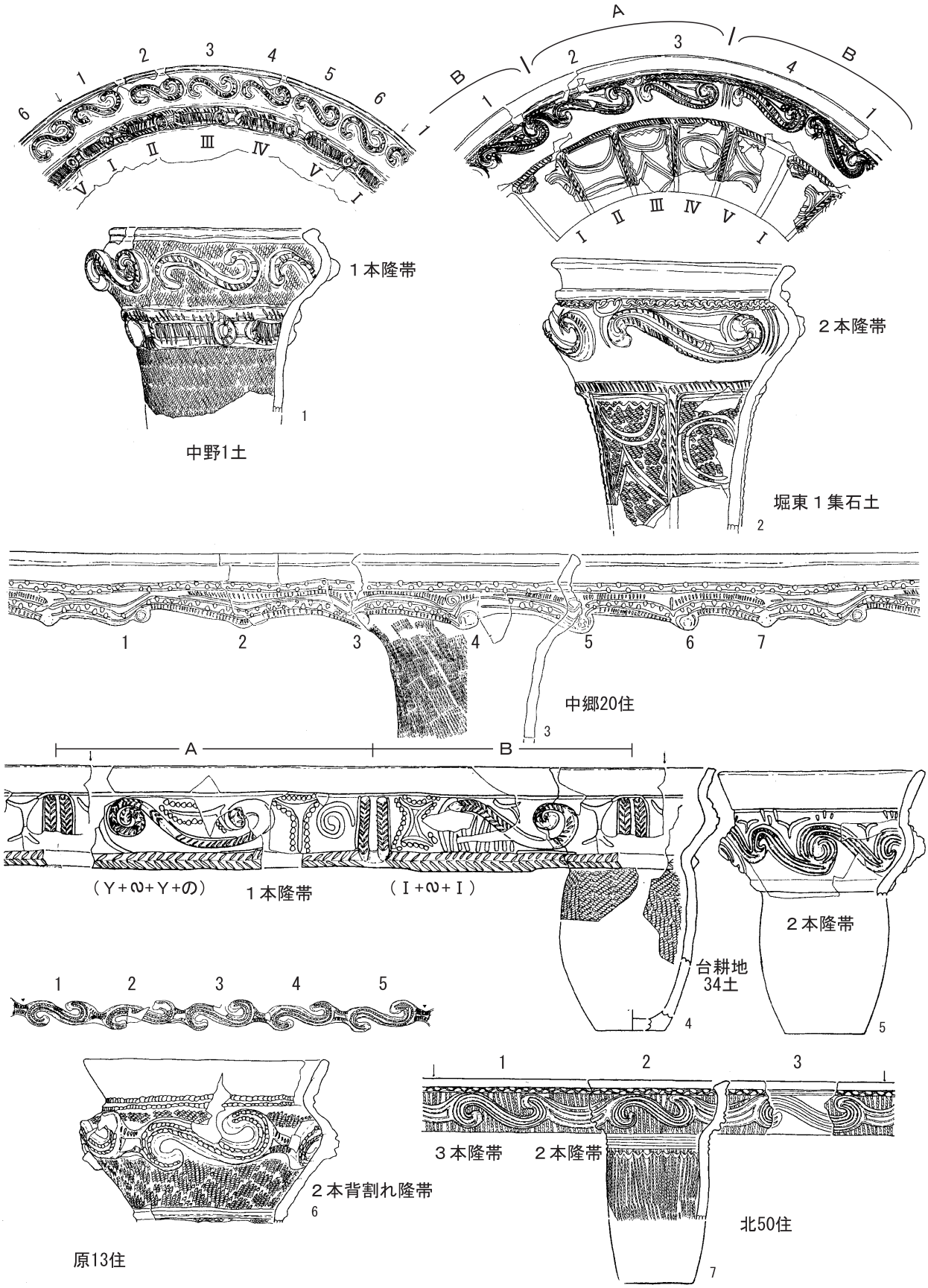
第34図には、中野遺跡第1号土壙1と類似の文様や文様帯構成、器形を呈する県内の資料を集めてみた。それぞれの土器群の比較の上、１との関係性を紐解いてみたい。

第34図１は中野遺跡第１号土壙出土土器であるが、口縁部に横Ｓ字状隆帯文を施文し、頚部に渦巻文を伴う楕円区画文を隆帯で施文する、比較的単純なモチーフ構成を呈する。口縁部の横Ｓ字状隆帯文はほぼ同じ形状で１～６の６単位に構成される。しかし、頚部の楕円区画文はⅠ～Ⅴの５単位で構成されている。口縁部と頚部の構成が異なり、口縁部に規制されずに頚部文様帯が展開していることが理解される。また、口縁部を含み、器面全面に単節ＲＬを横位施文することも特徴的である。

２は深谷市堀東遺跡（金子2000）第1号集石土壙出土で、器形等1とよく類似する。２は無文の口縁部がやや高く迫り出して外反し、内湾する口縁部に横Ｓ字隆帯文を１～４の４単位で施文する。胴部は隆帯の縦位区画の単位文を、Ⅰ～Ⅴの５単で施文している。細かく文様展開を観察すると、口縁部文様帯は背割れの隆帯で横Ｓ字状文を施文するが、単位文間の区切りや、区画内充填文に相違が見られる。まず、４単位のＳ字文間は１と２の間が背割れ隆帯の連結文、２と３の間がＹ字状の三叉文、３と４の間が縦位の３本沈線、４と１の間が縦位の1本沈線で仕切られている。また、充填文は１が三叉文と2個の円形竹管文、２が三叉文、３が三叉文、４が三叉文と１個の円形竹管文を施文する。２、３が同一の構成で、４と１が同様な構成となるが、円形竹管の個数や位置を変えている。Ｓ字文はそれぞれ区切られ、独立しているが、同じ様なモチーフを組み合わせると、（２＋３）＋（４＋１）となり、Ａ（ａ＋ａ）+Ａ´(ｂ＋ｂ´)の構成になる。さらに、連結要素を重視すると、連結される１と２、分離される３と４の二項の対立が考えられる。しかし、４と１は連結線こそないがＳ字文が接しており、連結の意識が看取される。このように、４単位であるが故に明瞭な対称性の崩しが行われていないが、円環的に少しずつ変化させながら対称性を避けている様子が窺われる。４単位構成の整然とした横Ｓ字隆帯文の配置は大木8ａ式的に特徴的と言えるが、その中に対称性を嫌う勝坂式の原理を織り込ませていると判断される。

また、胴部は５単位に区画しており、ⅠとⅣに円形のモチーフを描き、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴに上下に分割するモチーフを描いている。ⅠとⅣの円形モチーフを中心として文様配置を見ると、（Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ）＋（Ⅳ＋Ⅴ）の勝坂式的な構成が把握され、二項を対立させながらも、単位とそれぞれのモチーフで対称性を崩していることが理解される。

３は嵐山町中郷遺跡（中島1982）第２号住居跡の炉体土器で、口縁部が球形と言うより「く」状の屈曲を持ち、その部分に弧状に連結する小さな渦巻文を施文するものである。渦巻文は突起状を呈し、渦



第34図　中期中葉土器群の文様構造

を巻かない箇所もある。渦巻文は7単位に施文しており、１の渦巻き部分がやや右にずれて円形の単位文化し、3〜6 が渦を巻き、2、7 が突起状を呈している。渦巻文上部の口縁部との余白部分には、1 が無文、4、5 が沈線渦巻文、2、3、6、7 が短沈線を施文する。明らかに１と４、５が裏と表の関係にあたり、１を正面とした場合に、右回りと左回りの３番目に渦巻文を施文する４と５が存在する。一見して単純な渦巻文の繰り返しの様であるが、単位数の７や正面と裏面の関係に対称性を崩す工夫が施されている。この土器は勝坂式終末平行の中峠式系の土器と考えられているが、地文に撚糸文を施文する点や、単位数、対称性の崩しに勝坂的要素を強く残しているものと判断される。

4、5 は花園町台耕地遺跡（鈴木1983）第24号土壙出土土器である。5 は無文の口縁部がやや長く外反し、球形状口縁部に横Ｓ字状の隆帯渦巻文を連結するモチーフを描いている。破片のため、全体構成は不明である。渦巻文の余白には、三叉文を施文する。この土器と伴出した4は、器形が類似し、球形状の口縁部に勝坂式的なモチーフを描いている。モチーフを分析すると、まず、２本対の縦位隆帯で口縁部をＡ区画とＢ区画の２単位に区画し、区画内にそれぞれが対応するように沈線と隆帯のモチーフを配置する。Ａ区画には（沈線Ｙ字状三叉文＋横Ｓ字状隆帯文＋刺突文を伴う沈線Ｙ字状三叉文＋沈線渦巻文）を施文し、Ｂ区画には（刺突文を伴う沈線Ｉ字状三叉文＋横Ｓ字状隆帯文＋沈線Ｉ字状三叉文）を施文する。Ａ区とＢ区は非常に構成が類似するが、三叉文のＹとＩを置き換えており、Ａ区にはさらに沈線渦巻文を追加施文して、対称性の崩しが強調されている。また、縦位区画隆帯を境に見ると、対称位置の沈線三叉文ＹとＩが対峙し、刺突文付き三叉文のＹとＩが対峙するように仕組まれており、さらに渦巻文が加わって対称性が崩されている。胴部に縄文を施文することは、２と共通する。

この２個体を比較すると、４の横Ｓ字状隆帯文は刻みを施すが1本隆帯で施文されるのに対し、5の連結横Ｓ字状渦巻文は2本隆帯で表現されている。4の1本隆帯は1のＳ字状隆帯文と共通し、5の2本隆帯は2の背割れの横Ｓ字状隆帯文と共通する要素と捉えられ、それぞれ同時期における表現方法のバリエーションと認識される。

6は伊奈町原遺跡第13号住居跡（村田1997）出土土器である。器形は5に類似し、口縁部に横Ｓ字状隆帯文を1〜5の5単位に配置し、それぞれを2本隆帯で連結する。隆帯上には、2列の結節沈線が背割れ隆帯状に施文されている。大木8ａ式的な色彩が強いが、単位数を5単位にする点で、勝坂式の対称性を崩す行為が看取される。

また、7は原遺跡と隣接する伊奈町北遺跡（金子1987）第50号住居跡出土土器である。球形状の口縁部に短く外反する口唇部を持つ点は1と類似し、撚糸文地文は3と類似する。口縁には横Ｓ字状隆帯文を1〜3の3単位に配置し、それぞれを連結しており台耕地遺跡5に近似する。そして、Ｓ字状隆帯文は2本の背割状沈線による3本隆帯で施文されるが、それぞれは2本隆帯で連結されている。2本隆帯の連結は5、6と同様である。連結部が長いため、この部分をＳ字状隆帯文に見立てることも可能で、5単位の連結文と考えることもできよう。

7は組成から加曽利ＥⅠ式初頭段階に位置付けられるもので、6より若干新しく位置付けられるものである。しかし、6の背割状2本結節沈線が沈線文化して7の3本隆帯となり、5単位の横Ｓ字状隆帯文が3単位に、場合によっては5単位の変化形態とも考えられるが、変遷することに非常に濃密な系統的関係性が看取されるのである。また、3もしくは5単位構成が明らかに勝坂式の構成原理であることはまま上遺跡の報告書で検討した通りであるが（金子2001）、7は大木8ａ式及び東部関東的な系統要素を持ちながらも勝坂式の構成原理が継承されており、多系統要素が糾合されて加曽利ＥⅠ式初頭期の土器群が成立してきたことを具現化する好例と言えよう。

以上のように、勝坂式終末期における県内北西部と南東部の、主に大木8ａ式と勝坂式の混交する様相を比較してきたが、１本隆帯、２本隆帯、３本隆帯描出、単位文連結要素、連結手法、単位数などに地域的な様相が窺われると共に、勝坂式の構成原理が地域的な変容を受けながらも顕在化されていることが観察された。

中野遺跡の１は口縁部が６単位構成であるが、これは大きくは３単位の倍数と捉えることができ、勝坂式の原理が作用していると考えられる。また、口縁部文様帯と勝坂式的な頚部文様帯を別構成とすることも、他に同様の事例があることから決して偶然の出来事ではなく、大木式的な要素及び構成に対してさえも、対称性を崩すという立場から勝坂式の主要な構成原理が働いた結果であると判断されるのである。

従って、中野遺跡の１は、７以外の他の土器群とほぼ同時期の加曽利ＥⅠ式成立直前期に位置付けられるもので、大木8ａ式の大きな進出期における勝坂式の構成原理の変容を物語るものであり、来るべき加曽利ＥⅠ式成立に向かっての準備が行われている土器として注目、評価される資料なのである。

２　晩期の住居跡と出土遺物について

中野遺跡からは、県内でも珍しい晩期初頭の住居跡が２軒検出された。この秩父地方においても晩期の住居跡検出例は非常に少なく、貴重な資料を追加したことになる。ここでは中野遺跡の住居跡の形態と、該期の遺跡が集中する大宮台地や他県の事例との比較の上、中野遺跡検出の住居跡及び出土土器のの位相を検討してみたいと思う。なお、参考資料を第35図、第36図に示した。住居跡の大きさは120分の1、土器は８分の１に統一してある。

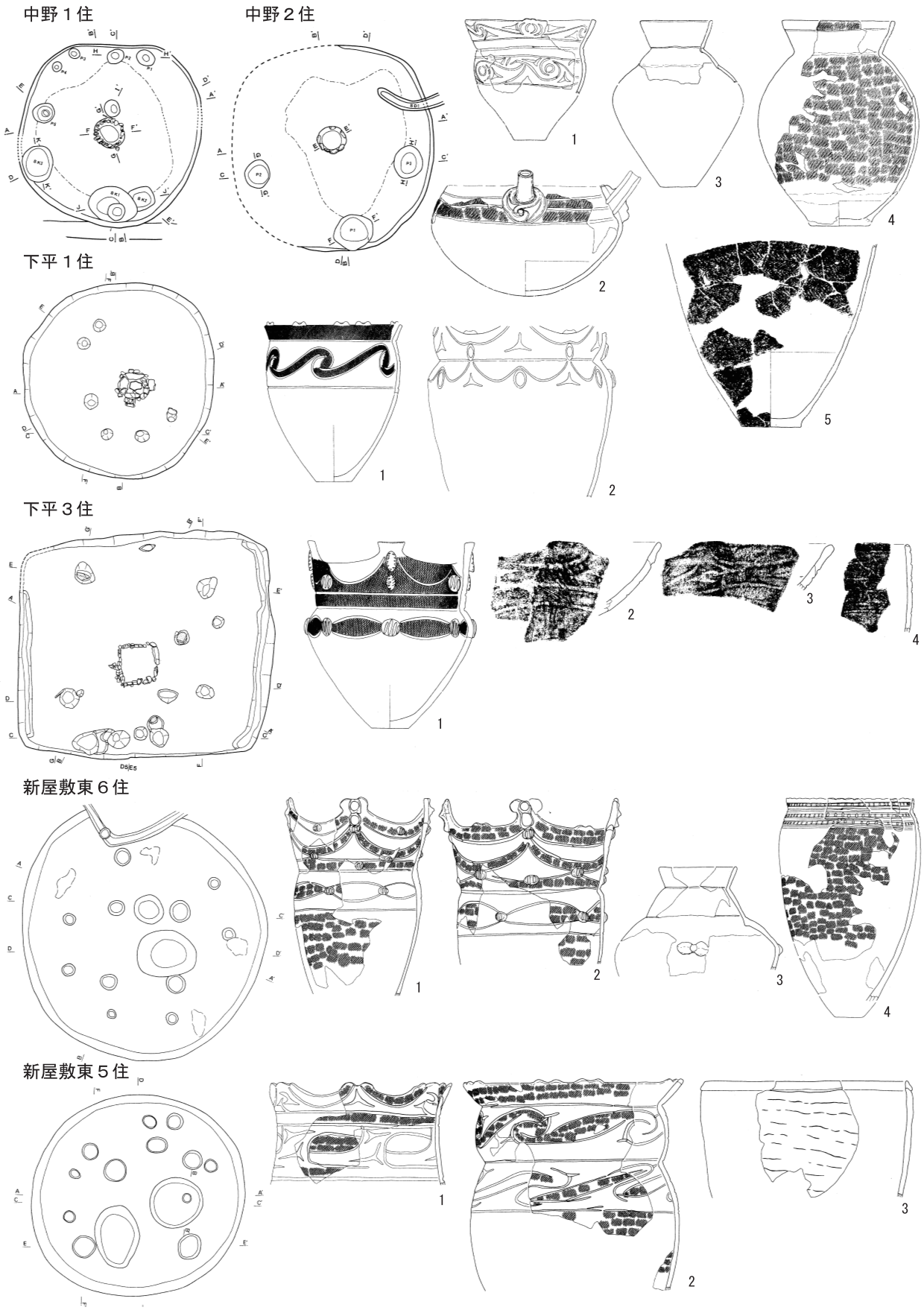
まず、中野遺跡の晩期初頭住居跡の特徴は、径４～５ｍ前後の円形に近い隅丸方形か楕円形を呈し、円礫の石囲炉で、明瞭な壁溝や柱穴を持たない点にある。柱穴は大きな土壙状のものや、小さく浅いピットが想定されるが明瞭ではない。出土土器から晩期初頭の安行Ⅲａ式終末期に比定されるの時期で、円形を基調とした住居形態であることが最大の特徴として捉えられよう。

秩父地方で晩期の住居跡は、合角ダム水没地域関連の調査による下平遺跡（橋本1995）で検出されている。下平遺跡第1号住（第35図）は中野遺跡第2号住居跡とほぼ同様な規模の、径4ｍ強の楕円形の住居跡で、板状角礫を楕円形に配列した石囲炉を持つものである。やはり、柱穴は明瞭ではない。時期は安行Ⅲｂ式～Ⅲｃ式にかけての遺物が出土しており、中野遺跡より若干新しい時期の所産である。

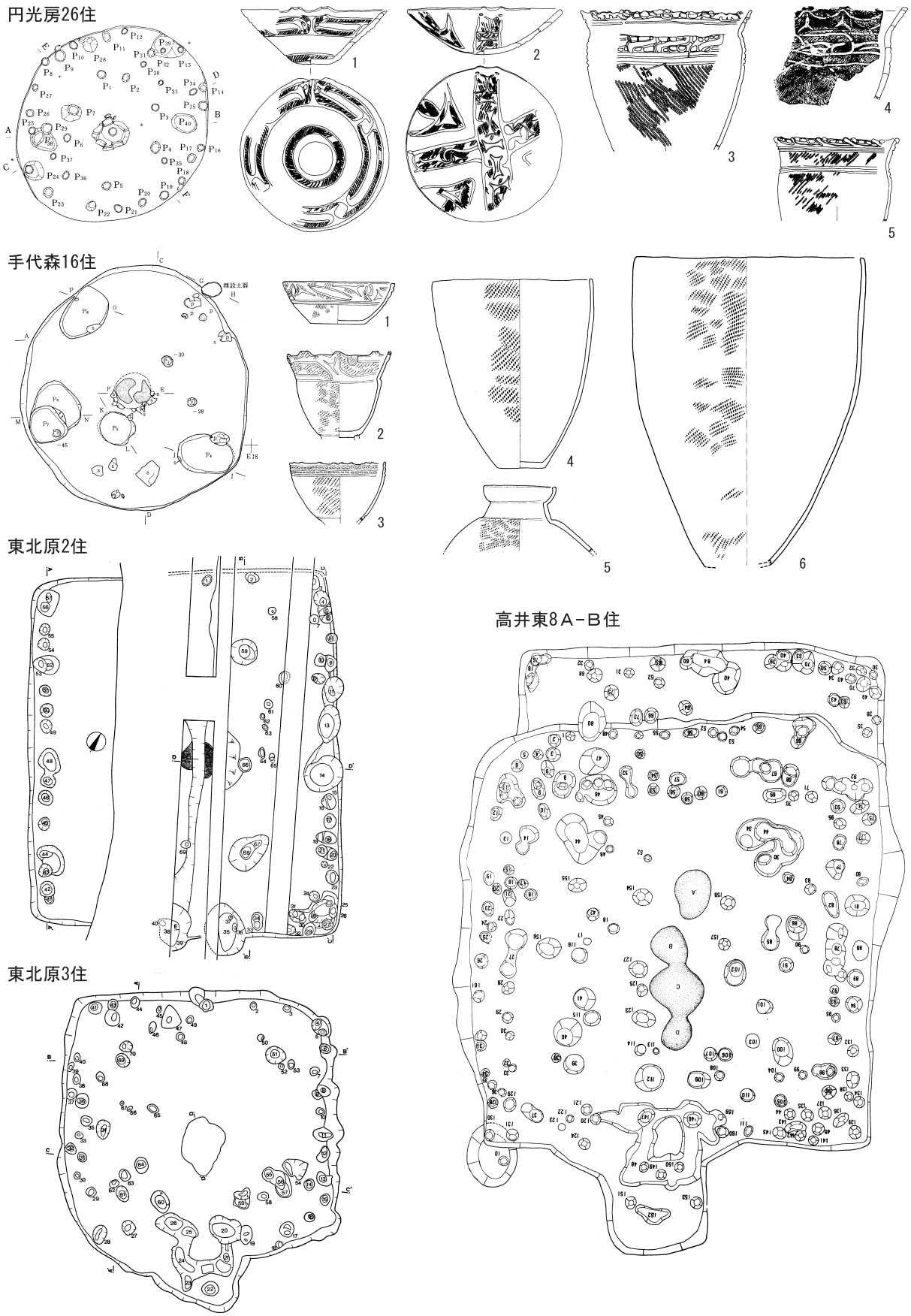
また、第３号住居跡は長径5.5ｍを測るほぼ方形を呈し、壁溝を持ち、４本柱を主柱とする構造である。炉は角礫を方形に並べた石囲炉である。安行Ⅲｂ式期の所産と思われる。出土土器は、後期から続く安行系の波状口縁精製深鉢土器１が出土している。方形で４本主柱、入り口部の対ピットと思われるピットも確認されることから、大宮台地の晩期安行式期の住居跡と同系の住居形態と推定される。

これらの少ない例からではあるが、秩父地方では、円形の住居跡と、安行系の方形の住居跡がほぼ同時期に存在し、安行Ⅲｃ式期にも円形の住居跡が存在していることから、それぞれの住居形態には系統差が現れていることが想定される。

秩父地方から離れ、県内でも北部地域の深谷市新屋敷東遺跡（新屋1992）でも、晩期の住居跡が検出されている。新屋敷東遺跡第６号住居跡（第35図）は径5.5ｍ前後の楕円形を呈し、浅い柱穴が円形状に並ぶ。その内４本を主柱と認識することもできる。炉は楕円形の地床炉である。また、第５号住居跡も径4.5ｍ前後の円形を呈し、柱穴が円形に並ぶ。その内4本を、第６号住居跡と同様に主柱と認識することもできる。第６号住居跡からは、安行系の波状口縁深鉢土器（1、2）が、大洞ＢＣ式系の土器（4）



第35図　晩期の住居形態（1）



第36図　晩期の住居形態（2）

と共に出土している。従って、住居跡は下平第３号住居跡と同様に、安行Ⅲｂ式期の所産と認定される。第5号住居跡からも、安行Ⅲｂ式の瓢形土器（2）や、東北瘤付土器系のモチーフを持つ深鉢土器（1）も出土している。

新屋敷東遺跡の住居跡が問題となるのは、出土土器が明らかな安行系の土器群で占められていることである。秩父地域の下平遺跡第３号住居跡は安行系の土器群で方形の住居跡であるが、新屋敷東遺跡の住居跡は安行系の土器群で円形の住居跡であるという点である。新屋敷遺跡の住居跡は４本柱の可能性があり、そうであるとすれば、安行系の方形住居構造と、円形の住居構造とが折衷しているのか、はたまた方形のプランを円形と誤認しているかのいずれかの可能性が考えられる。しかし、掘り込みが比較的深く、明瞭に検出される方形に廻る壁溝及び壁柱穴が検出されていないことから、円形もしくは楕円形プランを呈する蓋然性が高いものと判断される。土器の系統と住居の系統に整合性が見られないことになるが、それが実態であるのかは、現在では早急に解決する手立てはなく、今後の資料の増加を待って判断して行かざるを得ないと考えている。

秩父地域が隣接する中部山間地域での様相を見ると、晩期初頭の竪穴住居の検出例は決して多くはない。著名な例としては、長野県戸倉町円光房遺跡（原田1990）第26号住居跡（第36図）が挙げられる。第26号住居跡は長径4.4ｍ前後の楕円形を呈し、炉は川原石を６角形状に配した石囲炉で、全体的に掘り込みが殆ど確認されていないものである。多数のピットが円形状に存在するが、主柱穴は決め兼ねる。出土土器は大洞ＢＣ系の土器を伴う、在地の晩期前葉の土器群で、安行Ⅲｂ式平行となろう。全体的に、中野遺跡第1・2号住居跡、下平遺跡第１号住居跡、新屋敷遺跡第5・6号住居跡と規模や形態が類似する。

また、東北地方の晩期の住居跡は多数検出されているが、やはり晩期初頭の例は少ないと言えようか。晩期前葉の大洞ＢＣ式段階では良好な例が多く枚挙に遑が無いが、竪穴住居の形態は殆ど円形を基本にしたもので、主柱穴の不明瞭なものが多い。

代表的なものとして、中野遺跡第２号住居跡とほぼ同様な規模で、楕円形を呈し、柱穴とも土壙の重複とも判断しきれないピットが伴う岩手県柴波郡津南村手代森遺跡（佐々木1986）第16号住居跡（第36図）を挙げた。大洞ＢＣ式に比定される土器群が出土しており、１の浅鉢は口縁部に玉抱きに近い足の長い三叉文を、細長く斜位に施文する。この構成は、中野遺跡第２号住居跡出土の１の口縁部のモチーフを彷彿させる。

以上、大洞系の竪穴住居は円形を基本としていることが理解される。しかし、近年、晩期の平地式や掘立柱建物の存在が確認され、住居形態も一様ではないことが明らかにされている。そのような中で、竪穴住居の系列として、円形と方形があり、関東地方の方形は安行系の住居形態であることは明らかであろう。

第36図下段には、大宮台地における代表的な晩期の竪穴住居を示した。大宮台地においても晩期初頭の良好な住居跡例は少なく、前葉からは良好な住居跡が多くなる。

東北原遺跡（山形1985）第2号住居跡は中央部に撹乱を受けるが、長径7.4ｍの方形を呈し、入り口部の対ピットと壁柱穴が廻るものである。４本柱を主柱とするものと思われる。著名な動物型土製品（亀型土製品）が出土した住居跡で、安行Ⅲａ式～Ⅲｂ式にかけての所産と思われる。同じく第３号住居跡も方形で入り口施設を持ち、４本主柱の構造であるが、長径６ｍ弱の比較的小さな住居跡である。

また、高井東遺跡（田部井他1974）第8Ａ・Ｂ号住居跡は晩期の大型住居跡である。２軒が重複し、さらに8Ａ住居跡は２～３回の建て替えが行われている。第8Ａ号住居跡は長径9.2ｍ、短径8.9ｍを測り、安行Ⅲａ式土器が主体的に出土している。晩期安行式期の住居跡は、重複もしくは建て替えが行われている場合が殆どで、継続性が看取される。特に、大

型になる住居跡では顕著と言えよう。

このような円形と方形の住居形態の相違は、何に起因しているのであろうか。安行系の方形の住居跡は入り口施設を持ち、４本主柱で、壁柱穴を廻らせる構造で、後期安行Ⅰ式以降晩期中葉の安行Ⅲｃ式まで継続されている。また、円形の竪穴住居形態も、地域を変えて安行Ⅲｃ式まで継承されている。両者に系統差があることは明らかである。

ここであえて両者の相違を指摘すると、住居の上屋構造の相違を挙げることができよう。安行系の方形住居跡は４本主柱が太くしっかりしているものが多く、壁柱が廻ることから、屋根を葺き下ろさない壁立ち構造の家が想定される。切妻になるか入母屋になるかは判断しきれないが、壁立ちの方形住居は平地式もしくは掘立柱式（高床式）とも共通する要素を持つ。

一方、円形で主柱穴の不揃いな住居は、入母屋の葺き下ろしの構造が想定される。それは、東北地方を中心とする寒い地域で、雪国の住居形態を想定させられる。季節による住み分け形態であるかは別としても、山間部や比較的寒い地域での住居形態なのではなかろうか。

埼玉県の秩父地方や県北地方で、円形と方形の両者が混交する様相は、先にも述べたが、環境による形態の選択差ではなく、土器及び住居の系統差が何らかの形で現れているものと解釈される。早急に結論の出せる問題ではないが、情報の系統差という点から、今後検討を続けて行きたいと考えている。

さらに、注意しておきたいのは、今回の調査事例でも明らかであったが、柱穴とも土壙とも判断が難しいピットが住居内に存在することである。柱穴ならば問題はないが、他の土壙との重複であるとすれば、単なる土壙ではなく住居内墓壙の可能性がある点を指摘して置きたい。中野遺跡第１号住居跡のピット９からは漆製品が３点出土しており、蓋状の板状石で覆われていたことから、墓壙としての性格も否定しきれない。廃絶した住居内に墓壙を設ける行為は、およそ前期の後半段階からみられ、中期に於いては廃屋葬として特殊化するが、晩期にまで継承されるものであるとすれば、縄文時代の墓制にたな視点を提示するものとなろう。加曽利Ｂ式以降に墓域が確立化する動きの中で、屋内葬的な風習が継承されるのであれば、具体例を示せず、論は飛躍するが、同一墓壙内に多数の壷棺を追葬する弥生時代の再葬墓風習へのつながりの糸口が見出せるからである。今後の課題として置きたい。

最後に、遺物について若干検討しておきたい。中野遺跡からは波状口縁深鉢土器等の明瞭な安行式土器が出土しておらず、また、大洞系の土器も検出されていない。どちらかと言えば、中部、南東北地方的な土器群の様相の中に、安行式の影響が現れている在地的な土器群と認識されよう。

第２号住居跡出土の第35図1は口縁部と胴部に文様帯を持つ鉢状の土器であり、横連結する玉抱き三叉文は安行Ⅲｂ式や大洞ＢＣ式段階の三叉文に近い感じを受ける。まだ、明瞭に玉を抱いていることから安行Ⅲａ式段階に比定されるものと思われるが、その終末か、もしくはⅢｂ式初頭段階にまでずれ込む可能性もある。２の瓢形土器は、新屋敷東遺跡第６号住居跡出土第35図３や東北原遺跡出土の安行Ⅲｂ式段階の例と酷似し、注口土器の可能性がある。

また、中野遺跡第２号住居跡２の注口土器は、胴部文様が平行沈線に縄文を施文する単純な構成であり、安行Ⅲａ式に見出し難い要素である。覆土出土の破片の中にも平行沈線と縄文のみの破片が特徴的に含まれており、中野遺跡における一つの特徴と捉えることができよう。この平行沈線を多用する土器群は、花園町橋屋遺跡（高村1994）でも、共伴関係は明確にできないが、大洞ＢＣ式系土器と共に出土している。この平行沈線を多用する要素は、中部高地の晩期初頭の佐野式Ⅰａ、Ⅰｂ式にも見られる特徴であり、これらの影響と、安行Ⅲａ式とが折衷して、中野遺跡の土器群が成立したであろうことを指摘しておきたい。秩父地方の地域性を考慮すると、

佐野Ⅰ式の影響を考えざるを得ないであろう。

さらに、4の壷形土器や、5の深鉢土器は、その形態、羽状縄文の存在等から南東北の系統を考えるのが妥当であろう。

石器では、緑泥片岩製の石剣、石棒の未製品が多数検出されている。これらがそのまま機能していたかは判断されないが、製作途中品である可能性が高い。製作址としての可能性もあるが、今回の調査ではそこまで言及し得る資料は出土していない。

また、第2号住居跡の床面から翡翠の玉が出土している。酷似するものが蓮田市ささら遺跡（橋本1985）から出土している。大きさも、穿孔方法も類似するもので、関連性が窺われる。なお、石質の分析結果は巻末に示した通りである。

以上、今回の中野遺跡発掘調査は面積が狭かったものの、得られた成果は非常に貴重であったことが総括される。

＜参考文献＞

新屋雅明1992「新屋敷東・本郷前東」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集

小澤　守1991「秩父・上長瀞古墳群90」長瀞町上長瀞古墳群発掘調査会

小澤　守1999「秩父・辻遺跡97ー町内遺跡発掘調査報告書1ー」長瀞町教育委員会

小澤　守2000「秩父・袋遺跡96　秩父・辻遺跡97ー町内遺跡発掘調査報告書2ー」長瀞町教育委員会

小澤　守2001「秩父・堯田遺跡1996ー町内遺跡発掘調査報告書3ー」長瀞町教育委員会

小澤　守2003「秩父・六道遺跡1996ー町内遺跡発掘調査報告書4ー」長瀞町教育委員会

小澤　守2004「秩父・大滝遺跡2000ー町内遺跡発掘調査報告書5ー」長瀞町教育委員会

金子直行1987「北・八幡谷・相野谷」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第66集

金子直行2000「堀東・城西Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第257集

金子直行2001「まま上遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第242集

佐々木清文1986「手代森遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第108集

鈴木敏昭1983「台耕地（Ⅰ）」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集

高村敏則1994「橋屋遺跡」花園町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

田部井　功1974「高井東遺跡調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第25集

中島　宏1982「中郷」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第13集

橋本　勉1985「ささら（Ⅱ）」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第47集

橋本康司1995「下平遺跡」『秩父合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書』小鹿野町教育委員会

原田政信1990「円光房遺跡」戸倉町教育委員会

村田章人1997「原／谷畑」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第179集

山形洋一1985「東北原遺跡発掘調査報告ー第6次調査ー」大宮市文化財調査報告第19集

付編　中野遺跡出土石製小玉の石材分析

はじめに

中野遺跡２号住居跡床面から検出した石製品（第11図39）について、主要鉱物の分析を実施した。

遺物の特徴

分析対象とした遺物は径8㎜で片側からの穿孔が認められ、やや透明感のある緑色～灰白色を呈していた。質量は0.78ｇであった。

分析諸元

理化学的な分析は、主要鉱物の組成を得るためにＸ線回折分析法を実施した。

Ｘ線回折分析法の諸元は表－１のとおりである。非破壊分析の必要性から平行ビーム法で測定を行っているために、ややピーク幅が広がっている。また粉末法ではないために、回折結果は岩石試料固有の結晶の配向性に影響され、主要な回折線の強度比は、データベースに掲載されたものとは異なっているが、経験的に同定結果に重大な影響はない。

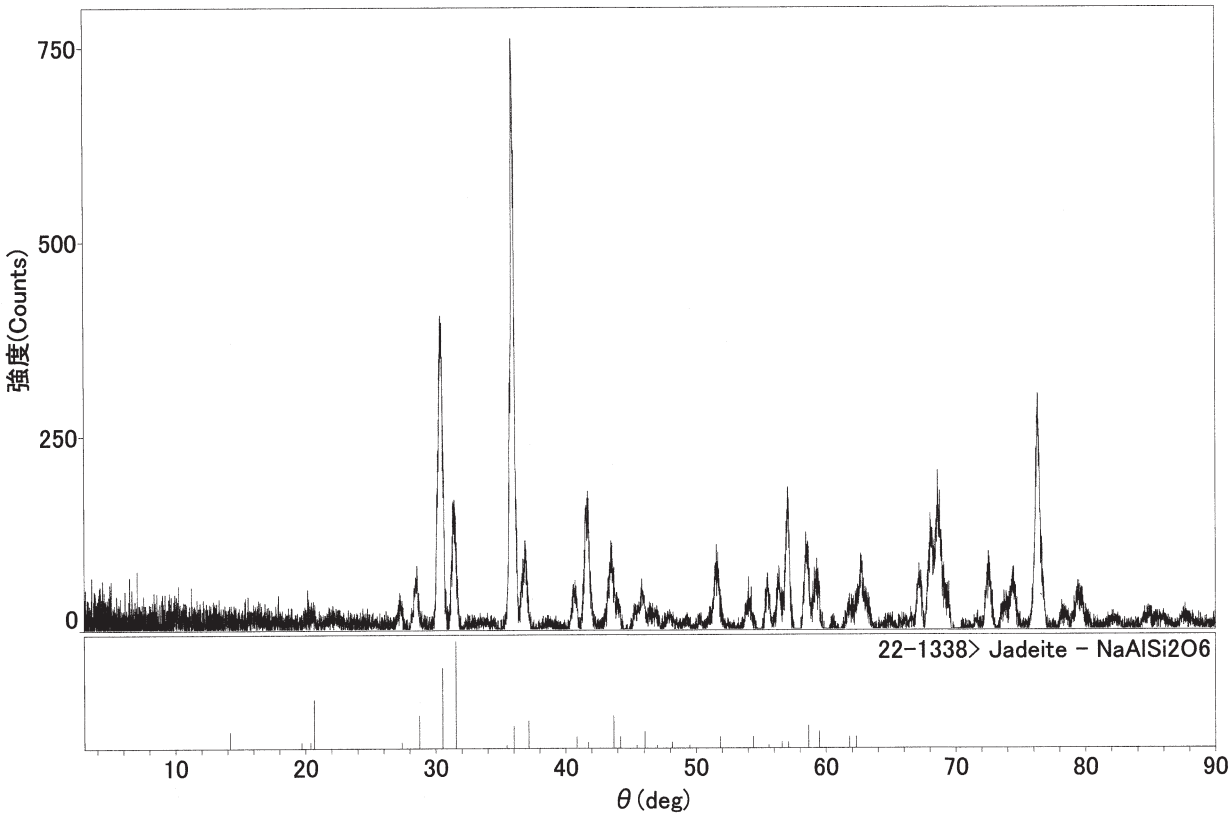
表－１　Ｘ線回折分析法の諸元

ターゲット：Cu	モノクロ受光スリット：なし
管電圧：40kＶ	走査モード：連続
管電流：40mA	サンプリング幅：0.01°
ｶｳﾝﾀﾓﾉｸﾛﾒｰﾀ：固定	走査範囲：3～90／°
ｶｳﾝﾀ：ｼﾝﾁﾚｰｼｮﾝｶｳﾝﾀ	積算回数：１回
発散スリット　：0.5 ㎜	スキャンスピード：2°／min
発散縦制限ｽﾘｯﾄ：10㎜	走査軸２θ／θ°
散乱スリット：解放	θオフセット：なし
受光スリット：解放	光学系：平行ビーム法

分析結果

Ｘ線回折分析法の結果は、図－１にプロファイルで示した。JADE6.0を利用し、ICDD-PDF DataSets1-51 Plus70-80Release2001のデータで同定を試みた結果、試料の主成分はjadite(翡翠輝石)であると考えられた。

県内出土の石製品で同様の形態を示し、成分としてjaditeの存在が理化学的に確定できた例としては、ささら遺跡出土例(埼埋文報告書47集185図-3)をあげる事ができる。



図－１　Ｘ線回折分析法の結果